
ふわり、舞う彼方の柚芽

遍駆羽御

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふわり、舞う彼方の柚芽

【Nコード】

N1861Z

【作者名】

遍駆羽御

【あらすじ】

音楽はアメリカと日本間に勃発した攻防戦時中でも人々に遊樂と差別をされながらも密やかに庶民に愛されていた。だが、音楽家^{はかせ}葉瀬蜜柑^{みかん}が国際コンサートで言った言葉「私達は戦争をしなければ、幸福に暮らす事ができないのでしょうか？」に感銘を受けた日本の首相とアメリカの大統領が会見を開き、平和が訪れた。日本の勝利を一生、奪ったと判断した一部の過激派による音楽弾圧によって、生の音楽は本土から失われた。だが、希灯島^{ういひこ島}にはまだ、音楽の息吹があった。それをもたらしめているのが希灯児童養護施設の子ど

も達で構成された蜜柑吹奏楽団と、葉瀬^{はせ}彼方^{かなた}を部長に何となく集まった希灯高の生徒 + 駄菓子屋のおねえちゃん + 小学生のふわり（地震で脳を損傷した少女。動物の鳴き声を語尾につけて喋り、笑顔しか表情に出せない）で構成された吹奏楽部、通称熊部。

その面々を中心に送るふわり、ふわふわストーリー

人は不幸の中でも最善の幸福を見つけられる。そんな願いを込めてお送り致します。

一話 ふわり、ふわふわ。

一話 ふわり、ふわふわ。

>—<

一年前、少年と少女は親子になった。

熱々しい風が吹く度に今年はまだ、終わらないのだと感じさせる希灯島の夏。希悲島とかつては呼ばれていたのだが、魔女と若者との恋物語が由来で呼ばれていた。だが、時代はあらゆるモノを錆びさせる。かつて、信仰みたく信じられていた物語も荒び、希悲島はいつの間にか、希灯島になった。そんな蘊蓄を葉瀬彼方は昨日の夜、同室の昼下彩夏から三時間に渡り、聞かされていた。まるでつまらないトークライブを拝聴しているみたいで何度も寝ようとした。だが、彩夏が放つチョップで何度も意識を強制的に覚醒させられた。品のない欠伸を連発するのも仕方ない。

「今日も晴天だね」

彼方が背を伸ばして、低い背がやっと、同年代の高校生と同レベルの高さに見える。つま先を浮かせ過ぎてボウリングのピンみたく倒れそうになる。慌ててバランスを保つ。

長い、長い夏休みが今日で終わる。だが、喧しく泣き叫ぶ蝉達の合唱によってそうとは感じない。

こうして、僕は大人になってゆくのだらうかとふと、彼方は感慨に満ちた想いを胸の中に宿した。そう考える度に胸の鼓動が十六分音符を刻み続けていた。怖かった……。このまま、大人になり、時間が刻まれてゆく事が。

蒼い虹彩を宿す右目に触れる。そして、左目に触れようとした。柔らかな素材に手が触れる。そうだった、眼帯を着けていたのだ。

今、彼方が耳に掛けている眼帯はとても、ファンシーな仕様だった。左目を保護する部位は熊型になっている。そこまでならば、有り得るかもしれないが、流石にアニメ調の黒光りしている鼻や口、円らな真つ黒いお目々はアウトだろう。

眼帯というモノを着けるだけで痛々しい姿に早変わりしてしまう。そんな理由から外せて歩けたのならどんなに楽だろうと日頃考えていた。

理由が在る。だから、大人になってゆくのも恐ろしかった。

これは普通の世界と彼方とを繋ぐ天上から吊された一本の細い糸のようだ。ぎゅっと、眼帯を握る。

「おい、彼方。ただいま！ ほら、挨拶しなさい」

前方から遠くに見える海を背景にして、彼方にただいまと手を振る父、葉瀬雄大と……ほら、挨拶しなさいと言ったのは雄大の手をぎゅっと、握り締めたドールのように可憐で繊細な小さな女の子に言ったのだろう。

お日様に照らされて元氣よく輝きを誇示する金髪。思わず、デコピンを喰らわせたくなるおでこ。額に掛かる予定であった髪の毛は左から右へと流れるようにヘアピンで固定されている。だが、わんぱくな一本の毛が重力に逆らうように逆立っている。

彼方の目はそんな奇抜な髪型の一点に留まった。

両目の青空色の瞳が彼方を品定めするようにきよきよ、動く。思わず、俯く。水たまりには突然、年端もいかない少女に凝視されて赤面している彼方自身の姿が映っていた。

水面には前髪を整然と整え、左右の髪が胸部まで滑らかに降りている少年の姿が映っていた。少年と知らない者が見れば、甘いお菓子の香りがする小さな少女と勘違いするであろう。

女の子みたいと言われている僕が女の子に赤面して、怯んでいるなんて間違っていると自らに言い聞かせて、頭を上げようとした。

首筋に人肌を感じて彼方は世にも奇妙な悲鳴と共にたじろいだ。それを指しながら爆笑している父、雄大は薄情者だ。

「彼方ちゃん、キューティー！」

「何が、キューティーですか、父！」

「キューティーだろう。小さな少女に小さな少女がぶら下がるなんて」

「え？」

雄大の指摘で年端もいかなない少女の姿が忽然と消失している事に気づく。

「ままあ、抱っこわん、わん」

耳元から愛嬌ある甘ったるい声が響いた。耳がきーんとする。

「ままあ、じゃないよ。僕はか、な、た」

「ままあ、ままあ、早くしないと地面にごつつんこしちゃうにゃん、むっ」

「ごつつんこ、しちや駄目だ」

慌てて、彼方の首筋に顔をへばりつけている少女のお尻を両手で持ち上げた。少女のお尻は卵のように軽く丸い。

「ままあ、ままあ、高いにゃん」

彼方におぶられてご機嫌な見た目が七歳前後の少女を無視して、雄大を睨み付ける。

「旅行とか、言って愛人の子を引き取りに言っていたのですか、マイ ファザー？」

「愛人？ いないいない。俺は蜜柑ちゃん一筋だぞ、それは彼方ちゃんが一番知っているではないかい？」

サングラスを掛けていて目は見えないが、言葉からは真実の厚みのような真剣さが漂っていた。

「どうやら、本当の事のようにですね。じゃあ、この子はまさか……」
彼方の表情は雄大に対する疑念の表情から、何とも表現し難い苦痛に満ちた表情を浮かべ直した。背後に聳え立つ白い建物を眺める。屋根の上にはトランプットを造形した石膏が固定されていた。その石膏の下には看板が設置されている。

希灯児童養護施設。

そう、ここは陽気な仮面を被った悲しい場所だ。天涯孤独であったり、両親や親戚から拒絶されて最後に救いを求める子供達の居場所だ。彼らが望んでくるのではない。もう、ここしかないから来るのだ。

彼方はこの住人になるであろう。年端もいかない少女を高い、高いする。ゆっくりと、ゆっくりと持ち上げた。

「わん、わん、めえー、めえー、わおん、わおん」

嬉しいのか、素朴な垂れ眉毛がもっと、垂れ下がっているような気がした。飾りっ気のない笑みを彼方に見せつける少女が独りぼちにならないように、いつものように頷いた。

普通ではない僕にでもそのくらいは出来る。

雄大は戸惑う彼方を見て強く頷いた。解っているよな、と呟いている気がした。

「名前は？」

「まあ、名前、忘れちゃったの。何だっけ？」

忘却……。本当にこの子は忘れてしまっているんだ。何処かで心のピースを一枚、落としてしまったのではないか？ と疑う程の暢気な笑みを返した。

その様子にしばし、無言になるが彼方は自分にこんな子なんだと言い含めるように頷く。

「そうか。じゃあ、ゆっくりで良いから思い出していこう、ね」

「にゃん！」

両手を万歳、と挙げる少女を恐る恐る地上に戻した。それを待っていたとばかりに少女は喧嘩を吹っ掛ける猫みたく鳴き、走ろうとする。彼方は何処か、危なっかしいにゃんこ少女の手を引き寄せた。ふわっ、と少女のチェックのスカートが開花した花びらのように一枚、舞った。長細い華奢な二本の足が見え隠れする。

きよっとんと、何で？ という表情で見つめる少女に彼方は質問した。

「何歳なのかな、君は？」

「えーとね、一、二、三、よん、五、六……」

自分の指を凝視して懸命に自分の年齢を数える。一指、曲げる度に大きく少女はお辞儀した。いや、少女的には自分の思慮に対して頷いているのかもしれない。

お辞儀をする度に一本、簷に収まらない気まぐれ者のくせつ毛はゆらゆらと揺れた。

「なな、八、九きゃん!」

飛び跳ねる少女を見下ろして、くせつ毛が乱れないように慎重に撫でる。少女がわざとくせつ毛の存在を容認しているのかもしれない。それはないと断言できない。

「九歳。小学生だね。偉い、偉い」

「偉いの? やったにゃん、にゃん!」

偉いと言われてまた、飛び跳ねるかと推測したが一点をじつと、見つめている。彼方の締めているアニメチックな猫の絵が貼られているネクタイに興味が注がれているようだ。

「これ?」

否定も、肯定もせずに少女はそそくさと彼方の背後によじ登った。払う間もなく、

「可愛いお目々当て」

少女は彼方の眼帯を無理矢理はぎ取ると鳥のように囀りながら、両手を羽根に見た立って飛んでゆく。

バタバタと羽ばたかせて。

地を飛ぶ少女が傍若無人ぶりを発揮して、彼方は啞然とした。みかんの絵が象徴的な自動販売機に寄りかかりながら良い大人であるはずの雄大が彼方を指さしていた。しかも、唾を飛ばす勢いで腹を抱えて笑っている。

「そんなに笑う事ないよ。全く、面白くない。ねえ、き……み」

僕の眼帯を返してよと言おうとしたが、彼方は言えなかった。

他者には視点の計れない彼方の虹彩も、網膜さえも、暗黒の海に沈んだ瞳が少女を射た。

金髪の癖のない髪を空気中に曝しながら、彼方よりも背の高い女性が嫌みのない開放的な笑顔を浮かべ、こちらに手を振りながらあかんべをしていた。セーラー服のような服を着込み、蒼い海へと溶け込んでゆくかのように海を目指している少女は彼方とは別の住人、絵画の存在のように思えた。まるで全てを包み込んでくれる母のようだと思った。彼方は喉を唾で潤しながら、恋い焦がれている事にはっとした。

止まらない胸の鼓動をぎゅっと、片手で握り締める。嬉しいことに止まってくれなかった。

「ままあ」

母に似た少女と母に似た女性は全く同じ表裏のない微笑みを浮かべて、彼方に飛び込んできた。

ままあで良いよ、おいで！ と両手を広げて迎える。

飛び込んできた温もりを離さないと少女であり、女性にも見える救世主に頼ずりする。

そう、離さないよ。

だって、左目が初めて僕の見たいものを見せてくれたのだから！

夏の香りが空へと消え去ろうとしている日、少年と少女は親子になった。

>二<

丁度、ふわりと出会った日から一年だから、ふわり記念日としてお菓子でも制作するかなと考えながら、ふわりをハンモックに残して畳の上に飛び降りた。

「ふわりに何、作るのかな？」

ハンモックの上で団子虫のように丸くなっているふわりに訪ねた。だが、返事は期待できない。まだ、彼方のお姫様は眠っていた。小さな寝息が穏やかな夢に委ねられている事だろうと想像させてくれ

る。

制服というものがあれば、服を選ぶのも楽なのだが……残念な事に彼方の通う希灯高等学校は私服だ。八方美人を自負している彼方はどの服装が人々の反感を、主に教師の反感を買わないのかと毎日が冷や冷やものだ。

数分、悩んだ結果がいつもの半袖ワイシャツと所々、穴の開いたジーパンという出で立ちになる。我ながらセンスがない。でも、人に話題にされない事が一番だと彼方はアニメ調の猫が描かれたネクタイを締めながら言い訳をする。

「まあ、降りるにゃん」

ハンモックの紐をぎゅっと、両手で握り締める仕草をしているふわりは欠伸をした。寝間着である大きめの白いワンピースからミニチュアな肩が覗いていた。

「その前にふわり、ご挨拶」

「ハローわおん」

「ハロー？ 良いかな」

彼方にハンモックから降ろしてもらったふわりはしきりに動き回る。突然、その動きを止め、流暢な英語で淀みなく言った。

「今日のご飯はアイスクリーム食べたいな。出るよね？ 出るよね？ ままあ」

「日本語で言ってくれと在りがたいのですけど、ふわりさん」

そう述べた彼方自身も英語で言った。ふわりとは違い、高校生並みの語力な為、舌足らずなどとも聞きづらい印象だ。

ふわりは父、雄大が言うには米国の上流の白人家庭で何の不自由もなく、暮らしていたらしい。ディスプレイの脇にある緑色のバケツへと、ふわりはよつんばの姿勢で目指していた。

今日の目標は白いマシユマロのようだ。バケツから白いマシユマロの包みが覗けて、ふわりは涎を皿に垂らしていた。目は心なしに輝いている。

「今日、ご飯はアイスめえー」

「アイヌはお昼に買ってあげるからね、今は我慢」

最近、お菓子を食べに食べているふわりの脇に腕を通して、マシユマロから遠ざける。以前よりも若干、重く感じた。

彼方はふわりの蒼い縫いぐるみお目々が見えるように屈んで視線を合わせて言った。

「癩癩起こさないでよね」

「にゃん、わあん、ぴー、ぎゃお！」

癩癩を起こすどころか、忘れたようにふわりは畳の上で自らの身体を時計回りに回転させていた。何が楽しいのか、理解に苦しむが、
「う、可愛いな」

その時、背後から扉を開ける音と共に生暖かい空気が彼方の背中を刺した。茹だるような猛暑であった昨晚の対策の一つとして、冷房を二十度に設定してふわりを包むようにして寝ていた。その空気は彼方にまだ、夏だと抗議しているようだった。

空気に彼方も心底で抗議をする。ふわりの為なんだ。あの娘は泣くという身体的な表現を何処かに忘れて生きているようなんだ。僕が気遣わなければならぬんだ！

「おはよう、彼方さん。今日も彼方母様の代わりにふわりの支度を手伝いに来たんですけど……」

彼方の部屋に入ってきた大きな耳が特徴的な少女 瞳坂妃那が困惑していた。その困惑している理由はすぐに妃那自身の口から明らかになった。

「なんで、ふわりはお菓子、お食べになっぺいらっしやるのですしょうか？」

言葉の通り、ふわりは畳の上にバケツの中身を曝してお煎餅をぼりぼりと食べていた。お煎餅を嚙下する度にふわりの小さな首は歌い踊った。

今、妃那の顔を直視したら、呪われるに違いないと彼方は敢えて目線は合わせずに妃那の髪左右に付いている桃色のエクステンションに目線を合わせた。

ああ、僕はまた、完璧主義者に言葉という空襲を受けるのか、神よ！ とげんなりした心境のまま、ふわりからお煎餅を取り上げた。「可愛いよね、ほら、むにゃむにゃしてる」

一応、般若すらも凌駕している能面を顔に糊で貼り付けた妃那に話を逸らそうかと提案してみた。妃那はゆっくりと首を横に振る。

「あれほど、ふわりに過度な栄養は与えてはなりませんとお話致しましたよね？ 聞いてませんか？ ちなみに昨日の午後六時に言いましたわよ。明確な理由だって、」

こいつは嘘つきだ。彼方の左目は述べていた。

丸々と太った黄色い雛の姿 妃那は卑しい笑いを新たな菓子に手を伸ばすふわりに向けていた。

咄嗟に熊の形をした眼帯に手を伸ばして装着した。メルヘンであり、メルヘンでもない世界を拒絶するのは彼方にとって自分が普通の人間 メルヘンの国の住人ではない事を再認識させる。

「聞いていらつしやいますの！ だいたいからしてわたくしの顔を見てお聞きになって下さい」

「すみません」

「すぐに謝りますわね、彼方は。もう、いいですわ」

妃那は溜息を吐き、手に持っている艶やかな着物をハンモックの上に乗せる。口をもぐもぐと動かしているふわりは妃那が近寄ってくるのに気がつき、彼方の所へと急いで駆け寄ろうとした。

「わん、くうーん、にゃん」

切ない声を上げて妃那の両手に収まったふわりは激しく抵抗する。

「ふわり、ままあ、怒るよ」

「にゃん」

彼方の一声でふわりは俯きながら着せ替えさせられるのを待つ。

ちよつと可哀想な事をしたかもしれない。後でアイスクリームを食べさせてあげようと彼方は箆笥の引き出しから、雛の縫いぐるみの形をした財布の中身を凝視する。

中身は……十円玉が五枚、百円玉が七枚。ちよつぴり、ブルー！。

「今日のふわりは、アイスクリーム何個食べるのかな」

昨日は五パック食べたなと嘆息するが、写真立ての中でふわりは舌の細部が目視できるくらいに大きく口を開いていた。写真を撮ったのは今年の春先の事だったから、桜の花びらが一枚、ふわりの頭上で花びらが鎮座していた。

その滑稽さに誘われて、彼方は写真立てに手を掛ける。

「そこでのやにやしている吹奏楽部部长、ふわりの着替えを堂々と鑑賞なさるおつもりですか？」

ふわりは白いワンピースを脱ごうとしているのか、裾に手を掛けていた。咄嗟に彼方は自分の右目を指で覆った。指と指の間から美味しそうなお腹が眺望する事が可能だった。勿論、眺望した。

痣一つとしてない白い雪地に小さな落とし穴が存在していた。叶うならば、大地の感触を指先で踏み締めたいと脳内で叫ぶが、叶うはずはない。嘆息する。

「ああ、待つて！ 僕、外に出るから」

わざとらしく、慌てふためいた物言いをしながら、静かに後ずさりする。それを不審者を軽蔑視するような視線を態とらしく、送っている。

冷房機によって冷やされたドアノブに手をやり、一気に回した。

外へ出ようとするが、自分が何も手に持っていない事に気がついて振り返る。

「鞆、忘れるとこ、だった。鞆、鞆、鞆！」

鞆、忘れてしまった苦笑い、てへえっ、とはにかんだ彼方は足音を立てて走ってきた妃那に頭を掴まれ、回れ右させられる。

無言で背中を押されて、汚物の処理をするかのように彼方を外へと摘み出す。

摘み出された彼方は前方に見えるキラキラ光が反射している海を眺める。

「今日も蒼いな、海」

呟いてみると、鞆が背中にぶつかってきた。きつと、妃那が持つ

てきてくれたのだろう。

背中に当たった鞆はコンクリートの床に寝そべった。鞆は見事なまでの落書きが施されていた。兎らしき二足歩行の動物がお前が私の子 子猫を殺したのねと吹き出しを通して読者にメッセージを送信していた。兎と対峙していた馬は四足歩行だった。馬は吹き出しでそうだって言ったらどうする？ と嘲笑していた。

彼方はそれを読み終えた後……

「海、蒼いな」

>三<

海、蒼いなと途方に暮れる感傷を抱かせてくれたふわりは机の上に正座していた。フォーク一本を口に加えている。とても、現在の服装からでは想像付かないような度を越えたお行儀の悪さだ。猫柄の着物がふわりのきまぐれな猫ぶりを体現しているようだ。

赤い鼻緒を机に何度もリズムよく刻んでいる。電車の走行音を表現しているようだ。

彼方はふわりのしつけを半ば、諦めていた。いや、諦めと言うよりは暖かく見守る。紅茶を一口啜った。

しばらく、作り歌を歌ったり、誰に対する訳でもない拍手を披露していたふわりの目の前に彼方の母 蜜柑がスマイル一つと共にハンバーグを置いた。

「はい、ふわりちゃん。お食べ」

「にゃん、にゃん、わん、わん、ぴー。ハンバーグめえ」

ふわりと対面している彼方はそうだねという意を汲んで頷いた。真似をしてふわりも頷いた。頷く度に跳ねるふわりを蜜柑が脇に手を潜らせて抱き上げる。

蜜柑の顔つきはふわりに似た要素を持っていた。金色の前髪を卸し、後ろ髪を黒い輪ゴムで束ねていた蜜柑の微笑みはふわりの人目を気にしない笑みのようだ。

娘をあやすようにふわりの身体を揺らす。

「ほら、彼方ちゃん。ふわりちゃんが食べられやすいように口に運んであげなさい」

そう言いながら、彼方の膝に何の了承も取らずに、ふわりを載せた。

「まあ、あんする、ふわりわん！」

ふわりは自分が手に持っているフォークを彼方に差し出した。差し出されたフォークを手に持ってふわりが食べやすいようにハンバーグを何口にも切り分けた。その間にも食べたいよ、という羨望の眼差しを彼方に向けている。

「はい、良く噛んで食べるんだよ」

「うにゃん」

ハンバーグの欠片が届くのを待ちきれないのか、頭を前に出す。

口の中に入れ、数秒もしない間に、

「おかわり、があ！」

嘴を何度も開閉させておかわりという期待に胸を膨らませるふわりに再び、自分のハンバーグの欠片を与える。その様子を隣のテーブルの椅子に腰掛けて、横目で観察していた妃那は非難の声を挙げる。

「また、太りますわよ。ふわりさん」

「太ったってたったの五十グラムじゃないですか？ 誤差の範囲ですよね、母？」

「彼方ちゃん。女の子はね、少しでも痩せていたって思う生物なの。そうよね？ みんな」

ふわりのお腹に手を当てようとしていた彼方の腕を掴み、蜜柑は周囲を見回した。

みんなと呼ばれたそれぞれ、銘々食事を取っている女の子達はうんと頷いたり、静かに微笑を浮かべたり、激しく同意！ と言ったり……実に様々だ。だが、誰もが幸福に満ち足りた顔をしている。

ここが寂しい場所 児童養護施設だというのに。

児童養護施設でもある葉瀬家には何故か、愛らしい多感な少女達が集う。さながら、女子寮のようだ。いや、そうではないだろう。少女達はここしか居場所がないんだ。紅茶をゆっくりと口に近づけて息を吹きかけているおませな小学生の少女 深田あけなも、パンにかぶりつきながらお手製の単語帳に目を向ける眼鏡の女子中学生 国枝澄も、食事が終わったのか恐竜の絵本を熱心に読んでいる幼稚園女兒 御名下ぷりんも、どの子にもここしか居場所がないんだ。彼方には彼女達の本当の姿を射貫く事ができる。だからこそ、何でも相談できる気の弱いけれど、優しいお兄ちゃんを演じなければならぬ。それが普通の人間を詐称している葉瀬彼方の処世術だ。

人の人数が多いということが付与しなければ、普通の一般家庭の一室だ。ダイニングキッチンのは流れにはボールや、箸、鍋などの調理器具が容器に張られたお湯の中に浸かっている。二つ繋いだ机にはチャーハン、御握り、卵焼き、ハンバーグ、納豆、キムチ、サラダ、サンドイッチ、串団子、お萩、クレープ、モンブラン、チョコレートケーキ等が並べられており、今も少女達が姦しい会話に花を咲かせて片手間のように品定めしていた。各テーブルの中央にある観葉植物は彼女達の元気を吸い込んで艶のある緑葉を保持している。本当にみんな、元気だね。

彼方はふわりに目を向けてみると、ふわりはハンバーグの載る皿に顔を突っ込むようにして、ハンバーグを犬食いしていた。頬に仕込んだ風船はいつ、割れてもおかしくない程に膨らんでいる。着物に欠片が飛び散り、染みになっていた。それを気に留める事もない。隣でキムチを食べる妃那も咎める気はないようだ。

「あのお、僕の近くでキムチは、う」

「キムチはお肌に良いんですよ。ほら、ふわりも」

「ぶいちゃん」

キムチの赤々しい姿をふわりは見なかった。ハンバーグを口に入れたまま、籠もった声で拒絶した。目の前にある空になった皿を舐め続ける。粘着質な音が彼方の耳に飛び込んできた。

「き、嫌いのようですわね、キムチ」

そう言いつつも彼方の皿の上にキムチを置こうとするのを慌てて、手のひらを振って嫌だと思し表明した。キムチは世界で一番嫌な物体ナンバーに十五年連続で彼方ランキングの中で殿堂入り寸前で居座っているのだ。

それでも妃那の清ました顔は静かに喰え！　と言っている。無理だつてえ、の！

「あ、だったら私に頂戴。可愛い、可愛い妃那お姉ちゃん！」

見かねたあけなが小さな両手を前に差し出した。しょうがないな、お兄ちゃん菓子一ねと打算的なわざとらしい笑窪を彼方に一瞬、魅せた。苦笑するしかなかった。

「お世辞上手ね」妃那はあけなの両手にキムチを三枚の載せる。「はい、キムチ三人前！　ついでに彼方も食べなさい。夏バテにも効果を遺憾なく、発揮するんですよ」

「遠慮……ないですよね？」

差し出された一枚のキムチを機敏に避ける。

「あなたが倒れたら、ただでさえ少数精鋭の我が希灯高校吹奏楽部、略して熊部が成り立たなくなりますわ」

狙いを研ぎ澄ます野性的な両眼が彼方の隙を窺う。

冗談ではない。熊部の為を思うならば、僕にキムチを食べさせるよりも部員を確保しましょうよと目で相手を殺す。

殺気なんぞ知った事ないとキムチが特効を賭ける。

「僕が体調を崩すかもしれない設定ありきの行動なんですね。じゃあ、遠慮無く、無理です。無理です。吐いちゃいます」

箸でキムチと対等に渡り合う彼方と、不吉な赤い汁を床に垂らすキムチとの視線が絡み合う。極限の緊張の中で紡がれる駆け引きに敗北した者こそが、この争いの敗北者となるのだ。

周囲は場違いな拍手の嵐を巻き起こした。さながら、昼下がりの水族館におけるラッコショーの様相を見せる。

「食べなさい。そして、キムチの偉大さを知ると良いですわ」

「当初の目的から擦れが生じていると思うのは僕、だけでしょうか！」

「負けるものですか」

激しい空中戦を展開させる箸とキムチ。箸の強さを認めたのか、一度離脱をして箸よりも高みへと上昇してゆく。そうはさせるかとキムチより上へ、上へ、上へと箸は行こうとする。

「おっと、両者の実力は拮抗している模様です。解説者のマイハニーはどう分析しますか？」

「食べ物で遊ぶなんて駄目だぞ、彼方ちゃん、はあと」

それぞれ場の雰囲気飲み込まれた良い大人であるはずの雄大、蜜柑が浮ついた口調で悪のりを惜しげもなく放出させた。こんな大人になるものかと彼方は嘆息する。

「戦場では息一つが命取りですわ」

「し、しまった？」

シュチュエーション的にはそう言わねばならないという元来のサービス精神が彼方を窮地に追い込む。唇にキムチの強引な着陸を許してしまった。

キムチは迷うことなく、外壁を開けて重要拠点の完全なる制圧を果たそうとしていた。

唇を通して伝わってくる柔らかい感触と鼻孔を滅多刺しする痛臭に顔が歪んだ。素直に負けましたと言ってしまうおう。

彼方は口を開こうとした。その時、

「まあ、ふわりを構って」

キムチを握りつぶして、床に放り投げた。身体が粉々に砕けたキムチは突如、出現した敵軍の伏兵に睨みを利かせた。だが、ふわりは目をくれずにたんぽぽのような麗らかなお目々を彼方に向ける。

キムチが自分の唇に引っ付いていた過去を消去すべく、ふわりを片手に抱いてダイニングキッチンへと足早に移動する。蛇口から必要以上の量が流れ出し、躊躇なく唇で流れを妨げた。

そして、腕で唇の水分を掻っ攫う。不適な笑みを妃那に与え、

「油断が戦場では命取りですよ、妃那副部長」

「台詞の割には敗残兵ですわね」

「すみません」いつもの口癖を言った彼方だが、突然の頭痛に頭を押さえて俯いた。「また、なのか、ついてないな僕」

片方の手で抱いていた彼方よりも六歳年下の女性は心配そうに眉を潜めていた。女性の長い金髪が彼方の腕にふわっと垂れていた。

だが、さらさらとした感触はない。そこにあるのは空気だ。空虚だ！

眼帯をはぎ取り、苛立ちを隠すことなく、床に投げつけた。

真実を隠す事さえも時として、この呪われた瞳をくれた愚者は許してくれないのだろうか？

>四<

希灯児童養護施設のあった草薙村という人口七百人程度の村には教育機関は存在しなかった。希灯児童養護施設の子しか登校しないであろう学校を財政難である村としては創設できないのだろう。尤も、過疎化の進む村は希灯山の向こう側にある鶴下市と合併しようという話があるくらいだ。当然の政策だろう。朝五時に起床し、蜜柑の運転する大型バスには乗らないで、村に三時間に一本しか来ない鶴下駅前のバスに乗って希灯山を越えて鶴下駅でローカル線に乗り換える。まどろこしい岐路を経て、小学校、中学校、高校、大学が集約された学生街と揶揄されている希灯市へ到着。そこで彼方達の登校は終了するわけではなく、路面電車に乗り、流れる学生街の平凡な風景を眺めつつ、高校まで歩く。これが毎日、毎日、ほぼ毎日続く儀式だ。

ハードな登校から一時間目の古典、二時間目のマラソン、三時間目の太平洋戦争に関する歴史、四時間目のスケッチ……ちなみに彼方は妃那を描いたのだが、わたくしの理想とはほど遠い、リメイクと呼ばれてやり直しを五度要求された。それらが幼女体型である彼方には堪えているのか、妙に身体が重い。だが、大半は今、彼方の

肩に膝を付けて寄りかかっている子供大人のせいであろう。

陽光の日差しが全速力で世界中を酷暑にすべく、活動していた。世界中の人々は茹だるような暑さをひしひしと感じているだろう。例外なく彼方も感じていたので肩から伝わってくる余分な体温に内心、苛立っていた。希灯高校で一番、日陰率に高い購買室のはずだったが、ほとんど日に浸かっていた。

革靴を何度か揺らして、貧乏揺すりをした。

「おや、おや、お姉ちゃん、お疲れのようだ」

子供大人 背の高い狐が戯けたように両手を広げる。

「左目が言うことを聞かないんだ。それより重いんですけど？」

それを無視して鬼のような形相を浮かべている狐 彩夏は窓から見られる風景を眺望する。木の間と間からサッカーをしている猫や、犬が認められた。みんながみんな、無邪気にサッカーをしているのではない。在る者は顔を歪ませて何かに怯えている。在る者は苦笑しつつ、周囲にいる仲間達を見回している。無邪気という存在がいないならば、彼方がぎゅっと、指先を捉えているふわりという小さな救世主の存在だけだろう。

ふわりはメルヘンの住人ではないよね？ という言葉が口から飛び出すのを必死に押さえた。もし、違っていたらふわりを愛せなくなる。

「お前は脆弱だ」彼方の肩が震えているのを指でなぞった。「お前はいつも、お人好しだ。今だって、委員会に急いでいかなければならない友人の為にパンをこうして、購入している」

「まあ、美味しいよ、このパンにゃん」

パンという言葉に反応して嬉しそうにふわりは自分の口の中にあるパンを見せびらかす。ふわりの舌に細かく加工されたパン屑が幾つも転がっていた。彼方は静かにふわりの顎に手を添えて口を閉めた。

だが、ふわりは手に持っているフランスパンを大きさに口を開いて含んでまた、彼方に見せびらかした。

狐は身の毛のよだつような暗い視線をふわりに向けて手をふわりの頭上に載せて撫で始める。

「よし、よし、ふわり」

「ぷいわん」

ふわりは脱兎のごとく、狐の指先から逃げて無表情のまま、彼方の背中に身体をくつつけた。

「ひよつとしたら、君のように俺の本当の姿が見えているのかな？
続きだが、でも、俺は知っている。君が左目で見ている可愛らしい世界に、」

「からかうのは止めてくださいよ、綾夏さん」

カウンターに並んでいるパンの一つ、一つをビニール袋に入れながら滑らかに喋り出す狐の言葉を制して彼方が口を挟んだ。

「ばあか」狐はそう言っつて、彼方にはち切れる寸前のビニール袋を手渡して「これはあ、い、だ。可愛らしい世界に君が怯えている事を。本当の君はふわりより脆弱な兎ちゃんだ。俺はそんな君だからこそ、好きだ」

「嘘を言わないで下さい、狐さん」

左目を手で押さえた。左目を封じて右目で全ての事象を見つめる。偽りのみを見つめた。狐に見えた者は活発的な女性だった。彼方の知っている十九歳独身女性の御菓子屋るーぷの女店主である昼下彩夏だ。

カウンター付近のパイプ椅子に腰掛けて髪全体にシャギーの掛かっている鋭敏な刃物を連想させる髪を手で弄くりながらチョコバーを吸っていた。前髪は黒瞳が隠れていてじめじめした印象を持たせるが、左右の髪が肩まで後ろの髪は腰の辺りまで伸びている為、ワイルドという言葉に類する女性であろう。だが、気怠そうな瞳にはワイルドさを感じない。そして、エプロン姿が全く似合わない。バランスが良いのか、悪いのか定かではない女性だ。

チョコバーをレシートに入れるプラスチック容器に突っ込んだ。

「嘘じゃないさ、なあ？ ふわり？」

綾夏がふわりに近寄ろうとするが、ふわりは彼方の背中に顔をくつつける。何故か、ふわりは彼方以外の人間に触られるのを極端に逃げたがる。いつも、嫌な顔をしない分だけ、どうふわりが思っているのかは、彼方以外にしか理解できない。

「まあ、一番愛してるの、ふわりわん！」

ふわりの暖かい息が背中に当たり、ワイシャツが必要以上のぬくもりを与える。それ以上にふわりの子供体温は夏では暑苦しい。だが、彼方には精神安定剤なのだ。欠かすことの出来ない薬だ。

「おや、おや、嫉妬のようだ。嘘じゃないよ。ほら、パンを割引にあげたらどう？」

彼方の持つビニール袋に向かって彩夏は片方の目を瞑り、また開いた。

「一円じゃないですか」

「一円でも金に関係ないスマイルよりはいいだろうよ。それより注文の品、マウスピースだ」

カウンターの引き出しから、御菓子子の箱より少し大きい程度の箱を出してカウンターに置いた。彼方の表情は子供のように晴れ晴れした表情へとぱっと、開花した。

無理もない。その箱の正体は桜菜社の開発したマカリオイのマウスピースが梱包されているのだ。

彼方は焦る気持ちを押さえて、嬉しそうに微笑む狐に五万六千円を手渡した。

すぐに箱を乱雑に破ってマウスピースに口を付けようとした。

出来なかった。

付けようとした瞬間に悪夢達が手招きした。

私はまだ、描いていたかった私だけの音の螺旋を！ という楽譜からおぞましい声が聞こえて来た。それだけではない人々の顔が見る見る内に猿、ナメクジ、甲虫、羊などに変質していったのだ。

彼方はとっさにその手を払った。狐は彼方に同情の視線を送っていた。

「毎度あり。音楽が廃れてすっかり、経つというのに頑張るね、桜菜社」

彩夏は上手く、悪夢を逸らそうとする。

「もう、一社しかありませんもね、頑張つて貰わないとね」

「それにしても、熊部部长。まだ、こんな所で鳴らしているのか？」
「演奏出来る人間が一人しかいないんだから仕方ないよ。非公式だしね」

彼方は溜息を吐きつつ、購買室の隅にあるスペースに目をやった。今にも人間を襲撃しそうな熊の巨大な絵の衝立背後側にはトランペットや、ホルン、クラリネット、フルート、サクソ等がケースに入つて保管されていた。保管という言葉は正しくないかもしれない。放置されていたという方が表現としては正しいだろう。衝立の後ろに彼方は周り、トランペットとホルンのケースに挟まれるようにして置かれていた可愛らしいパンダ型のバッグを開けて、その中にある黒い小物入れの中にマウスピースを入れる。ついでにパンダ型のバッグの中にあるマスクのような眼帯を装着した。上向きのチャックを素早く閉めて、パンダ型のバッグを手を持つ。

彼方が振り返ると、彩夏は、彩夏のままに見えた。思わず、笑みが溢れた。それを見た彩夏は顔を顰めて口を開いた。

「格好良くないな。そ、う、いうのは。早くトランペット持つてるようになりな」

「あの悪夢のような光景が彩夏！先輩に解るんですか？」

「分かるはずがない。だがね、人殺しの娘よりも怖いものなんてこの世にないだろう？」

彩夏はカウンターを小指で軽く小突いた。よく聞いてみると日本国歌のリズムを刻んでいる事と鬱々しい顔をしていない事から本気の発言ではないようだ。見逃せる発言ではない。

「彩夏先輩、僕。怒りますよ？」

「怒ってみるよ、ほら」カウンターの外から出て本日のお薦めのパンである焼きそばパンを無造作に持ち、彼方を指さした。「怒れな

い。恐れているんだ。勘はよく、的中する事で有名だ」

語尾を伸ばしていた彩夏のお腹が鳴り、話しは途切れた。そして、四方八方確認してからあるう事か、商品である焼きそばパンの封を開けて嚙り始めた。

「商品のパンをたべ」反論しようとした彼方の視線を殺すように冷徹な眼差しが彼方に向けられて思わず言う。「すみません」
「ほらよ」

彩夏は半分、焼きそばパンを喰らったところで彼方に残りの焼きそばパンを差し出した。彼方は自分に、という意味で自分の締めりのないヘタレ顔を指さす。そうそうと彩夏は嬉しそうに何度も頷いた。だが、彼方は首を横に振った。

ちえと舌を鳴らした後、綾夏は残りの部分を彼方にはあげないというかのように一気に口の中に放り込んだ。即席風船の出来上がりだ。

「放課後、見に来てやるから期待しないでおくよ、彼方ママ」
呆れて立ち去ろうとする彼方の背に単調な口調で勝手な事を言っていた。彩夏は去年までは希灯高校の生徒であったが、今は部外者だ。それに彩夏には駄菓子屋の経営という立派な仕事がある。草薙村には子供達が喜びそうな駄菓子はそこにしか売っていなかった。そこに通う子供達の大半が養護施設の子供達だ。そういう事情もあり、油を売らずに帰って欲しかった。出張販売は昼休みだけだ。彼方は元来の気の弱さからそう言い返す事が出来なかった。

購買室の扉を閉めて無駄に長い廊下を歩き始めた。ふわりは彼方に抱きかかえられていつも以上に、ご機嫌な笑顔を関係ない他生徒に魅せていた。ふわりがここにいる事情をしている女子生徒達はふわりを見て口々に可愛いとか、抱いてみたいとか黄色い声を上げていた。男子生徒は何故か、顔を赤面させながら俯き加減で足早に去っていった。知らない者は彼方とふわりの顔を交互に見比べた後、妹さんですか？ 可愛いですねと言う人が大半だった。

「ぎゃあお、にゃん、わん」

「勝手だな、あの人は……僕もか」

ふわりがいなければ、彼方は歩く事すら出来なかった。眼帯を装着していても心が拒絶反応を起こしてしまう。人の姿が変わって見えて、おまけにそれが浮かべる表情が真実だった。ふわりという内面も外面もあまり変化のない少女は彼方にとって浮き輪だ。広大な海に浮かんでいる為にはその浮き輪が必要だった。

また、ふわりも彼方の側を片時も離れようとはしなかった。本来ならば、小学校で友人と共にたわいのない学校生活を送っているはずだった。

彼方とふわりは蜜柑に連れられて、蜜柑の知り合いの精神科医の元を訪ねた事があった。彼方自身は何もそこまでする事はないと戯けていた。ふわりは島を出て都会に行くからなのか、終始遠足気分ではしゃいでいた。

下された診断結果は……共依存症。

「僕は信じない。僕はふわりと一緒にいたいだけだ。病気じゃない」「ままあ？」

彼方の痛み等、露とも知らないふわりは持たされていた袋の中からあんパンを取り出した。それから、慌ててクリームパンも取り出す。どっちも食べたいようだ。

「どっちかにしなさい」

その言葉に不満を漏らさずに少し迷った後、ふわりはあんパンを見つめた。

「あんパンにするの？」

「わん」

「じゃあ、クリームパンは袋に閉まってね」

クリームパンをビニール袋に閉まってあんパンの封を切る。あんパンをふわりが食べようとした時だった。

「お食事タイムは終わりですわ。昼の練習よ」

横からふわりの食べようとしていたあんパンを奪い取って妃那がそう宣言した。妃那はサクスの入っているケースを握り締めてい

た。

「ちよつと待つて下さい。ふわりはともかくとして僕はお昼ご飯をまだ、食べていないですよ」

妃那は少しの逡巡も見せず、ふわりの双眸を見たまま、指であつち、いけ！ と表する。

「じゃあ、部長はいらないわ。ふわりさん、音楽やりましょう」
「ぷいわん」

反射的に返したという表現がぴったりな程、ふわりの返事は速かつた。スキップをしながら、彼方の周囲をぐるぐると回り始め、妃那の言葉を聞く気などない素振りをみせる。

「ぷいじゃありません。本当はありとあらゆる楽器を使用して、初見で完璧に奏でる事が出来る……。いや、途中からアレンジさえもしていたわ。そんな貴女の才能をわたくしが見逃すともお思いですか？」

言葉を捲し立て、彼方の方へと前進してくる。凄く剣幕だ。その剣幕に押され、彼方は保健室の保険便りに背をくつつけた。正面には美しい顔が台無しだよと言いたくなる表情で詰問している妃那。その背後には窓ガラスにテープで厚紙が固定されていた。その紙には太いマジックペンで廊下では静かに 風紀委員会と書かれていた。風紀委員会さん、ここに風紀を乱している人がいますよと彼方は内心では顰め面を相手に浴びせたいが、愛想笑う。

「また、冗談を」

「また！ 彼方、何度、話したらお分かりになるのですか？」

彼方は頭の中でこれが何回目か、計算を試みた。三十回目くらい再現されたところで記憶が曖昧に、混沌に散らかってきた。どうやら、耳にたこができる程には言われているらしい。

「だってね。マウスピースを指さしてこれ、何、ままあ？ って聞いていた子だよ」

ふわりの頭を撫でながら同意をさせるように首を傾げた。ふわりも同様に首を傾げてみせた。

「嘘おつしやい！」

「信じられないよ」

信じられないと彼方が口にしたように彼が妃那から聞いた与太話
はともではないが、信憑性は残念ながら低いとしか言いようがな
い。音楽に関しては彼方も、妃那もそこその実力のある奏者だ。具
体的には二人とも幼い頃、両親の仕事の都合でウィーンに滞在して
おり、互いにライバルとして多くの大会で大人達に混じって上位を
脅かしてきたのだ。楽器は問わなかった。ピアノであったり、ヴァ
イオリンであったり、琴であったり……と音を奏でるものならば何
でも山のように制覇していった。その激戦のおかげで日本で数年後
の再会を果たしてからも、良好な関係を築ける間柄には位置してい
ると彼方は自負していた。トランペットの女王と呼ばれていた彼方
の母、葉瀬蜜柑レベルでないと困難といえるであろう超越技巧を、
ふわりが単独で奏でるなど、不可能に近い。

何故なら、ふわりは壊れてしまっているのだから……。
彼方を見つめるふわりの瞼に涙のようなものがきらりと光ったよ
うな気がした。

ともあれ、今一度、思い起こしてみよう。妃那の体験を。

>五<

あれは去年の冬、わたくしがまだ、ふわりを心の底から嫌ってい
た頃の話ですと彼方に話し始めたのを覚えていた。彼方は何故、彼
女がふわりを嫌っていたのかを知っている。十年前の日本とアメリ
カの間で起きた攻防戦争。発端は日本に駐屯していた米軍のミサイ
ルの誤射に一般市民が大勢巻き込まれ、死者二十名という惨事を起
こした事件から始まる。当時、過激派である浅間和男氏が総理大臣
の座に納まっていた。彼の意向が広く反映され、日本にとっては自
衛の為の攻撃、アメリカにとっては防衛の為の戦争が勃発した。双
方の国民は互いに憎悪の霧の中で、互いの国の正義を叫び続けた。

その一人に最初の誤射で両親を亡くした幼い妃那の姿もあった。

当然、当時はふわりを率先して虐めていた。情けない行為である事にわたくしはふわりが一生懸命、生きているという事実を知ってやっと改心できた。

当時は音楽に嫌悪さえ、催していた。

全ての窓には雪がびっしりと粘着していた。外の情景を目視する事は適わないが、断続する事もなく吹き荒れる風音で辛うじて外の荒々しい情景を思い浮かべていた。一見、寒々しく見える希灯児童養護施設の一階ではあるが意外と保温性に優れていた。長椅子に座り、既に三時間程、読書に勤しんでいた。身体を挟んで左右に本が選別されている。右側がまだ、読んでいない本。左側が既に読んだ本というような按配だ。また、一つ本、日本の政治に関する本を読み終わり、左側に積んでゆく。バベルの塔はまた、一段と高さを増した。

座った姿勢で伸びをして、両手を高く挙げた。欠伸を出そうとした時だった。何処からか、合奏らしき音色が風音に混じって聞こえてくる。それは足下からのようだ。

足下を微動させるほどの音響にわたくしは驚きを隠せず、啞然としてしまった。唇が微かに震える。いつもならば吐き気が、嫌悪が訪れるはずなのにいつまで経っても訪れなかった。何故だ？ 頭の中に疑問が浮かぶ。

「え？ これはわたくしの母の曲、吹奏楽の為のソロ 空へ」

耳に全神経を研ぎ澄ませながら、それが単独の音、すなわちソロである事を知った。何小節にも渡り、楽器が代わる代わる音を奏でる事から答えに辿り着いた。

嫌悪という言葉がゆっくりと消えゆくのを感じた。胸の中が振動してゆく。背筋が強ばった。

これ程にまで、天賦の才を備えた奏者が児童養護施設などにいただろうか？

葉瀬彼方、葉瀬蜜柑ならば試行できるかもしれない。だが、この

曲は金管楽器、打楽器、木管楽器と絶妙なりズムで綱渡りのように繋げてゆく危うさというリスクを潜んだ常識外れの曲だ。並みの神経では到達し得ない響きが恐らくは地下室で繰り広げられている。わたくしは顎に手を当てて、いつの間にか考えに深けてしまった。意識を外に向け直す。

「誰がこの曲を奏でていらっしゃるのですか？ 聴かせて下さい素晴らしい曲を」

クツションが敷かれた階段を下りながら、焦る気持ちがり言を口から吐かせた。心なしか、両頬が緩んできた。当然だ。わたくしの母親の作曲した曲が再現されているのだから。

防音扉を乱雑に開けた。

凜とした表情でマウスピースに口を当てて、ホルンを構えた。少女は蒼い瞳を閉じて諦んじていた神曲を。

激しく速い曲調に合わせ、指がピストンに糸が張り巡らせているかのように正確に触れてゆく。

歌ように刻まれてゆく。それは一つの極みだ。暗譜や、何十時間の練習によってほんの一握りの人間がそれを得る。初見でそれやっけて除ける人間はさらにほんの一握り。

明かりの灯っていない薄暗い空間に太陽のように周囲を灯す金色の髪と空のように透き通った白い肌という組み合わせを持つ絶世の美少女がホルンをタオルケットの上に置きながら、片手でバッチを持って机を叩く。ティンパニーの代わりらしいが、貧相な音を除いては、リズムがしつかりと取られていた。

演奏を一人でこなす人物の表情には大人の冷静さが宿っていた。

「え……ふわり……さん。不可能よ」

その呟きには耳を貸さずにふわりは直ぐ、側に置いてあったトランプペットを手に持つ。既に取り付けてあったマウスピースに口を宛がう。

身体全体で息を吸い込む動作をせずにそのまま、甲高い音を響かせる。部屋をたった一人で音の海に変えた。

「暗譜、演奏を同時にやってのけている」口から賛嘆の声が止め処なく流れる。「息が乱れない。それだけの連符が続けばブレスの一つや、二つ……初見ならば入れてしまうのが普通」

ふわりは怪訝そうにわたくしを見つめた。そして、ぷっーという間抜けなロングトーンをした後、マウスピースからゆっくりと唇を離して溜息を吐く。その表情はマナー違反だと呆れていた。

「ごめんと言う代わりに、

「素晴らしい。何処でこれほどの技巧を学んだんですの、ふわりさん？」

その言葉に対する答えなのは分からないが、ふわりは虚ろな視線で天井を見上げながら、英語を口ずさんでいた。わたくしに聞き取れるのはリスト、ユメという言葉だけだった。海外にしばらく、渡航していない為、語力が錆び付いていた。何もこんな時にと自分が腹立たしかった。

行き場のない苛立ちと興奮を重ねるように、ふわりの肩に触れて振り向かせる。

「ふわりさん、貴女！ 何者？」

振り向かされたふわりは頬を膨らませて目尻に涙を溜めていた。今まで、彼方さえも見たことがないと言っていた子供らしい怒りの表情があった。

「柚芽の邪魔をしないでおばさん」

わざと分かり易いようにゆっくりと舌足らずの英語は紡がれた。

トランペットをタオルケツトの上に置いた後、ぎろつとわたくしを睨み付けてから一目散に立ち去ろうと走った。

わたくしは直ぐさま、ふわりの腕を掴んだ。

「待ちなさい！」

眉間に皺を寄せて頭だけをこちらに向けたふわりの顔が、徐々に柔らかな顔へと変化してゆく。眉間に合った皺は不自然な程に消え去り、霧が晴れるように厳しい目つきをしていた蒼い瞳は柔らかくな目つきに戻った。

しばしの間を経て、いつもの無垢な笑みが現れた。だが、何処か、不自然なようにわたくしには思えた。

「ぷいにゃん」

怯える様子もなく、必死さもなく、わたくしの腕を引っ張って逃れようとしたり。わたくしが手を離すと勢いよく、ままと何度も愛嬌のある声で叫びなら逃げていった。

「ふわり……」

ふわりという少女に得体の知れない才能という不気味な怪物が眠っている。そして、わたくしはその怪物をほんの少しの間だけ、垣間見たのだ。

地下の暗い箱のような一室が実は現実と、幻想を繋ぐトンネルだったのではないだろうか？

>六<

今、思い起こしてみても妃那の話には矛盾点が多くある。ふわりは怒りの感情を知ってはいるが、怒りの表情を作れない子だ。

「これ、なあと、ままと？」

ふわりの手のひらにはハートの形をしたシールで封のされた手紙が乗っかっていた。

「多分、ラブレターだよ、ふわり」

こんな子だよと片眼を瞑って彼方は妃那にアピールした。妃那もわかってくれたのか、一呼吸吐いた後、

「彼方、何処の殿方から？」

ふわりは彼方の拳を開き、渦中のラブレターを掌に載せて何が楽しいのか、にこにこことままと、ままと喚いていた。ふわりの両手は彩夏が手に持っているあんパンを掴み取るうとしていた。

彩夏はふわりのほっぺや唇の周りに付着したパン屑を見回した。

「不許可ですわ。熊部マスコットが太ったら、マスコットではなくなっけてしまいますわ」

「にゃん、わおん、きゃん、きゅん、めえー」

「可愛い声を出しても不許可ですわ」

そんな不毛な言い合いに参加せずに、彼方は険しい目つきで手紙の内容を確認する。ふわりの元にこのような手紙が届くことは多々ある。ふわりの母役である彼方は当然、全部の内容をチエツクする。検閲により、ふわりの元に届かない手紙の条件を頭に巡らせる。

一、手紙と一緒に得体の知れない御菓子と同封されている。または、一般に流通している御菓子ではあるが、箱を開けた形跡がある。
二、手紙の内容が小学生であるふわりに不釣り合いな場合。卑猥な内容、宗教的な内容、政治的な内容、訳の分からない内容等が該当する。

三、ふわりを中傷する内容や、ふわりを虐めますよという犯行予告等の生命の危険性がある内容。

四、異性からの手紙は迷い無く処分いたします。

手紙の主は騎士差太郎、四番に該当する。封を切らずに彼方は日頃のうつつぶんを晴らすように手紙を千切りにして窓を開いて捨てた。さながら、元手紙であった紙吹雪はゆつくりと園芸部の花壇へと落ちていった。園芸部の部長、深木真字はふわり親衛隊を自称しているから、騎士の名が残っていたならば彼を抹殺しに行くだろうとふと、彼方は思考した。

「騎士差太郎さんからだよ。剣道部の」

「止めておいた方が良いでしょう。彼、ロリコンよ」

「まあ、ろりこんってなあに？」

「ふわりを食べちゃう怖い悪魔の事だよ。安心してまあが全部、倒してあげるから」

ふわりに視線をやると、ふわりが床を何度も踏みしめている。下駄が乱雑なリズムを鳴らしていた。

「ふわり、しいしいー？」

「にゃん」

「仕方ないですわね。練習は中止と致しますか。熊部部長、これ」

自分の事態に一考として思案を巡らしていない垂れ笑顔のふわりを一瞥して、妃那はサックスの入ったケースを彼方の胸に押しつけた。彼方はケースを受け取り、苦し紛れな顔で頭を下げる。それを見届けて、妃那は小さく鳴くふわりを抱っこした。

「わん、じゃないでしょう。毎回毎週、着物なんて着てくる。裾を捲ってあげるから静かにするんですよ」

今にもどうにか、なってしまうと言わんばかりに足をばたつかせるふわりを無視しながら妃那は歩き出した。彼方もそれに続く。

「十分以内で頼むよ」

俯き加減のまま、床を見て彼方は呟いた。床には綿埃が一方所、ぼつんと存在していた。まるで今の自分のようだと彼方は溜息を吐く。妃那がどのような顔をしているのかは分からない。床の上には妃那の顔は存在しないのだから。

僕とふわりは共依存症という名の赤い糸で結ばれている。

「すみません」

口にしてみて誰に対する謝罪なのだろうかと彼方はしばらく、思考の迷宮を彷徨った。

>七<

人々の意識は空を飛ぶ。意識というのは常に冒険者なのだ。

垂れ幕の端を掴んで、トランペットを持った黒いドレスを纏った若い女性を彼方は細部に至るまで見逃さないと目を凝らしていた。

日本人と白人のハーフである彼方だから流れるような金髪の髪が珍しかった訳でもなく、片栗粉を被ったような白い肌が羨ましかった訳でもない。その女性の素性が葉瀬蜜柑二十三歳である事を知っている息子である彼方は、そんなどうでもいい美貌には注目していない。ピストンの上で小枝が撓るように動く蜜柑の指達に彼方は心奪われているのだ。

頬に冷えた感触を感じて怪訝な表情を浮かべて彼方は振り向いた。

彼方の嫁を自称している瞳坂妃那がいた。彼方よりもその少女は一歳年下の六歳だった。ミルクティーの入ったペットボトルを両手に持っていた。そのうちの一本が彼方の頬を直撃したらしい。

敵つい表情をしている彼方に構わず、妃那はミルクティーを差し出す。

「ティータイムにしませんこと、彼方？」

「馬鹿？」

彼方は人の耳で聞き取れる最低限の声で言った後、コンクリート剥きだしの薄汚れた壁に貼ってある張り紙を指した。そこには飲食厳禁、足音厳禁、音声厳禁と英語で丁寧に記載されていた。幼い頃から彼方も、妃那も英語という言葉が溢れているウィーンで暮らしているのだから理解できないはずはない。

それでも妃那はミルクティーを差し出した手を引つ込めない。どうやら、ここへ来た理由を忘れているようだ。世界に名を轟かす名奏者が集うコンサートを蜜柑は一年一回、自ら主催し、自らも出演している。そのコンサートに彼方達は音楽の技術を盗む為に舞台裏まで見せて貰っているのだ。勿論、それは彼方の母が主催者であるから可能なのだが。

「母、格好いい。やっぱり、憧れだよ」

彼方は感嘆の呟きを漏らしつつ、舞台の風景を見入る。

トランペット四名が一齐に息を吸い込んでから、一つの音色が会場中を包み込んだ。

全く、ぶれのない音色は聴く者、全ての心を震わせる。彼方の心も震わせていた。

トランペットの音が合図であったかのようにフルートが美しい旋律を奏でて、それにサククスが便乗する。オールバックに髪を整えた彼方の知るナイス紳士な瞳坂晋太郎がタクトを振りながら、ちらりとホルンに視線を送ると鳥が水面に波紋を起すようにホルンがピアノニッシモからピアノへと徐々に移行させてゆく。そして、完全に主流へと紛れ込む。作為的なものを感じない。溶け込むミルクテ

イーのミルクのように。

初心者はピアノという記号をただ、音量を下げて奏であると勘違いする節がある。弱くという日本語が勘違いさせるのだろう。プロ達は一ハ一サルで打ち合わせをしている訳でもないのに楽曲の一小節、一小節に相応しい付加効果を記号という曖昧な表記から読み取り、それらを実践しているのだ。センスという言葉は付加効果をどのように付けてゆくか？ という点では決まる。

彼方と妃那は既にセンスという言葉を追求する存在になっていた。一つ、一つの音を耳で捉えて、優しい雰囲気醸し出すピアノ、激しく勇ましいフォルテ、激しく響くピアノ、急激な変化を伴うクレッシェンド等の記号を頭に描く。自分ならば、このように奏でるだろうと。彼方の頭の中には金管楽器、木管楽器、打楽器に至るまで楽譜が入っていた。頭の中の楽譜は既に朱色に塗れている。

「マザコンなの？ 馬鹿？」

妃那は彼方の横にあったパイプ椅子に腰掛けた。軋む音を耳にした彼方は内心、何処か、速く行ってくれないかなと舌打ちしたいくらいに苛ついた。だが、日本流のコンサートという性質上、不可能だ。

しばらくして、妃那もやっと、コンサートの情景に目を向けていた。おもむろにキムチの入ったビニール袋を、肩に提げていたポーチから取り出す。密閉されていて、鼻をつくような悪臭はしなかったが、赤々しいお姿はキムチそのものだった。

悪魔が野に放たれる前に彼方は駄目と両手でばってんマークを形作る。顔を顰めた後、妃那は従った。

「お父様、格好いいですわ。けれども、わたくしの夫である葉瀬彼方には適いませんわ」

「そうかな？ 僕は堂々と指揮棒を振る姿なんか真似できないけどね」

「お父様は指揮をするにあったって、ほとんどの楽器の基礎を学んだと言ってらしたわ」

「だから、チューバが五本、トランペット七本、フルート三本、サクソス十本、ホルン四本とか、あるんだ。長年の謎が解けたよ、妃那」

「後付ですけどね」

二人が次の曲に移るまでの休憩時間を利用して小声で会話をしていると、何処からともなく死にそうな声が聞こえてきた。

「もっと……描きたかった。私の曲を！」

彼方はその声の主を捜して、首を右往左往する。その音源はすぐに特定された。隅に置かれた譜面台の上に載せられた譜面から声は聞こえたのだ。

「え！」

「ちよつと、彼方。舞台裏よ」

責めるような目つきで彼方を妃那は睨み付けた。

「すみません……けど、声？」

踵を返した彼方が目にした者は、妃那ではない別の何かだった。巨大な黄色い羽毛に覆われた雛がパイプ椅子に人と同じように腰掛けていた。

雛は彼方の困惑した瞳を円らな瞳で覗き込んでいた。

円らな瞳が怖い。その中に浮かぶ無防備な好意が有機物であるかのように手で掴めそうだ。かつて……幼稚園の鶏小屋で飼育係だった彼方は円らな瞳がキュートだと言って内緒で一羽を自分の家に招待したくらいだった。今は円らな瞳が無性に怖いのだ。全てを見透かされ、こちらも見透かしているような気がする。

「どうしたんですの？」

「雛？」

「わたくしに決まっているではありませんか？」

羽根をばたつかせている雛を、妃那を彼方は無視する。そして、次の曲の為に舞台を整えているスタッフの慌ただしい動きを確認する。彼方の心には荒波が何度も人々を攫っていた。収まる様子がない。

「雛」

何気に呟いた独り言と共に今までで最大級の波が彼方を攫っていた。

人間のスタッフであったはずの存在が、別の種に変わっていた。ナメクジが這い回りながら、健気な歩調でティンパニーを舞台の方角へと運んでゆく。甲虫が羊の背中に譜面台を乗っけている。猿が図面を見ながら蟻にこれはこっちだと言いなながら指示をしている。

「鳥、牛？ 犬？」

彼方自身が口に出したような動物も含めて、様々な動物が舞台から舞台裏へと、舞台裏から舞台へと行き来している。呆然と立ちつくすしかなかった。脇からは冷たい汗が流れ、夏とはいえ、効き過ぎな空調も相まって背中汗の作用で氷を背中に引っ付けているような悪寒がした。いや、それが故の悪寒ではない。

母はどうなったのだろうか？ 母だけは人間でいて！ 僕を異様な世界から連れ出して！

「ちよ、ちよっと、彼方」

妃那と違う。妃那じゃない動物の声なんか彼方は聞く気にもなれずにその言葉を最後に耳を塞いで、舞台へと走り出した。

舞台の垂れ幕が下がっていて、客席と遮断されていた。だが、私語が許されるはずはない。まだ、コンサートは続いている。

「みんなが動物になってゆく。僕がおかしくなったのだろうか？ これは夢なのだろうか？」

そう呟きながら彼方は母、蜜柑を見た。そこにいたのは陰気な顔をした真っ白い猫だった。どことなく、白い毛や、白い髭に気品を感じるが彼方の求めていた者とは違う。

「彼方ちゃん、だ、」

蜜柑は彼方に話し駆け寄ろうとするが、拒絶するように耳を塞ぎなら舞台裏にいる雛すら目もくれずに扉を両手で開き、誰もいない蜜柑の控え室に駆け込んだ。そして、すぐさま鍵を掛けた。鍵が掛かっているか、何度もドアノブを回して確認して、やっと一息吐く。

扉に背中を滑らせながら尻餅をついた。

それを待っていましたと言わんばかりに勇ましい叫び声がテープルの上に置かれた楽譜から発せられる。

「私はまだ、描いていたかった私だけの音の螺旋を！」

「楽譜が喋っている。なんで？」

何処かに仕掛けはないのか？ これは蜜柑や妃那が彼方の為に仕掛けた意地の悪いどつきりではないのか？ と一縷の望みを込めてソファアをひっくり返したり、空のトランペットのケースをひっくり返した。そして、彼方は真実を映し出す鏡という道具を覗き込んでしまった。

「僕の瞳……黒い」

虹彩から色が飛び出したかのように全体的に黒く染まっていた。彼方自身でなければ、左目がどの方角を見ているのかわからないだろう。

「不思議な小僧だな。お前には音楽の神様という奴が付いているやもしれんな」

楽譜が穏やかな声ながらも嬉々として言っているのが、彼方に伝わってきた。拳を握り締めてテーブルを両手で叩いた。

「冗談じゃないよ」

自分でも驚くほどの低い声が口から飛び出た。

楽譜の嘲笑う声が部屋中にしばらくの間、響き渡った。

>八<

人々の意識は空を飛ぶ。意識というのは常に冒険者なのだ。つまりは役立たずの部長は窓から眺望できる路面電車を眺めたり、その周辺を通る人々の数を数えつつ、思い出の中に飛び込むことで最高の現実逃避をしているのだ。

彼方は暇を持て余していた。椅子に座りながら、椅子の脚を床から微かに浮かせたり浮かせなかったりを何度も繰り返していた。

なんとなく切なくなる放課後に彩りを添えるサクスの哀愁に満ちた音を邪魔するように彼方の奏でる椅子の音色は不協和音を生む手に持ったトランペットは夕日の陽を浴びて光を反射させていた。

昼間は購買室だったがいや、今でも購買室だが……。それを無視して熊部の彼方、妃那とマスコットの存在のふわりは銘々に椅子に座っていた。

いつの間にか、サクスの音はぴたりと止んでいる。

「部長！ 部長！」

「あ、はい。どうしたんですか？ 妃那さん」

刺々しい妃那の声にようやく、空飛ぶ意識を自分の中に取り戻して首だけを向けた。欠伸が出た。人間だからしょうがない。

「ふわりを止めて下さい。あの子、何してるんですの？」

「わん、にゃん、めえー、しゃあぁ」

ふわりは横にしたチューバのベルに頭を突っ込んで籠もった甘声を発していた。何やら、遊んでいるようだ。

「さあ？ 僕はふわり観測所じゃないからね。とは言えね……」彼方は自分の両膝を叩いた。「ふわり、おいで」

その言葉を受け取ったのか、ふわりの身体は一瞬、ぴくっと震えた。直ぐさま、ベルから頭を出して四つんばのまま、彼方へと歩み寄り、彼方の膝に触れる。

「ままぁ。ふわりの声が変に聞こえたよ。ふわり、何処か壊れた？」
両膝にふわりを座らせてから彼方は答える。

「大丈夫だよ。いつもの愛らしい声」

「相変わらず、母子してるな、お前ら」

そう退屈そうに溜息混じりで声を吐いた彩夏は購買室の商品であるはずのクレープパンの封を切った。カウンターの上に座ると、クレープパンにかぶりついた。

自分も、と妃那はキムチの入ったビニール袋を通学鞆から取り出して封を開けようしたところを彼方の難色に溢れた顔を見て断念する。

「綾夏さんも練習して下さい？」

「あー、今日はパス。気持ちに乗らないんだ。ほら、勘で？ センスでしょ、俺？」

「センスという言葉を激しく間違えてますよ」

「まあ、トランペット吹くわおん？」

タオルケットの上に置かれたトランペットをふわりは手にとつて、ベルの部分を彼方の頬にくっつけて悪戯娘ばい笑顔を見せる。

「ふわり、僕は」

「怖くないもお。こうするにゃん」

ふわりはとつさにトランペットに装着されたマウスピースに唇を当てた。首を振りながら頬に息をため込むが、風のような微音しか鳴らなかった。それでも顔を真っ赤にして音を鳴らそうとする。

「わかった。やってみる、か」ふわりからトランペットを手渡してもらい、マウスピースの穴を凝視する。「よし！」

「よし！ 間接キッス、キッス、キッス、キッス！」

食べかけのクレープパンをゴミ箱に投げ捨てて、音頭を取る彩夏。「にゃん、わん、めえ、もお、うきゃあん」

音頭に反応して、奇声を発するふわり。

「ロリコンですわね。婚約解消してよかったですわ。お幸せに」

婚約解消はまた、別の理由なんだけどなあと心の中で妃那の発言に突っ込む。

「連中の声は幻だ彼方」

集中できない周囲の雑音をかき消すようにマウスピースだけを真っ直ぐ、見つめる。心なしか、手が震えた。

「おお、おお、おお」

妃那と彩夏がタイミングを合わせたかのように同じ言葉を言った。「集中できませんよ。今日は以上！ 今日にはケーキ屋さんによって帰宅。お疲れ、皆さん！」

彼方はトランペットを素早くケースに仕舞い、熊の衝立の背後に置きながら早口で言葉を紡いだ。その言葉の通り、通学鞆を持って

さつさと歩いてゆく。

ふと、踵を返して突っ立っているふわりの手を引いた。

「敵前逃亡は良くないと言いたるところだが、ケーキは彼方部長様の奢りだよな？」

「当然ですわよね？」

綾夏は椅子を適当に廊下側の壁に並べて、妃那はサックスをケースに入れて手に持った。通学鞆は肩に通す。

「まあ、ケーキ、ふわり、一、二、三きゅん食べるじゃあ」

「仕方ないな、今日だけだよ！」

「今日だけがこの頃、続くな」

「何か、隠してません？」

「ふわり、まああの身体検査だ、ゆけ！」

「にゃん？」

「難しいか？ それで良いんだ、ふわり」

ふわりさえ、居てくれれば良いんだよ。

それがふわりに通じているのかは左目を使わない限り、読めない。それが普通の生活なんだと夕陽を背に彼方は熊部とその関係者に囲まれてわいわい喋りながら下校した。

少女が望んだ音 一

少女が望んだ音 一

> 一 <

窓から外を眺める。今の私にはそれが精一杯だ。最近意識の混濁が続いていた。どうやら、長くないらしい。

眼下に写るのはかつて、現実であった夢のような世界が終末した荒涼風景。背の高い雑草は私のお気に入りだった場所である噴水を包んでいった。いつの間にか、噴水の水は枯れ果て、代わりに居座ったのが雨水だった。茶色く濁り、前のような太陽光を受けてキラキラ光り、透明な水には青空が映える風景はない。

窓から外を眺めた。今の私にはそれが精一杯だ。時間さえも私を取り残し、希望という朝、絶望という夜を何千回と繰り返した。

眼下に写るのはかつて、嫌気が込み上げてくる程に長々しい暇が満ちていた風景。庭で野良猫に餌をあげていた場所が、今は腐った木材の下敷きになってしまっている。木材が乱雑に放置されてもう、私のような子供が走り回れる場所ではなくなっていた。

窓ガラスが風で揺れる。

ガタツ、ガタツ、ガタツ。

「にゃん、探検、探検、わおん」

窓ガラスに混じって女の子の奇声が聞こえた。

「危ないから入って来ちゃ駄目よ」

口のない口で、手のない手で何年も放置された洋館の危険性を伝えようとした。だが、私の声は少女に届いていない。

私自身だから叫ぶのだ！

「柚芽！ 危ない！ 来ては駄目。柚芽も知っているでしょ？ ここは土砂崩れで半壊した柚芽の家なんだよ！」

やってくるはずの足音と対峙する為にかつて、柚芽であったはずの私は木製の扉を凝視した。目などないのだから凝視という言葉は正しくないのかもしれない。ただ、異様な状態で存在している事自体が過去に例がないのだから、何者？ と問う人間が出現しても答えられないだろう。

足音が近づいてきた。私が私に会うのは、これが初めてのことで、いつの間にか、意識が在った私と、普通に生まれてきた私。会話をすることが出来たとしたらどんなに楽しい事だろうか？

扉を開けっ放しにして、入ってきたのは見た目が七歳くらいの小さなお姫様のような着物を着た女の子だった。桜菜柚芽。歳は十歳お尻付近まで伸びた金髪は記憶の中にある五年前の姿と同じだ。だが、不幸なことに背はあまり伸びていないらしく、五歳児として背が高かった柚芽は今や、百二十五センチ。小さい頃、希望していたクールビューティーとはほど遠い甘い飴の匂いがするような出で立ちだが、可愛いから許すという感想を胸に抱きながら私は柚芽を見つめた。

「にゃん、めえー、ぎゃお！」

竹籠を握り締めた腕を何回転か、回しながら遠心力の成せる技か、中に入っている食彩豊かなお饅頭達は落下せずに踏ん張っている。

しばらくして、柚芽はお饅頭達を弄ぶのに飽きたのか、ペンギンの絵と形を持ったクッションに飛び乗った。柚芽の身体がクッションに触れた途端に埃が部屋中に散らばった。柚芽の鼻孔に入り、何度も柚芽はくしゃみをしながら、いやいやと首を振った。

ペンギンの羽根を握り締めてにやりと微笑む。

私に背筋などないが、背筋が凍った。この子の感情が見えない事に恐怖と不安の入り交じった感情を感じた。

不幸な自分の未来を今、直視しているのだろうか？

きつと、私はやはり、あの日……壊れてしまったのだろうか？

わかる。この子では私の音楽を紡げない！ 私も紡げない！

「これが……本当の悔しさ」

私はもう、何年もの間、子供用の学習机の上で立ち往生している。我慢ならないのは、隣にるのが玩具のピアノだ。嫌がらせ以外の何ものでもないだろう。

そんな私の気持ちを知らない柚芽は竹籠を逆さまにしてペンギンの腹にお饅頭達を逃がした。直ぐに何匹かは柚芽という怪獣に驚掴みに持ち上げられて、衣服を脱がされた。信仰する神様に祈る時間も与えられずに怪獣のお腹の中に入ってゆく。

「こらっ、頂きますしてから御菓子を食べなさいよね。全く最近のお子ちゃまは」

「お饅頭にゃん。彼方のお饅頭にゃん」

柚芽に私の言葉は届くはずもなく、恐怖に震えているお饅頭達を両手を使い食い散らかしている。ほっぺにあんこが付着していた。そんな柚芽なんかの食事マナーは既にどうでも良い。

こいつは気になる言葉を発した。生意気だ！

「ボーイフレンド？ この柚芽様に？ どんな男なんだろう？」

「にゃん。わっん、くうーん」

「こっち向きなさいよね、私。ボーイフレンドよね？」

「わん？」

「言葉、聞こえてるんじゃないの、柚芽？」

お饅頭を食べる手を止めて、私をきよとした間抜け面で見つめている。まだ、食べ足りないのか？ 涎が垂れて埃の積もった床に落ちた。

急に不気味なくらい爽やかな笑顔を浮かべて颯爽と私を掻っ攫う。

こいつ、私を食べる気だ。私は所詮、紙。ペーパーよ、美味しくない。

そんな私の願いが通じたと解釈して良いのだろう。口を開ける気配がない。

「ふわりの宝物！ 彼方に見せてあげるにゃん」

柚芽は私を竹籠に入れた。

「人をいきなり、宝物扱い？ 私、こいつ嫌い」

ふて腐れた声を吐いたが、実は非常に困惑している。外に出られるのはありがとつと言いたいのだが、自分に誘拐されるといのは情けない。世界に事例のない誘拐。自慢できるだろうか？

私を載せた袖芽。いや、ふわりは乗客の安全を考える事無く竹籠を何周も回しながら扉へと走った。

二話 僕に流れる時間、他者に流れる時間

二話 僕に流れる時間、他者に流れる時間

> 一 <

彼方は男だ。それは代え難い事実のはずなのに彼は今、同年代の少女が羨ましがするような姿を彩夏、妃那の前に晒していた。

水色模様のノースリーブの上衣に、白いスカート。足が細長い彼方のスタイルにはスカートという下衣は合っていた。童顔で、幼女性型と艶やかな胸元まで黒髪を降ろして、ちなみに後ろ髪は首に掛かる程度まで伸びている髪という特徴を持つ人間を少女と間違えるのは仕方がないと諦めていた彼方は声を大にして言う。

「これは虐めですね？ 皆さん？」

彼方とふわりが同居している部屋を見回し、ワイシャツから胸の谷間が覗ける彩夏と子供向けの向日葵の柄に黄色いワンピースを着た妃那を睨んだ。その割には机の脚にしがみつく。

「違いますわ。彼方には彼方の在るべき姿があるでしょう、皆さん？」

妃那は彩夏に賛同を求めるように話を振る。

「おお！」大げさな声と派手なふりの拍手で肯定した。そして、付け加えるように話を続ける。「まさに今の姿だな」

「僕は絶対、学校に行きませんよ。震えが止まらないんですよ」「一端、手を離し、彩夏達に両手の微かな震えが分かるように見せびらかす。

「ふわり！ 早くままあの所においで」

彼方が起床したら、ふわりは勝手に何処かへと行ってしまっていた。一人でハンモックから降りられないはずのふわりが何故、消え

たのか？ それはふわりの脱走を手助けした人間がいるからだ。そう考えた彼方は母、蜜柑に聞いた所。何か、にゃん、わん、わんつて騒いでいたからハンモックから降ろしてあげたの、と良い事をしたというような饒舌な口調で言った。

それでも、自分を置いてそう遠くへは行くはずがないと彼方は呼び続ける。

「ふわり！ ふわり！」

「情けないですわ、あなたの事はよく存じてますし、ふわりの必要性も存じておりますけど、あまりにも今のお姿は情けないですよ」

「おら、いつまでもそんな所に引っ付いてるなよ！」彩夏は再び、机の脚にしがみついた彼方のスカートを両手で引っ張る。「うぬう！」

「止めて下さい、スカートが脱げちゃいますよ」

「それは、それは面白いねえ。価値あるパンティーだぜ」

その言葉の通り、黒いモノがスカートと白い肌の境に面積を増やし始めた。彼方を少女の姿にした張本人である彩夏の手で彼方は汚されようとしている。ふわりを探した後、彩夏が勝手に人の部屋でふわり専用のコーンフレークを、軽い音を立てながら食べていたのだ。それをお菓子屋の御菓子泥棒、と抗議したらこの様だ。

怒りを込めて彼方は叫んだ。

「くそお、雛と狐のくせに！」

今の彼方はファンシーな熊型眼帯を左目に付けているのだから、動物の姿の綾夏や妃那を見るという事はないのだが溜まらず、口にしてしまった。言った瞬間、これは失礼だったかなと反省する彼方のスカートは見事に擦れ落ちて両足の動きを拘束した。

もう、二度と黒いパンティーなんて履くか。強引に履かされてもその場で脱いでやる！

「悪態つくな、観念しろ」

「あら、ふわりが帰宅なさったみたいですね？ その格好で宜しいの？ わたくしとしてはかなり、変態さんチックだとは思いますが」

が

「ただいまにゃん、ままあ！」

「ふ、ふわり！」

舌で口の周囲をしきりに舐めているふわりを何度も高い、高いと持ち上げた。ふわりは竹籠をぶんぶん、振り回している。

「ままあ？ あんたの母親は桜菜林檎でしょ！ 嘘つくな柚芽。って私が私の名前を言うのは意外と恥ずかしい」

「あ、あれ？ 今の、ふわ」ふわりの顔を覗き込むがきよとんとしている。「へっ？」

「お姉さん、私が見える？」

小動物のような声が聞こえた。すぐさま、声の発生源である竹籠に目をやると、金髪のショートカットの女の子が籠からこちらをじっと、疑うような双眸を向けていた。

また、変なものが見えるよ、僕の左目は余計な事ばかりをしてくれるようだ。

顰め面になっているのが彼方自身も手に取るように分かった。このまま、無視するという手段もあるのだが……いやいや、それは出来ない。

ほら、観る彼方。ふわりと母、蜜柑に似ている真ん丸顔の可愛いちびっ子を見捨てるのか？ それでも男か！ と彼方は自分に決断を促す。厄介事に首を突っ込む覚悟だ。

「はい、はつきりと掌サイズの可愛い女の子の姿が」

「嘘だあ！ 柚芽様が？ 絶世の美少女よ、私」

「ぶっ」

自称絶世の美少女を指さしながら腹を抱えて笑った。絶世の美少女というよりは……とちびっ子を掴んでじっくりと観察する。

蒼瞳には憤慨という色合いの感情が交ざっていた。その瞳を無視しつつ、凹凸のない幼女体型を包み込んでいる朝顔柄のワンピースを品定めする。笑いそうだったので彼方は両手で口を押さえた。だが、両端の唇が緩んでいるのが認められた。美幼女だ。

「おい、どうした？」とアイスクリームを食べながら綾夏。

「何笑ってますの、学校に行きますよ？」

ドアノブに触れた妃那が怪訝な表情を浮かべていた。

「そうだね、行きながら説明するよ」何事もなく、爽やかな笑みを浮かべようとしたが、先ほどの発言が彼方のお腹をこちよこちよと刺激した。「ぷっ、美しようじょお」

彩夏と妃那に続き、彼方も通学用鞆を持ってスカート裾を触り、怪訝な表情を示したが息を吐き……頷き外に出ようとした。そんな彼方のスカートを勢いよく、ふわりは両手で引いた。寒気がした。下半身がすうすうする。

「まあ、ふわりお弁当作った」

その言葉を残してスキップをして、学習机の上にある大きな水色の布包みを両手で大事そうに抱えた。その間、彼方は俯き、黒いパントリーに向かい情けない顔を向けた。

自分でも似合うって思った自分に罪悪感が……と呟きながら、スカートを定位置に戻した。

「まあ、はあい！」

「ありがとう、ふわり」

「どきっんって何？ この胸きゅんは！」

ふわりから貰った水色の布包みの温もりを両手に感じていた彼方にきゃきゃ騒ぐちびっ子の声を耳にして、顎に手を添えた。

さて、どうすべきかな？ 可愛いペットを拾ったという訳にはいかないだろう？

彼方はちびっ子の正体を見極めるために邪魔な左目を右手で押さえつけたまま、ちびっ子を眺めた。ちびっ子の正体は真新しい楽譜のようだ。楽譜の右上にトランペットと表記されていた。内容を見ようとしたが……不思議な事に内容が頭に入ってこない。何かを頭の中に入れたような感覚はあるのだが、脳に行く前に情報が泡のようにならなくなってしまう。

「ふわり、その楽譜？ 僕に預けてくれるかな？」

「違うのにゃん」ふわりが拒絶したのか？ と彼方は啞然とする。
「まあに……」

ふわりは目を瞑り、力を溜めているようだ。息を吸い込み、つま先を立てる。

「プレゼントわん！」

耳の奥でふわりの言葉が何度も反復する。嬉しさのあまり、彼方は中腰になりふわりをぎゅっと、抱擁した。ふわりの身体は懐炉のように暖かい。

「おい、私はこいつの宝物じゃあ、ないのか？ 薄情者！」ちびっ子は抗議してからはっとした何かに気づいた表情をして、肩を落とした。「あ、私だよね、こいつも」

私だよね？ 君は君。ふわりはふわりだろうと口に出しそうだったが、今は聞かないことにした。ちびっ子の首の肉を鷲掴みにして、通学鞆に仕舞い込んだ。

ふわりの髪の毛を撫でて、

「ありがとう、ふわり」

「にゃん、わおん、ガアああ」

ふわりは満面な笑みを浮かべた後、歓喜の叫び声を上げた。そして、走り回る。ディスプレイの脚に足をぶつけながらも変わらず、走り続けた。

無垢な笑顔は彼方の心の中に重りとなって沈んでゆく。壊れてしまっている人間はこうも悲しいものなのか？ と思わずにはいられなかった。そして……。言うまいと彼方は首を振った。

「ふわり、ごめんね。今日もままあの為に高校に行こう」

「まああと一緒に良いにゃん」

>二<

路面電車内は学生達に睡眠を暗示するかの如く、何度も小刻みに揺れた。尤も、午前六時では学生は彼方達しかいなかった。いつも

ならば、七時に路面電車に揺られている予定なのだが、女装事件のせいで流れるに早く学校へと通学する運びとなった。彼方は草薙駅で購入した希望新聞、定価八十円を広げて記事を黙読していた。希望新聞の内容は実にほのぼのとした内容だ。何々さんの家の柿は最高に旨いという事を長つたらしく書き連ねたり、事件という言葉が相応しい出来事が希灯島にはあまり、多くない。殺人事件がもう何年も発生していない喉かな場所なのだ。そんな喉かな島にも都会は存在する。その都会の風景へと彼方は新聞を二つ折りに畳んでから視線を向けた。

お洒落なレストラン、コンビニ、病院、老舗デパート、呉服店、和菓子屋、商社ビル等がひしめき合っている。猫の額のような希灯島という地に。

ふわりは彼方の隣で立ち上がって窓にへばり付いていた。

「ふわり、しつかり座ってなさい！」

「にゃん！」

「わかってないか……」

「美少女ね、このお姿がですか？」

草薙駅から乗ったローカル電車の車内にて、彼方が描いた楽譜ちびつこの似顔絵を妃那は食い入るように眺めていた。

「美少女だな、こりゃあ。なあ、美少女？」

彼方の通学鞆に正座している目に見えない美少女 桜菜柚芽という名の楽譜に嫌みたらしく言った。この桜菜柚芽については道中、彼方から彩夏、ふわり、妃那に伝わった。

「私の敵決定ね、平凡胸。ねえ、パパあ？」

パパあとフィギュアサイズの柚芽が目を輝かせて言った。平凡胸と言った瞬間、眉間に皺が入っていたのに忙しい少女だ。彼方はノートに少女の言葉を記録した。

少女という動物は訳が分からないと呟きながらも、ママとパパと呼ばれている事を考えると憂鬱になる。

そう思いながらも彼方は柚芽の言葉に合わせる。

「奇遇ですね、ふわりも彼女の事をいやってそっぱを向くんですよ」
「お前、忘れてないか？ 彼方がお前の喋った言葉をノートに書いているのをな！」

「ベー」

ベーという柚芽の言葉を彼方は忠実にノートに書き留めた。

「あ、あまり叫ばないで下さい、運転手さんに変な人だと思われま
すわ」

「紅茶を飲んでいる時点で……」

妃那は紅茶を保温水筒に入れたお湯を自前のティーカップに注ぐ。事前にティーカップの中にはインスタントの紅茶袋が入っていた。紅茶の甘い匂いが鼻孔に入ってくる。どうやら、市販されているレモンティーのようだ。紅茶にはうるさいくせに自分では市販の紅茶しか購入しない。それが元お嬢様、瞳坂妃那十五歳の数ある中の一面でもある。

「ん？」

瞳坂妃那十五歳に睨まれた。

年下なのに謝らないぞと心に決めた彼方だったが、

「あ、すみません」

反射的謝罪を口にしてしまった。

「ゆめってふわりさんの元の名前と同じでしたわね、確か」

ゆめ……。ふわりが拒絶して捨てた過去だ。

「なあ、彼方。今更だけどさ。なんでふわり？」

彼方の肩を掴んで質問してくる。彼方はその時の事を思い出しながら優しく微笑んだ。

歌うように静かに言う。

「母が命名したんですよ。彼方ちゃん、この子あ、ぽっぺがふわ、

ふわあ。そうだわ！ ふわりにしまししょう彼方ちゃん」

「怖いくらい似てるな蜜柑さんに」

ふわりに悟られないように座席を歩く指の運びでふわりの太ももに触れようとす。

彩夏の手の動きに気が付いたふわりは四足歩行で座席の上を走り、彼方の膝の上に飛び移った。

嫉妬に満ちた彩夏の表情に彼方は目を逸らして、綺麗に磨かれて太陽の光りを吸収して輝いている床の一点を見つめた。

「ありがとう、彩夏さん。流石、母だよ、危なかしくて動き回るふわりにはびつたりな気がするよ」

「どんな方なのかなあ、パパあのみママあ」

ちよこんと、首を傾げた柚芽は媚びるような口調で言った。

可愛いと思ってしまう僕は楽譜少女の意図の中にいるのだろうか？

彼方が柚芽に答えようとしたのを妃那が横から口を出す。

「一言で言うならば、変人ほんやり年齢不詳トランペッターですわ。現役を引退したのに腕は全然、鈍っていませんわ。怪物です」

「母は日本人から嫌われていますからね、あながち、その表現は的を射ています、とほ」

確かに彼方の母は常人とは掛け離れた奏者だ。アメリカとの戦争により、遊樂が悪とされている時代がかつてあった。そんな時代にも関わらず、彼方の母、蜜柑は数多くの国に渡り、その国の人々を音楽で魅了してしまった。当時のメディアで報道されていたくらい有名だ。そして、アメリカとの戦争 攻防戦争を終結させるきっかけとなったのは葉瀬蜜柑が国際コンサートで言った私達は戦争をしなければ、幸福に暮らす事ができないのでしょうか？ という言葉と音楽だった。彼方の使っている歴史の教科書にもその事において語られている。日本から勝利を奪った日と。

葉瀬蜜柑が戦争を止めなければ、日本がアメリカを打ち破ったと教科書には載っていた。本当にそうなのだろうか？ と彼方は揺れる電車内で両手を重ねて祈るような姿勢で深く溜息を吐いた。

人は虚栄心の固まりだという事を僕は知っている……。

「とほ」大げさな溜息と共に彼方の両肩に予想外の衝撃と加重が加わる。「にゃん！ ままあ！」

ふわりが両肩に顔を擦りつけて暴れ出した途端、前のめりに倒れ

そうになった。

「おっと、危なっ」

「どうしちゃったの、私？ 年齢に似合わず無垢、それが悪いという……わけではないですが、うむ」

柚芽はうなり声を上げてから、彼方の隣に位置する通学鞆に寝そべった。

「ありがとう、気を遣ってくれているんだね。ふわりは」

彼方はどう言えば、良いのか解らずに言い淀んだ。ふわりと同じ人格であると自称する少女にはショッキングな事実だからだ。背中に汗が流れた感覚がやけにはつきりと感じ取れた。

妃那が彼方を助けるように後を続けた。

「ふわりさんは身体がちよっと疲れていきますのよ。すぐ元に戻りますから。心配なさらなくても良いですよ」

「そ、そうなんだ。良かった」噛み締めるように良かったという言葉葉を紡いで頷いた。「うん、良かった」

「ありがとう、柚芽。君は良い子だ」

自分で言った言葉が無責任な言葉だという事を彼方は認めていた。だが、それでも言わざるを得ないやるせなさという発作に襲われた。「それより、パパあのみママあはトランペッターだったんですよね？」

「うん、名前は葉瀬蜜柑。戦争で音楽が廃れた世界だけど、今も日本中に知られているよ。残念ながら……」

「彼方」

その先を言うなど冷たい彩夏の視線が彼方を射貫き、彼方の身体が竦む。

彩夏さんが察した通り、余計な事だろう。母が日本人の敵で多くの過激派と呼ばれるアメリカとの再戦を望み、何かと火種を探している連中に今も、居場所を探られているという物騒過ぎる情報は相応しくない。

後に続いた意味深な言葉に何か、疑問を募らせたのか、柚芽は通学鞆の手提げ部分に括り付けてあるビーズの腕輪を目だけで捉えて

いた。

「マカリオイの……奏者。ママあの双子の妹」

彼方の頭の中で双子という言葉が何度もリフレインされる。双子という言葉が身近でよく使われる事があるのは彼方の母、葉瀬蜜柑と桜菜林檎の関係だけだ。勿論、彼方の家は児童養護施設という特殊性から現在、入居している双子の子供の顔と以前、入居していた双子の顔も臍気ながら思考の中に入ってくるが、ママあの、という部分から相当、年上という事が推理できる。

マカリオイという言葉が出てきたのが彼方の思考を一気に固めた。マカリオイとは失踪前の楽器職人、桜菜林檎の最期の作品である天使の声というコードネームが付けられた楽器の試作品だと彼方は母、蜜柑から聞いた事がある。

頭の中に母、蜜柑が昔、彼方よりも六つ年下のゆめちゃんっていう可愛い女の子がいるという事と、今度連れてくるという事が残っていた。だが、果たされる事はなかった。林檎の仕事が忙しくなっただというゆめを守るための嘘情報に彼方の従妹、桜菜柚芽は心を閉ざしてしまっただからだ。

「君が柚芽ちゃん！」

「彼方、ですから運転手に馬鹿ですわね、あのお客様方はって思われてしまいますわ。静かに、です！」

「すみません」

「謝罪、いらねえぞ。そんより、続き」彩夏はぶっきらぼうに手を中空に向けて前後に振る。「ほら、続き」

「急かさないですよ。桜菜柚芽って名を聞いた時、思い出さなければならなかったんだ。母、黙っていたな。ふわりと僕は従兄妹だって事をね」

彼方はふわりをお気に入りの縫いぐるみのようにぎゅっと抱きしめた。ふわりの愛らしさが彼方自身の肌にまで伝わってきた。いや、伝わってきている。嬉しくて頬がどうしても緩んでしまう。涙が零れてしまう。

彼方の頬に伝う涙をふわりは甲斐甲斐しく、小さな舌で舐め取る。くつくつたい。

「ママあ、ママあの味がするにゃん」

「そんなの忘れんじゃねえよ、お前はギャルゲーの主人公か？」

「すみません。でもね、僕は林檎さん、叔母さんの話を数えるほどしか聞いた事がないんだ。林檎さんの事を言う母は……時々、悲しい目をしていたからね」

「ママあは最高の楽器を生み出す事に夢中だった。セラフイム。今、何処に？」

林檎の死を思い出して目尻を押さえながら、嗚咽混じりに話した楽譜の柚芽とは対照的に彼方の膝の上に座りつつ、動物の鳴き声の真似事に興じる少女の柚芽。二人とも、何処か、綿飴のようにふわふわした甘さとすぐに溶けてしまう儚さが同居しているのを彼方は感じた。それが居たたまれない程の苦痛を内から外へとじわじわと彼方を痛めつける。

彼方は知っている。片割れの柚芽が消えてしまう事も、片割れの柚芽が決して普通には成り得ない事も。

柚芽と柚芽が異口同音に口ずさんだ。それを優しく、大切に、愛おしく……

「セラフイム……」

二人とも何処か、違う場所を見つめていた。

「どんな楽器だろうね、彩夏さん。僕は吹けないけど、トランペットが良いな」

自身の感情を誤魔化すように一番、大雑把で……けれども彼方の事を殺人犯の娘の勘とか言っつて、海の事を全て見通している空のような存在である姉貴分に話を振る。

「多分、ペット。良いだろうよ、それで」

予想通り、軽いノリで彩夏は言葉を投げ返し、丁度、ガタンという雑な音と共に停車した路面電車を足早に後にする。今のお前の心情では話を構築する余裕ないだろう、ついて来いよと男の彼方よ

りも背の高いほっそりとした背は語っていた。

「あ、彩夏さん！ 団体行動を乱さないで下さい」

彼方は遠ざかる彩夏の背中に向かい、弾んだ声を発した。

柚芽を通学鞆に仕舞い、右手に通学鞆と希望新聞を持ち、左手でふわりを支えて胸に押しつけながら、その背に向かい走り出す。

路面電車を出ると草薙村とは別世界だった。スーツ姿に身を包んだサラリーマンやOLが忙しくなく歩道を闊歩していた。傘のように背の高いビルが彼方達を見下ろしていた。いつも、彼方達はこのビル群に対して圧迫されたような息苦しさを感じているのだが、地元が希灯市という同年代の学生はどうやら違うようで気にしすぎと口々に言っていた。そんな地元の学生と各地の村から来る学生も混ざってしまえば区別がつかない。丁度、彼方達の全方を通過する学生服をきっちり着込んだ学生のように。

彼方達もそんな人が作り出した風景に紛れてゆく。人々の波に加わった。

背後では路面電車がけたたましい音を立てながら、ホームから出発した。その騒音に負けずに人々の声は声という特性が識別不可能な程、混ざり合っていた。

「ばあか、餓鬼かよ。こっちは社会人なんだよ。こっちは都堂の御菓子の新作会で来ているんだよ」

思い出したように彩夏が反論した。

御菓子の新作会という事は今晚、いつものようにふわりに新作の御菓子を持つてくるんだろくなあと臆気ながら、ふわりが両手で御菓子を懸命に食べる映像が頭の中に浮かんできた。綿飴なのは何故だろうか……。

「平凡胸、セラフイムがトランペットだと何故、わかった？」

通学鞆の中から柚芽の声が聞こえた。小さい子特有の高い声はよく通るようだ。

セラフイムについてはとある事件とあの人との繋がりを考えれば容易に想像できるが、彼方はそれを作り笑顔の内側に隠した。

「偶然だよ」

「パパあの左目で」

左目の事は道中、柚芽にも説明した。柚芽は驚くことなく、私が見えるのは左目のお陰だねと感想を漏らしていた。普通ではない事が、柚芽はファーストフード店で食べ物を注文する気軽さで、今も左目に言葉で触れていた。

彼方はコンビニエンスストアの燃えるゴミと表示されたゴミ箱に希望新聞を何度も折り畳んでから捨てた。ふわりがゴミ箱の穴に腕を突っ込もうとしていたが妃那に腕を掴まれる。

「断るよ。僕は人の本質に触れたくないんだ。君が思うほど、楽しいやない。本当に触れるのってね」

彼方はそれ以上、柚芽とは言葉を交わさずに希灯高校へと急ぐ。ふわりの温もりを左手に感じながら。

そう、この温もりだけが普通とメルヘンな世界とを繋いでくれる一筋の光明なんだ。

ふわりの頬と彼方の頬が重なり合う。温もりを決して逃がさないように。

>三<

放課後の熊部の活動を無断欠席してふわりの手を引きながら草薙村へと駆け足で帰ってきた。途中、何度もお茶でもしていかないか？ と村の老人達に誘われたが、急いでいた為、丁重にお断りした。気さくな老人達の誘いを断るのは心苦しいものがあつたが、今の彼方にはそれ以上に重要な確認事項があつた。

世界一むかつく坂と彩夏が勝手に命名した急坂を登るが、ふわりが途中、バテて座り込んでしまったので、おんぶして希灯児童養護施設の扉を開けた。

扉の音と共にふわりの寝息が聞こえた。どうやら、相当疲労していたようだ。表情に出さない子であるが、笑顔は夏の向日葵のよう

に目立ち、小さな母性という異彩を放っている。彼方の背中を無意識にぎゅっと掴み直しているのがこそばゆい感触から伝わってくる。彼方は長椅子に腰を掛け、ふわりを縫いぐるみのように膝の上に乗っける。持ってきたクリアファイルはすぐ側に置いた。

舞台にずらりと並ぶ小さな少年少女達。その中にふわりの友人である深田あけな、国枝澄。お兄さんと彼方の事を慕う御名下ぷりんもいた。幼稚園児、小学生、中学生、高校生の順で前から並んでいた。女子は白いワンピースを身に纏って、男子は白いワイシャツと白いズボンを履いていた。

すうーという息を吸い込む音が一つとなつて聞こえる。

子ども達は母、蜜柑の指揮棒の合図で自らの声帯を楽器にして奏でる。

伸びやかに何処までも伸びるぷりんの声を主旋律として、他の子達はその土台を作るように声を幾重にも重ねてゆく。まるでショートケーキのような関係だ。母であるぷりんを引き立たせる為に生クリームである女子の元気な歌声、スポンジである男子のどっしりとした声といった構成だろうと彼方はショートケーキを思い浮かべた。特にあけなが自分に可能な限りの音域以上の音域を出そうと顔を真っ赤にして歌っている。だが、その顔は苦痛が滲み出ている様子はない。汗を滲ませながらも何か、一つの事柄に追求しようという一種の職人気質を持った厳しさと探求する事の楽しさの笑顔が垣間見られていた。他の子達も同様の笑顔を放っている。その笑顔は彼方には眩しすぎた。

逃げてしまった。

激しい痛みを感じた。その痛みは少年少女の歌を耳に入る度に不安へと変換されてゆく。その不安は自分が待ち望んでいたものでもあった。

奏でたい。奏でたい。

マウスピースに触れる練習しか彼方はしていなかった。それは練習ではない。ただの情性だ。子ども達の生き生きとした表情を見て、

省みた。

生み出そう。自分の音楽を！

左手で掴んでいた楽譜を入れたクリアファイルに視線を送った。左手は震えていた。

「トランペットを捨てたトランペッターに生きる術はない事に気づいたよね、パパあ」

トランペットだけではなく、金管楽器、木管楽器、打楽器、全てを高校生以上の実力で操る桜菜柚芽の言葉は彼方の意志に強く刻まれた。

「大丈夫、パパあ」甘いオレンジジュースのような舌にとろける声を聞いた彼方の背中に急激な寒気が襲って、「柚芽様が教えてあげるから、この世に存在する全ての悠久に吹き荒れる音の断片を、ね」

普通とは尤も、縁のない少女 柚芽が大人びた口調で確信を持った意志の認められる言葉を放った。その言葉は信じるに値する魔法が含まれている気がした。

しばらくすると、希灯芸術祭の稽古は終わり、少年少女は舞台上で思い思いに喋り出した。そんな一団の合間を縫うように小さな物体が這い出た。小さな物体 御名下ぷりんは彼方の瞳が合うと顔を赤面させてはにかんだ笑みを浮かべた。

ワンピースに付いた埃を両手で払い、舞台から飛び降りた。

「お兄たん、だあ！ レッドパンチ」

直ぐに彼方の方へとやって来たぷりんは彼方の肩に何度か、拳を入れた。ぷりんの的には本気だったのかもしれないが、彼方にとっては気持ちの良い肩たたきだ。利いてないと判明するとぷりんがすねてしまうので一応、偽苦痛に顔を歪ませ、お決まりの言葉を口にする。

「うぎゃあ、やられた。元気だね、ぷりん」

その台詞を聞いた瞬間、ぷりんはそうでしょ、そうでしょと言うように何度も頷き、奇声を上げた。戦隊ヒーローモノの正義の味方側であるレッドにでもなっ たつもりなのだろう。

「ふわっちゃんは……」彼方の膝を枕にして気持ち良さそうに胸を上下させて、深い呼吸を繰り返しながら寝ているふわりを物欲しげな表情で見つめる。「寝てる、ずるい。ぷりんも寝ます」

ぷりんはふわりを両手で押しのけて右膝に自分の枕を確保すると、彼方の許諾も無しに早くも寝てしまった。

彼方はぷりんとふわりの寝顔を交互に覗き込み、溜息を吐く。そして、二人の髪をゆっくりと撫で上げた。

本来ならば……二人ともこんな悲しい場所に居てはいけない子達なんだ。けれども、今は。

「優しいですね、パパあは。子どもは自分で居場所を決められない。だから、その苦しげなお顔は子ども達にはどうか、見せないで。笑ってあげて下さい」

「うん、そうだね。柚芽の言う通りだ。ここは始まる為の場所なんだ」

クリアファイルの中にいる柚芽の意外な大人びた言葉に目を丸くしたが、柚芽の言葉を肯定した。

少年少女達は片付けを終えて、それぞれのペースで舞台から降りてゆく。その一団から外れるようにして母、蜜柑と御菓子大好き少女である深田あけなが談笑をしながら歩み寄ってきた。

「お兄ちゃん、どう？」

伏し目がちに彼方の様子を窺っている。

彼方は顎に触れて少し考えているという仕草を取ってから答えた。

「あけなちゃん、歌詞間違えたでしょ？ 本番は楽譜無しで観客に

お花を渡しながら歌うんだろう。頑張れ」

「うん、頑張るよ」とあけな。

「あら？ 早いわね、彼方ちゃん？」

彼方の姿を発見するとすぐさまに掛けより、蜜柑は抱きつこうとした。だが、唾液を彼方の膝に垂らしながら寝入るぷりんとふわりの顔を一瞥して硬直した。そして、いやらしい微笑みを浮かべた。

きつと、母の事だ。それをからかう方法でも思い浮かんだに違い

ない。その前にここに来た目的を果たすべく先手を打つ。

「黙っていましたね、母。ふわりの事」

いやらしい微笑みが一転して、蜜柑はいたずらを叱られた子どものような笑みを浮かべた。ついでとばかりに真つ赤な舌を出す。

「ばれちゃいましたかつて、露骨に表情に表さないで下さいよ」

「だって、だって、言ってしまったたらふわりちゃんがうちのお嫁さんになる確率があた落ちじゃない。いざ、結婚っていう時になったらそんなの障害にならないでしょう。愛がふわりちゃんを救うのよ」
後方であけなが拍手をする。

「偏った愛の理論を展開しないで下さい、母」蜜柑の意見に賛同しているのか、悪乗りしているのか、と二択があるならば確実に後者であるあけなに叫ぶ。「そこ、拍手しない！」

彼方の声にびくつと子猫のように身体を仰け反らして、ぷりんは不愉快と言わんばかりに目を擦る。彼方を円らな瞳で見つめた。

「お兄たん、動いたら駄目。ぷりん睡眠不可」

「すみません」

ぷりんの言葉にまたもや、反射的にお辞儀をする。

今が話を逸らす機会だ。蜜柑は彼方の額に小指で触れて、わざとらしく片手で腹を抑えながら爆笑の声を上げた。だが、顔がそういつた類の顔ではなく、真剣が顔に張り付いているような無表情だ。

「ちびっ子にも弱いよね、彼方ちゃん。でも、気にする事無いのよ。その方が萌えるじゃない？」

後方であけなが深く頷く。

「偏った萌え論を展開しないで下さい、母」明らかにこいつはこの展開を楽しんでいると丸解りな頷きをしたあけなに叫ぶ。「そこ、深く頷かない！」

「誤魔化しきれないようね。何処まで知っているの？ 彼方ちゃん？」

蜜柑の表情は少しも笑っていないかった。ただ、悲しみだけが心の中に居座っている。なんて、希望のない表情なのだろうか？ と疑

問に思つ心を静めた。そして冷静な面持ちを築く。そうする事が一種の礼儀だ。

蜜柑に説明する前にまた、彼方の膝枕で眠ろうとするぷりんの輸送をあけなに頼む。あけなは私も聞きたいという剥き出しの興味を示すが、彼方が指で一という数字を表す。するとあけなは毎度あり、と言つてぷりんをお姫様抱っこしてそのまま、輸送した。

彼方は朝の出来事からここへ、辿り着くまでの事を簡単に蜜柑に説明した。蜜柑は質問を交えつつ、彼方の言葉を吸収してゆく。

「なるほどね、楽譜の柚芽ちゃんに彼方ちゃんのお嫁ちゃんな柚芽ちゃん。せつかくばれないようにふわりちゃんって改名したんだけどなあ、ちえ」

クリアファイルから解き放たれた楽譜の柚芽のおでこに蜜柑は触れた。蜜柑には柚芽の姿が見えていない。正確には楽譜に触れたというのが正しいだろう。

一方、柚芽は蜜柑の顔を細部に至るまで記憶するように魅入っていた。

「ママあ！ 私、柚芽よ！」

「違うんだ。柚芽のお母さんのお姉ちゃんだよ」

クリアファイルの上に座る柚芽に言い聞かした。だが、柚芽は激しく首を振る。

「そんなあ。じゃあ、柚芽のママあは？」

「それは……」

答えられるはずがない。沈黙を守るしかない。彼方の表情は沈痛な顔立ちとして、肌色を濃くした。期待という淡い希望が柚芽の顔からも奪われてゆく。いや、彼女は知っていたのだろう。最悪の可能性しか考えられないと。

それでも希望を肯定できる強さを僕は持つ事ができるのだろうか？
できないと両目をぎゅっと、瞑る。目が痛くなった。目を開けると視界がぼやけているという認識と共に浅く、深い痛みを感じた。

柚芽は彼方を親の仇のように凄んでいた。

「彼方ちゃん、柚芽ちゃんなんて言っているの？」

震える手でクリアファイルに挟んできたシャープペンを強く握り締めた。シャープペンシルという存在を握り締めているという感覚が心に粘着している。今までにはない事だ。

ゆめのままあは？

とミミズののたくったような字で大きく、クリアファイルの蒼い表紙に書いた。

その言葉を見開いた両目でしつかりと認めた蜜柑は眉間に皺寄せた後、文字を自分の視界から留めるのを嫌がるかのように視界を逸らした。

「死んだのよ」

言葉にするたったの数文字で済んでしまう事実には彼方達の周囲の空気が凍った。

柚芽は低い唸り声を上げながら、蛍光灯の光を自ら浴びる姿勢で叫んだ。

「ママあは！ 柚芽のママあは九年前からお仕事で出かけているはずだよ。あいつが言っていたもの。セラフイムを完成させる為の資料集めだつて」

言葉を言い終えて浅い呼吸を小さな胸が繰り返す。まだ、言い足りないと言葉の唇が何かを吐き出すように痙攣している。柚芽の回復を待たずに、優しい微笑みを浮かべながら蜜柑が反論する。

「嘘じゃない。九年前に桜菜林檎は金銭目的で昼下真名に殺害」

「母！ それはあんまりだ！」

彼方の心には二人の柚芽の境遇が一瞬間、瞬いた。過去の自分を取り戻せない脳を損傷した柚芽、人として続く未来のない柚芽。真実を知る事が正しいなんてドラマや漫画、アニメの受け折りだ。欺瞞だ。

本当の痛みを見てきた。

児童養護施設の前に捨てられていたぷりん。彼女は彼方を見つけた後、指を自分の口に入れて、ままあが待っていてねって言ったの、

と彼方に無垢の微笑みをくれた。ぷりんの頭には雪が降り積もっていた。それでも、子羊は微笑んだ。微笑んだのだ、目には見えないままに。

本当の闇を見てきた。

知り合いの音楽の先生から引き取って欲しい女の子がいると手紙を貰い、代理で彼方はその音楽の先生の家を訪ねた。音楽の先生は教え子だった深田あけなを引き取ったのだが末期ガンという診断を先月、受けて断念せざるを得ないと言っていた。だが、本当の彼はせいせいしたという表情を浮かべていた。あけなは奥の座敷で、父さんが叩くから……殺したんだよ、と何度も叫んでいた。子栗鼠が精一杯、背伸びびして叫んでいた。

本当の絶望を見てきた。

両親の事業が不況の煽りを受けて頓挫して、両親の首吊り死体の最初の発見者となった国枝澄は両親の遺産を親戚に奪り取られて、友人の父親の紹介で児童養護施設にやって来た。当初、澄は俯きながら勉学に励むだけの子だった。知識だけが信じられると口癖のように言っていた。でも、子兔の瞳からはいつも、涙が溢れていた。

本当の卑怯者は見てきた。

彼方は母、蜜柑を初めて、睨み付けた。それに相對する蜜柑は残念そうに首を振る。

「彼方！」

蜜柑の凜々しい声は白い壁に突き響き、彼方の胸を打ち抜いた。

動揺する彼方を前にして、蜜柑は話を続ける。

「真実はいつか、知らなければならぬのよ。どんなに残酷な真実でもね。彼方ちゃん、何で私が施設を立ち上げたか、わかる？」

彼方に質問をするが、彼方自身の中に答えを見出す事は適わなかった。仕方なく、首を振る。

仕方ないわねと、今にでも言いそうな溜息と共に蜜柑は話を再開する。

「この世は絶望に満ちているからよ。だから、一筋の光りになりた

いのよ。例え、偽善でもね」

もつと、大人になってから真実を受け止めれば良いだろう？　と言おうとする口を彼方は咄嗟に塞いだ。

母には嫌われたくない。

「昼下真名に殺害。その後、前日に完成していたセラフイムを持って逃走。セラフイムの行方は未だに解らないわ」

「ママあ、ママあ」柚芽は未だに母、蜜柑をママあと呼び続けた。

「昼下彩夏。あの平凡胸の母親？」

鼻をひくひく動かしながら柚芽は彼方に問う。彼方はその言葉を忠実にクリアファイルの蒼い表紙に書き殴る。

「そうよ」

迷わず、蜜柑は断定した。

「柚芽、あなたの母親を殺した女の娘が直ぐ近くにいるのよ。許せるところ思う？」

彼方の膝の上に頭を載せて気持ちよさそうに深い呼吸を続けるふわりに柚芽は囁く。その囁きには何処か、鋭さが籠められていた。

「言う必要なかったと思う……」

彼方はぼそりつと俯き加減に言った。

「受け止めなければ、あの子は前に進まないわ。彼方ちゃん、それはあなたも、よ？」

「僕は逃げてないですよ」

ぼそつと言った。

「そうだと嬉しいわ」

その言葉とは反面に思い詰めた表情を彼方にわざと見せているようにも思えた。

ずっと、逃げている。

彼方はその表情から逃げるべく、慌てて話題を変えた。

「母、セラフイムって？　天使の声だよね？」

「彼方ちゃんには詳しい事を教えていなかったね。まずはおさらい、天使の声の試作品は四種類存在する。トランプットであるマカリオ

イ、フルートであるファール、サククスであるソシユール、ホルンであるシユタインという四種類が存在しているわ。それらの利点を踏襲したのが、セラフィムと呼ばれる大量生産を無視した一点もののトランペット」

「ママあのセラフィムがトランペット。セラフィムは柚芽への贈り物っていう事なの、ママあ？」

柚芽はどんな心境で今、自分の母親の姉を自分の母に見立てているのだろう。そう考えると胸が痛んだ。

その感慨を胸に閉じこめるように嘆息し、

「そうなの？」

「そうよ。セラフィムはいつか、プロになった柚芽が使用する為に作られた愛の籠もった素晴らしい楽器よ。マカリオイをベースにして作られているから、温度の変化には左右されない安定性を持っているわ。他の三種については私も話しに聞いただけだから解らないわ」 「ママあ、けど！ セラフィムは何処にもないよ」

悲痛な声が部屋中に響いたが、蜜柑には当然、伝わらない。通訳を早くと彼方の方に首を向ける。彼方はクリアファイルにまた、柚芽の言葉を綴る。綴りながらもセラフィムは彩夏がまだ、持っているのではないか？ という可能性があることに気づく。いや、確信した。昔、彩夏が言っていた。林檎から音楽を教わったと。

ならば、セラフィムを何らかの形で手に入れても不思議ではない。また、誰かの表情が偽りの度合いを増す？

そんな言葉が思考の湖に一滴、落ちた。みんながかつてはふわりのように偽らない表裏のない動物だった。それが社会に溶け込む為の階段を上る度に表情は表と裏に別れた。

唾が止め処なく、囁く。恐れているのか？

真実はいつか、知らなければならぬのよ。どんなに残酷な真実でもね。

真実？ そう、真実は何にも変えられない。だから、逃げてはいけないんだ。

この世は絶望に満ちているからよ。だから、一筋の光りになりた
いのよ。例え、偽善でもね。

僕は、僕はなれるでしょうか？ という疑問から発する甘い蜜柑
のような痛みを堪える。ふわりの身体を抱きしめた。ふわ、ふわと
した金髪が彼方の肌に頑張れというメッセージと熱を常に与えてく
れた。

なれるだろうか？ ふわりを守る存在に。甘え合う存在ではなく
……。

「母、僕出かけてくるよ。セラフィムを取りに」

「やはり、そうなのね」

蜜柑も内心、確信していたように頷いた。それを受け取り、彼方
はふわりを蜜柑に差し出す。ふわりを両手で抱きかかえて、

「ふわりを連れて行かないの？」

「逃げるわけにも。立ち止まるわけにも行かないんだ。僕は歩き出
さなきゃ！ ずっとふわりを助けて、生きてゆく為にも」

「そう、けど……ふわりを！」

「心配しないで」

掠れるような彼方の声の後には、彼方の慌ただししい足音しか部屋
には響かなかつた。何もかもが音を失っているようだ。

> 四 <

世界一むかつく坂をママチャリで下る。夜風が酸素を明け渡せな
い速度まで、一気に加速してゆく。疲労からくる心臓のざわめきと
は違う芯から、自分の違った一面に染まってゆく鼓動が聞こえた。
暖かな一筋の電灯の輝きが、今は心許なかつた。

ふわりといれば、暗い舗装されていない道も垢抜けた灯火に満ち
た道になるだろうという確信が、彼方の心に振り下ろされる。その
度に引き返して、ふわりを荷台に載せて行けばいいという邪魔な感
情が沸々と滲み出た。

やがて、電灯さえもない真っ暗な道に入る。ハンドルに取り付けられたライトのスイッチを持ち上げた。だが、一寸先の光景を肉眼で捉える事は適わなかった。ライトの何処かが故障しているようだ。左右には竹藪が生い茂っていた。その下は人が歩行困難な斜面がある。想像はしたくないが、さらに下ると海面行きだ。彼方は想像を振り切るように、力強くペダルを踏みしめた。そして、漕ぐスピードを増してゆく。

思った以上に加速度の向上に顔が緩む。緩んだ瞬間、ガクツという鈍音と共に後輪から空気が抜けてゆくのを、ハンドルを通して身体に伝わってくる。まるで快速列車に乗っていたのに普通列車だったという薄れた期待感が全身を包み込んだ。仕方ない。ここからは歩いていこうと彼方は思った。

だが、見ていた暗闇に浮かぶ茶色い地面が急速に目線へと近づいてゆく。それと同時に景色が著しく横向きへと変動する。正面が竹藪である事にふと、気が付く。

「危ない！ 減速！」

叫びも虚しく、ハンドルに備えられているブレーキを強く握り締めたが、妙な弾力に絶句した。何度、試してみてもブレーキはその役割をストライキしているかのように言う事を全く聞こうとしない。その間にも竹藪との距離は縮まり、とうとう……零になる。

容赦なく、立派に育った竹が彼方の自転車の籠を襲い、その衝撃で彼方と自転車とは離れ離れになる。自転車の籠は無惨にも凹んでしまったが、竹に背中を押しつけてそれ以上、落下することは免れたようだ。

母にふわりと遠出するのに使いなさいと譲り受けた母の愛車、カトリー又は救出を待てば生還できるだろう。

「僕もカトリーと同じ」彼方は竹を探そうとするが、今は自分が転がっている事にはっと気づいた。「ねえよ！ 死んじゃうよ、嫌だ！ 嫌だ！」

運の悪いことに柔らかな土の上から身体は突如として解放されて、

冷たい海の中に放り出された。塩辛い水が酸素の代わりに、口の中に容赦なく入る。沈まないように必死で手足をばたつかせる。

「まだ、死ねるか！ ふわりとずっと、一緒に暮らすんだ！」

水面に顔を出しながら、藻掻く。

死にたくはない。誰だつて死にたくはない。人として当たり前の生存本能が恐怖を怒りに変えてゆく。理不尽な怒りだと解つていても、今の境遇に激しく嫌悪感を覚えた。それに屈するものかと叫ぶ。「死にたくない……」

それも長くは続かなかつた。足にぴりつとした静電気と接触したような微痛を覚えていた。それが徐々に足の感覚を麻痺させてゆく。足が攣つた。

なんて、典型的な笑えないオチのような最期なのだろうと天を仰ぐ。天には彼方の不幸を嘲笑うように煌びやかな星々が白く輝いていた。

「なんだ。唐突なんだ。人の死つて」

星に語りかけるように彼方は呟いた。

「ごめんね」

二人のふわり、二人の袖芽に謝罪した。それは届くことはないのかな？ と思いつつも意識は遠のいてゆく。余程、今の展開が心に負担が大きいらしい。彼方自身はまるで映画を自分が離れた場所から、鑑賞しているような現実感の無さに包まれた。

意識が黒く塗り潰された。

>五<

「まあ。まああ！」

少女の声が聞こえる。どうしたのだろうか？ 柔らかな絹を裂くような鳴き声と、その愛らしい小動物のような声には似合わない嗚咽を混じらせた声で、何を悲観しているのだろうか？

彼方はゆっくりと目を開けた。視界が真っ白く、ぼやける。焦点

が定まらない。目を擦る。

白い霧の中からうすらっと現れたのは、彼方の初恋の人だった。両肩に朱色のリボンが付いたピンク色のパジャマを着ている丸顔の金髪少女の顔に両手で触れた。触れた瞬間、彼女は緩やかな微笑みを彼方に見せた。指先から伝わってくるふわっとした感触を食べてしまいたいくらいの憧れに胸を撃たれた。いや、それ以前から撃たれている。誰かの為に感情を惜しげもなく露わにして、お節介を焼きたがる彼女。ウィーンに滞在していた頃、他者の財布を持って逃げた強盗に対して先日、テレビのドラマで主人公が使った背負い投げを真似た投げ技をお見舞いして、事件を何食わぬ顔で解決したりしていた。今だって、整った睫毛を悲しみで濡らしながらも燦々と彼方を陽光の笑顔で照らしてくれていた。

この手で触れ続けていたのならば、イカロスの翼が溶けたのと同じように指先が溶けてしまうのではないだろうか？

そうじゃないよね、母。

「まあ、まああ！」

「え」

母、蜜柑だと思っていた人物の口からふわりの彼方に甘える声が聞こえた。予想外な展開に低い声が口から漏れた。

すぐに左目の眼帯を確認しようと、手で左目を覆った。だが、眼帯はそこにはなかった。少し苛立ちのような感情が芽生えたが、生きている事と天秤に掛けるとどう見ても左目の事など些細な事と思いきい直す。

雛の姿をした妃那が呆れた顔で彼方の頬に往復ビンタを食らわせる。

「彼方！ ちょっとしつかりしなさい！」

「ふわり、妃那。なんだ、僕はもう……化けて出たんだね」

彼方が軽いジョークのつもりで言った。空かさず、妃那がもう一度、羽根を広げて往復ビンタをお見舞いした。

「おい、人の部屋で化けるのは止せよ！」

傷だらけの年代ものちやぶ台の前に胡座をかいている狐、彩夏が戯けたように怒鳴った。

彼方より背の高い女性のように見えるふわりは彼方の頬を労るように触れるが、

「痛い！」

余計なお世話だった。

ふわりの労る心は子どもならではの好奇心に早くもシフトし、彼方の頬を指で何度もゲームコントローラーのように押す。大人の知性溢れた顔つきとはギャップのある行動に彼方は啞然とした。

びしょ濡れであろう変態的なまでに愚かな水玉色のノースリーブと白亜のスカートから、いつのまにやらさらに難易度の高いキャミソールに変わっていた。まさかと思い、彼方はスカート部分をそつと、上げると……ふわりとお揃いの女兒用兔さんパンツがおはようした。

おはようございます、兎さんと力なく頭を垂れた。

「まあ、もう元気？」

「元気だけ……ど？ どうして？」

まだ、頭が混乱していた。考えたくもないが普通の流れならば、自分の人生と理不尽極まりない溺死という理由でおさらばするのが必然だ。何がどうなったのか、人生というサイコロの目は意外にも良い目に落ち着いたようだった。

周囲を見渡す。相変わらず、あちらこちらにジュースの缶、コンビニのお弁当、アイスクリームのカップが散乱している。中身は既に無く、それらは何かの役割を持って機能しているわけでもなく、ただ放置されていた。それだけならば、彼方は辛うじて許容できるいや、許容できるようになった。成長した。ふわりが年中、同じように散らかしているからである。だが、畳の上に使用済みのパンティーやら、ブラがあるのは流石に目を背けたくなる。実際は数が多すぎて目に映ってしまふ。

現実だ。紛れもなく、現実だと思い知らされてしまふ空間だった。

「彼方でもからかいに行こうってバイク飛ばしていたら、お前が転がってゆくのが見えて面白くて笑えた」

そう言い、今も腹を抱えて狐である彩夏は腹を抱えて笑い続けた。狐のふさふさ尻尾もお腹と連動するように震えた。

「ちよつと、僕、もう少して溺れるところだったんだよ」

「溺れますの？」と真顔で妃那。

「溺れないだろう、浅いぞ。斜面ついてもしつかり、海まで転がって行けたらう？ 芝生生えているから俺なんか時々、ダンボール持参で行って滑るんだよ」と彩夏。

「はあ？」

彼方は情けない真実に首を傾げるしかなかった。オチまで付いているとは、何とも自分らしいと苦笑する。

「子どもの頃にお前もやった事あんだらう、一度はな？ ダンボールに颯爽と跨り、芝生という名の荒野を駆け抜ける」

「随分とご機嫌ですね」

嫌みで言っただつもりだが、

「まあなあ。人の不幸はアイスクリームって言うだろう」

嫌みで返される。やはり、狐だけあつて狡賢さは彼方よりも一枚も上手らしい。その彩夏は他人の不幸をゆつくりと堪能して満足したという恍惚な表情を浮かべた。そして、るーぷの方へと消えて行った。

ブラを頭に被ろうとするふわりから、ブラをそこら辺に転がっていた割り箸で摘み上げて放り投げる。ブラの行方を見つめていたふわりは悲しそうに目を細めた。

「僕はやはり、君無しでは歩けないのかな？」ふわりの蒼い瞳を瞬きもせずに見つめた。ふわりもそれに答えるように見つめ返す。「君も」

壊す勢いで襖は開かれた。開いたのは先ほど、るーぷの方へと行った彩夏だった。手にはお盆を持っていた。そのお盆の上には淡い緑色の液体の入ったコップが四つ、乗っかっていた。

「なあに、ラブってるんだよ。ほれ、飲みもんだ」

「彩夏さん、これ？ 粉ジュースですか」

綾夏という女性がいい加減だという事実を、彼方は優しい目で見守りたくなるくらい知っている。その綾夏は妃那が店の商品を食べるのを止めるように言っても、仕入れているのも、金を払っているのも自分だから問題ないと言って止める気配がない。その点からるーぷの御菓子だと考えられる。

「よくわかったな」

「独特のしゅわーって音が鳴ってますから解りますよ。懐かしいですな」

緑色の液体中に無数の泡が暴れているが、勿論、しゅわーなんて音がここまで届くわけがない。だが、彼方の相づちに彩夏は満足したようだ。顔の両頬が緩んでいる。

和やかなムードに慌てて、彼方の横から妃那が乗り遅れまいと言った。

「そ、そうですね」

「飲んだことねえーだろう、妃那？」

「ありますわ。しゅわーって鳴るんですの、よ？」

そう言いつつ、両手で円を描くように動かした。その動作は端から見れば怪しい人だった。それをじろつと横目で見た後、彩夏は溜息を吐く。彼方にはしようがねえ、完璧主義者という優しい幻聴が聞こえた。

綾夏はちゃぶ台に置かれた子どもと仲良しになる方法という本を押し退けて、開いたスペースに緑色のジュースを四つ、置く。

その側には彼方の眼帯があり、彼方は耳に掛けた。湿っていたが無いよりはマシだ。

「そういう事にしておきましょうよ、彩夏さん」

ふわりにジュースを手渡して言った。

「そ、だな」

「ところでお前、俺ん所に来ようとしていたんだろっ？」

「どうして、解ったんですか？」

「お前」一度、言葉を詰まらせてから言う。「一辺、脳検査する為に本土に行つてこいよ？」

「彼方が竹藪を越えて、こんな暗い時間帯に行く場所はここ以外にはありませんことよ」

彩夏の言葉を補足するように妃那が後を続けた。

「なるほど」

「感心するな」「感心しない」

異口同音に左耳からは彩夏の鋭利な刃物のような声、右耳からは妃那のガミガミ声が聞こえた。とりあえず、愛想笑いをしておく。

「まああ？ 感心しない？」

真似するふわりの姿も既に年相応の直線的な愛らしい幼女体型に映っていた。別世界からの生還の安堵感を持って、ふわりを膝の上を持つてくる。

「じゃあ、遠慮なく言うよ。セラフィムをふわりに、桜菜柚芽に返して欲しい」

「ねえよ、そんなの」

さり気なく、視線を逸らせて彩夏は言った。

自ら、外すのを躊躇っていたはずの眼帯を力任せに取る。現れた黒一点の瞳に人間の本质を見る。顔に汗を多量に流している狐が目を逸らしていた。

もう、いい……。痛々しくて見ていられないと眼帯で左目を覆い隠す。

「僕に」言葉を押し殺すように、「嘘は通用しないんですよ」「震える唇に不安を感じながらも言葉を切つてから、「彩夏さん」

「まああ、怖い」

笑いながらふわりは涙を流す。それは涙と言えるのだろうか。彼方さえも時々、思う。知らない人が見たら、喜と哀の感情どちらかが嘘だろうと勘ぐるだろう。事実、ふわりは小学校で嘘つきという渾名で呼ばれていた。それでもふわりは悲しむ事無く、にこにこ笑

いながら机に向かつて計算ドリルを解いていた。他の子達は談笑したり、折り紙をしたりしている中で。

それなのに、この人は嘘を吐くのか！

不条理、不整合な怒りの感情が内向的な炎に焼かれて限界点をすっ飛ばして、彼方に彩夏のをーぷと書かれただけの白いＴシャツの襟を上を持ち上げさせた。持ち上げた一瞬間、女性的な白い肌と胸がちらりと視界に入った。

「僕に」淡々と強く、「嘘は通用しないんです」淡々と弱く、「彩夏」

「てめえ！」

綾夏は充血した目で一部位も逃さず、彼方を視界に留める。唐突に拳を彼方の頭上に振り上げようとする。その拳を妃那が咄嗟に握り締めた。

「彩夏さん、暴力は！」

「なんでいつも、深い悲しみを持っているんですか？」

「人の心を覗いて楽しいのかよ！」

「答えになってませんよ」

水と油のような悪化するだけの堂々巡りだとしても退くわけにはいかなかった。彩夏の興奮した大声が響くのであるならば、冷徹とも読み取れる淡々とした口調で彼方は応えた。

「誰だつて持つているだろうよ、こんな世の中だからな！」

こんな世の中だからな！ という言葉が異様なまでに耳元でビブラートに聞こえた。

「彼方、お前」呆気に取られたように彩夏が彼方の目元を指さす。

「ままあ」陽光の中に生えるアサガオのような笑顔を浮かべたふわりの声は何処か、元気がない。「彼方、あなた」

珍しいものを見るように口元に両手を当てて驚く妃那を最後に彼方は自分に起こった異常に気が付く。

視界が霞む。彩夏のＴシャツの襟を馬の手綱のように握っていた手に力が入らない。とうとう、手を下ろしてしまった。

頬を何かが爽快に何度も滑り落ちた。

ぼたっ、ぼたっ、ぼたっ、畳にリズムカルな歌を歌った。
涙か。悲しいな。悲しいな。

「逃げるんですかあ」

言葉を振り絞って出す。許容できないから、と彼方は自分に言い聞かせた。

自らの長年の逃亡という諦念を出す覚悟らしい覚悟をせずにはつと言葉は紡がれる。

「逃げるんですか！ 確かに誰しも醜い顔を持っているけどね。それは現実という世界で生き続ける為に戦っている人々の尊い傷跡だ！ 僕は、あなたを見てやっとなげましましたよ。恐れるべき人間はその傷と真つ正面から向き合えない愚か者だって、事に」

荒々しい息を口と肩も使って整えようと何度も忙しく動かす。

その間に彩夏がぶきらぼうに言った。

「壊すんだよ、いつか、あんなもの」

「甘えないで下さい。それはあなたの傷でしょ？ セラフィムは関係ない」

「彼方、言い過ぎ」

さすがに心配とばかりに妃那が口を挟んだ。

「すみ……」謝ろうと彼方は頭を下げるが、思い留まった。頭を上げて、「言わせて下さい」

そのように言ってから、キャミソールの肩紐を直し……。

ぷりん、ごめんね。

それから口を開いた。

「ぷりんは最初、雪の中で凍えるだけの子羊だった。けど、今は心から笑ってる。他でもないあの子自身が居場所を作った。彩夏さん、あなたには居場所がありますか？」

「居場所、なんか、ない」

「どうして、セラフィムを壊さなかったんですか？」

優しくゆっくりとしたふわりを叱る話法で問いかけた。

彩夏の頭の上に手を置いて微笑んで、

「居場所を失うからでしょ？」

彩夏の涙ぐんだ瞳と彼方の強く優しい瞳が見えない共感を通わす。彩夏の表情が和らいでゆく。

「もう、苦しまなくて良いんですよ。人を殺したのは彩夏さんじゃない。初めからない罪で雁字搦めにならないで下さいよ」

妃那は泣きじゃくる彩夏を慰めようと唸り声を上げながらも、自分なりのフォローを入れた。

「人殺しの子どもっていうだけで罪なんだよ、妃那！」

「例え、そうだとしても僕は彩夏さんの罪を許しますよ。多分、柚芽だって……」

そう言っただけ置いていた手をゆっくりと動かし、彩夏の髪を優しく撫でた。されるがままの彩夏は彼方の言葉に嗚咽混じりな声でうんうんと何度も頷く。

彩夏の少女らしい高い慟哭の響きだけが、少女らしくない物が散らかった部屋に反響した。それ以外は人の吐く僅かな呼吸音しか聞こえなかった。

空間の立ち直る余韻を与える間もなく、襖の向こう側から地を這いずるようなおどろおどろしい声が響く。

「許しません、許せるはずがないです。殺人鬼の血が通っているだけで罪です。嫌悪感さえ覚えます」

彼方はあまりの声の違いに固まったが、このように言う人物は楽譜の桜菜柚芽しか思い当たらなかった。だが、柚芽は歩行不可能なはずだ、と首を捻りながら襖を勢いよく開いた。

「やつほー！ 元気かな、彼方ちゃん」

彼方が母、蜜柑を認めたと同時に場違いな明るい口調で喋りが耳に入った。蜜柑は彼方の無事を確認するように身体をあちらこちらに触れる。触れる度に少女特有の花の香りが容赦なく彼方の脳に押し寄せる。

金髪を後ろに束ねて、サンタクローズのような衣服を身に纏って

いた。そんな幼女らしい可憐な服装も似合うと思った途端、彼方は両頬がガスバーナーで炙られているような熱を感じた。

自分は母に欲情するなんて病気なのかも知れない。それでも母を好きでいる事は止められない。そんな意味が自然と籠もってしまう熱い視線で蜜柑の吐息が吐き出される薄い赤いルージュに包まれた唇の動きを見守る。

蜜柑は彼方の口に小枝のような指で触れ、口元をだらしなく、緩めた笑みを浮かべた。

うわあ、という情けない声と共に同様の波紋が心に響いた。

「隙在り、お邪魔しますねえ。家庭訪問つてノリで行きましょ、行きましょ」

無垢さを保った瞳が彼方の身体をすり抜ける。

「謀られた」

蜜柑の両腕を掴もうとするが、空を掴んでしまった。

蜜柑が畳みの上に並ぶ感情を観察しているのに気が付き、目の赤い彩夏とどんよりした曇り空の妃那が会釈した。ふわりは散らかっている部屋の中から御菓子を発掘するのに夢中になっていた。既に七つの箱詰めされた御菓子タワーがちゃぶ台の上に形成されていた。トランペットのベルのように両手を唇付近に添えて、蜜柑は彼方にしか聞こえないくらいに囁き声で呟いた。

「彼方ちゃん、大丈夫っていう雰囲気じゃあなさそうね」

そんな柔らかな母性的な心配する配慮を持った蜜柑の声とは対照的に、

「死ね！ お前なんか死んじやえ！ パパあ、そいつ殺してよ！」

ガキばい喚き声が蜜柑のシオルダーバッグから聞こえた。

犯罪者の娘だからと言って死を与える理由等、あるのだろうか？感情論で全てを裁いて良いのであれば法治国家として成立しなくなる。だが……。

シオルダーバッグから目を離し、妃那から薔薇の絵柄のハンカチを手渡される彩夏に視線を移す。

だが、感情で万物を語りたがるのが人間なんじゃないのか？ 違う。それも違う。理性があるから人間なんだ。

最低なヘタレ野郎だな、彼方。もう一人の冷静に自分を分析する理性という面の彼方が言葉の唾を彼方に吐き付けた。

それでも、不恰好に笑って見せた。

「うん、良かったね。彩夏さん」蜜柑のシヨルダーバッグに向かって言う。「やつぱり、思った通り、彩夏さんには、罪なんかないってさ」

「パパあ」切なげな声の後に拗ねた甘えの含んだ声で不満を跡付ける。「うむ、パパあの意地悪」

「ごめん。けどね、君はいずれ、消えるんだ。二者択一ならば、生き続ける方を僕は選ぶ。ごめん。優しくない大人だから僕は。僕が優しい子どもでなくてごめん。」

心の中で何度も反復した。

壊れたオルゴールのように物悲しく反復する彼方を止めるように彩夏が言葉を紡いだ。

「彼方、セラフィムの所に案内する」

「お願いします、彩夏さん」彼方の誠意の籠もった言葉とタイミン
グを同じくして、袖芽が悪意の籠もった言葉を吐いた。「さつさと
連れてけ、平凡胸！」

>六<

ふわりが蜜柑のシヨルダーバッグに無理矢理、箱詰めされた餅のように堅いポテトというスナック菓子を押し込んで入れようとするのを彼方が止めて、人のバッグに勝手に餅のように堅いポテトを入れてはいけません、と説教してから彼方達はるーぷを後にした。

数十分前に彼方が生死の境を彷徨った竹藪に囲まれた道を通り、登り坂を登って地元の間人ささえもあまり来る事のない魔女が少年と結ばれた場所でもある黒眼山へと足を踏み入れた。黒眼山という名

前の由来は魔女が彼方と同じように左目で人の本質である異形の姿を見通す力があつたからだという言い伝えがある。そのような曰く付きの場所なのに人が足を踏み入れる事がないのは、希灯島の聖域と島民に解釈されているからだ。子どもが言う事を聞かないと、魔女様が黒眼山から下りてきてお前の姿を悪魔だつて言いなされると脅す風習が色濃く残っているのも島という閉鎖的な環境の成せる技だ。その技の通じない処か、喜んでままあ、見て！ と言うふわりの手を堅く握り締め、整備された山道にある階段を登つてゆく。

「足が滑るからな、気を付けろよ」

一番、先頭を歩いている彩夏が後ろを振り向いて注意を促した。

妃那はスカート裾に触れて、この世の終わりとはばかりに大げさに嘆く。

「こんな所、登るんでしたらこんな格好しませんでしたわ」

「うはあー」

白い布が月明かりの悪戯によつて彼方の目に飛び込んできた。

「見ないで下さる」

彼方を睨み付けてから、見下ろすような立ち位置で言った。

「すみません」すぐに彼方は頭を下げ謝るが、彼方のすみませんは一般の謝罪に比べて頻度が高いから信用ならないと思つたのか、妃那はまだ、彼方を睨んでいた。ふわりが何の意図もなく、「すみません、わおん！」

大袈裟にお辞儀をして、妃那に駆け寄り寄ろうとする。

「いいわ、ふわりさんに免じて許してあげる」

「にや、めえ、にや、にあ！」

ふわりは自分の手柄に大はしゃぎするかのよう突然、山道から外れてステップを繰り返して踊り始める。

可愛いなあとほのぼのとした感情でふわりを眺めていたが、ふわりは足を踏み外して前のめりで倒れようとしている。両手に持っていた餅のように堅いチョコレートの入ったシヨルダーバッグを離す心配がない。

まずい！

そんな言葉を上げる暇もなく、

「危ない」蜜柑がふわりの脇から腕を通してそのまま、抱き上げる。
「気をつけなさいふわりちゃん」

ふわりは抱き上げられた事が嬉しいのか、満足そうに動物の鳴き声で吠え続けた。

一同、一斉に溜息を吐き、込み上げてきた笑いをお互いの顔を見合って解放させた。

「こいつ、自分の貰う予定だった楽器が戻ってくる事に気づいているのかしら！」

ふわりに対する愛情を含んだ怒鳴り声がシヨルダーバッグから聞こえてきた。

ふわりの事を嫌っている癖にやっぱり、自分自身を嫌えないらしい。

「気づいているわけないか、今もこいつ、嫌い」

前言撤回、やはり……同族嫌悪という感情でもあるのか、と彼方は首を傾げた。

しばらく進むと階段は途切れて、明らかに人工的整然さが目で認められる砂利道へと足を踏み入れた。砂利道を歩く度に心地の良い石と石が擦り合う二者の語り合いの音が奏でられる。

ふわりはその音が面白いと思っただのか、定かではないが……蜜柑の腕を抜け出して軽やかに踊り出す。耳をすませて聞くとそれが曲のようなリズムを持っている事に目を見張った。

オルゴールのような細く、何処か切ない曲。チェロが主旋律に加われれば、切なさにいっそう、花を添えてくれる事だろう。

「筋肉おばちゃんからーぶを譲って貰っただろう？」

「そうだね。その筋肉おばちゃんと関係が？」

筋肉おばちゃんは希灯島の生き字引とも言われた百十歳で去年、この世と今生のお別れをした優しい全身筋肉が名刺代わりのおばちゃんだった。彼方は彼方様、ふわり様とはいっご結婚なさるんです

か？ と本気で詰め寄られた思い出が頭に浮かび、苦笑いした。

「筋肉おばちゃんの別荘なんだよ、こんから行く場所がさ」

彼方達の前方に突如、古い青い色の瓦屋根の日本家屋が飛び込んできた。瓦屋根はここ数年、手入れされていなく、枯葉が積もっていた。木々に囲まれて月明かりが完全に遮断されている為、その様相はお化け屋敷そのものだ。友人に連れられて来なければ絶対に入室しないであろうと唾を飲んだ。

>七<

暗い中を手探りで彼方達は長い廊下を歩いてゆく。普通ならば、玄関近くに電気をつけるスイッチがあるだろうという文句を自分の中に押し込んだ。

何か、粘着質のあるものが指先に絡みついた。

「うあ、なんだ、これ！ 早く、明かりを彩夏さん！」

「うるせー、ヘタレ。明かりつけるぞ」

彩夏が肘でスイッチを押す。

待つてましたと天井の幾つもの裸電球が頭を輝かせた。彼らの放つ光によりようやく、自分の指先に絡みついたものが蜘蛛の糸だと知り、彼方は顔を顰めた。

廊下の左右の壁には若い女性の写真が幾つも飾られていた。それぞれ全体像を撮影したものであるが、服装が異なっていた。ある者は忍者の黒装束、ある者はガウンを身に纏っていた。ある者はスクール水着。ある者は喫茶店のメイドさん、執事さんなんていうパターンもある。

恐ろしく不条理な蜘蛛の糸が付着した写真達。

笑いたくて仕方がないのか、顔を引き攣らせて妃那が彼方の側に寄ってきた。彼方は愛想笑いを浮かべた。

「みんな、見事なまでに筋肉おばちゃんに似てますね」

「恐ろしい一致ですわ」

遺伝は恐ろしいですね、と彼方が言葉を返そうとした時、先を急いでいる彩夏がさも、当然のように言う。

「それ、筋肉おばちゃんのコスプレ写真だ。だから同一人物」

そう言った瞬間、ふわりがままあ、妖怪が沢山わん、と叫び出した。彼方のキャミソールのスカート部位にしがみつく。さながら、コアラだ。

「ふわりが怖がってますよ」

「彼方ちゃん、本当に怖いのは人間なのよ」

蜜柑はへんてこな顔つきで指を銃のように見立てて、バーン！と撃った。

彼方は白けたが、

「そうですね」

「あら、あら？ マジに受けちゃったの、彼方ちゃん。恐がりね。でも、母が包んであげるから安心よ」

「そう、そうですねか、その時は宜しくお願いします」

背後から蜜柑に羽交い締めされて、彼方は苦痛に顔を歪ませるが、爽やかに応えた。

彩夏と妃那は立ち止まる事もなく、ぽかりと淡い光を嫌うように暗闇が口を開ける階段へと吸い込まれて行った。彼方も蜜柑を引きづりながら階段へと急いだ。

階段の構造は至ってシンプルな木製だ。ただ、狭いため、壁と壁の間に階段が存在しているという随分と使い手の悪い窮屈な階段だ。長い間、使われていなかった為か、先頭に行く綾夏と次に歩いた妃那の靴後の部位は肌色をしていて、その周辺は片栗粉が塗したように白だ。

「何処まで降りますのよ」

妃那が不満を隠すことなく、漏らした。

無理もない。階段を下り始めてから数十分は経過している。埃っぽい空間のせいも、誰もが時折、咳き込んでいた。

「後少しだ」

と彩夏が応えた。それからさらに数分後、鉄製の扉が彼方達の前に姿を現した。あまりに暗闇と同化していたので、彩夏が懐中電灯を当てるまで、道が続いているという錯覚に陥るほどだった。

彩夏が扉を開けて、それぞれ順に部屋の中に入る。

そこは異質な空間だった。

無数の等身大の人形が置かれていた。その人形達の服装が同じウエディングドレスという異様さには全員が絶句した。それぞれ、人形が持っているブーケの花は種類が違う。クローバー、雛菊、向日葵、桃、薔薇といった何の脈絡もない造花に何の意図があるのか、と彼方は首を捻った。

その中央には真っ白な棺が置かれていた。その周囲の左側に熊の縫いぐるみ、右側にライトノベルの挿絵にありがちな小さな女の子を模倣した縫いぐるみが整然と置かれていた。

悪趣味だと思いつつも彼方は目で誰が開けると、みんなの顔を見回した。妃那は当然とばかりに顎を上にも動かす。お前だとその仕草で意見し、彩夏も悪ガキのような笑みを浮かべて彼方の肩を叩いた。母、蜜柑に助けを乞うとしたが、頑張れと声を出さずに口を動かしていた。

そんな中、ふわりだけは彼方の手を握り締めて、後退りしようとする足にめえ、なのじゃん、と言っていた。楽しそうに見えるが、内心では怖いと思っているに違いなかった。

よし、と自分のヘタレ虫を退治する言葉を心の奥底で吐き、棺を勢いよく開いた。

そこにあつたのはエジプトなんかでありがちなミイラではなく、「あ、トランペット！」

真っ白いトランペットだった。トランペットが羽毛の中に埋もれていた。そのトランペットのベルには美しい少女が描かれていた。ふわりに似た小さな少女が描かれていた。多分、桜菜柚芽なのだろう。この楽器は母から娘への最後の贈り物なのだから。

羽毛の中に手紙が混じっている事に気が付いて、見開く。

「そんな、そんな。そんなのって……」
低い稚拙な言葉が口から溢れてくる。

桜菜林檎という人物を僕は誤解していたのか？

「間違いない、パパあ。あれがセラフイム！」

背後から聞こえた柚芽の声に咄嗟にふわりのパジャマのポケットに手紙を押し込んだ。ふわりはきよとんとしていたが、紙を預かった事に喜んでいた。

繕うように彼方は呟く。

「セラフイム」

「ええ、実物は初めて見るけど、林檎らしい異質なデザインね」

近づいてきた蜜柑が感心したように言った。蜜柑のシヨルダーバツグにいる柚芽もうむ、と声を出して喜ぶ。

手紙の事はばれていないことに彼方は安堵の溜息を吐く。

彩夏はセラフイムを両手で掬い上げ、ふわりの目の前に示す。

「ふわり、受け取れ、セラフイムだ」ふわりは自分が物を貰える事に奇声を上げて感激していた。「ごめんな、今まで」

「にゃん？」

セラフイムを受け取ったふわりは納得できないのか、無表情で謝罪の言葉を受け取った。何の事か、解っていないのは誰の目から見ても認識できた。

「セラフイムは、柚芽の……。そうか、私はもう」何かを悟った柚芽の言葉に彼方が気づき、俯く。「そうなんだ、よね」

柚芽は気付いてしまったのかもしれない。自分には人間としての時間はないという事実にも。もし、それだけならば、問題はない。まだ、柚芽は気が付いていないはずだと願いたい。

どちらにしても、消える事に苦痛はないはずだ。肉体的には……。精神的には……。

小僧、いつまでもトランペットを持たずにいるのか？ それは許されない。神が許さないだろう。私は消えてしまっが、お前を天国なる場所から見ているぞ！ お前は……。

ウィーンで初めて聞いた楽譜の声 燐銅じいさんの最期の声が彼方の脳裏に蘇った。彼は満足そうな声で逝った。だが、そうなのだろうか？

人は消える事に満足する事ができるのだろうか？ 僕は出来そうにない。出来そうにないんだ、燐銅じいさん……筋肉おばさん、林檎さん。

彼方ちゃん、うちの可愛い雛を大人にするのはあなたの役割よ。こらこら、大切な娘と、将来の息子を唆すな、お前。仲睦まじかった妃那の両親 淳南さん、晋太郎さん、僕は出来そうにない。

涙が彼方の意志に逆らって溢れてきた。

「さあ、次は彼方ちゃんの番よ」

彼方を抱くように背後から蜜柑が抱きしめ、

「どうしたの？ 何か、思い出した？ 誰かを想ってまた、泣いていたの？」

耳元で蜜柑が囁いた。

「いえ、消えるのって苦痛なんでしょうか？」

「意志を通した人間にとっては苦痛ではないのでしょうか。でも、それは逃げよ。逃げないで最期まで苦しみ足掻きなさい、彼方」

彼方をお姫様抱っこして、蜜柑は囁いた。

彼方は突然の事に赤面しつつ、自分は女性の方に持ち上げられるほど、貧弱なんだと落胆する。妃那と彩夏の茶化すような口笛が聞こえた。それが結婚の時に流れるような曲調を持っているのだから確信犯だろう。

「でもね、貴女は恵まれているの、共に生と死の苦しみに立ち向かう仲間だね」

母、蜜柑の言葉に彼方は周囲の仲間達を眺める。

まあ、と言いなながら笑顔を絶やすことのない小学生のふわり。今は頬を膨らませながら笑っている。不機嫌なのかな？

るーぷを一人で切り盛りしている仕事中でも子どもと遊んでしま

う姉貴肌の社会人である彩夏。今は妃那と一緒に希灯市に新しくオープンしたメイド喫茶についての話題で盛り上がっている。

完璧を目指して今も音楽の道を志す元婚約者であり、お節介なお嬢様 妃那。今は彩夏がメイド喫茶に実は俺の知り合いがいるんだと言ったのに対して、あら、気品のないメイド喫茶のようですわねとからかうように口を緩ませて言った。

今、楽譜の袖芽はショルダーバッグの中で袖芽様を出せ、ここは暗い。暗いの反対と元気よく喚いている。

今、施設の子ども達は何をしているだろうか？ ぷりんはもう、寝ているだろう。あけなは布団の中で僕から徴収した御菓子を食べているだろう。澄は私が一番よ、一番、完璧 瞳坂妃那という妃那のお古の鉢巻きを頭に巻いて机に向かっているだろう。

蜜柑の母性に満ちた安らぎを象徴した顔を見て今、頷く。

今を生き、足掻こう。

「手にするのよ、恵まれし者に相応しい器をね」

母が言う器とは僕に相応しいものなのだろうか？ 生から、死か

ら、人の本質から逃げていた僕に……。

少女の崩壊する音 二

少女の崩壊する音 二

> 一 <

これは誰も知る事のない少女の悲しみの記録。求めるものを得られなかった二度と戻る事のない少女、桜菜柚芽の記録。これを書き記すのは誰でもない。私でもない。あなたでもない。強いていうならば、何処かにいる神様のきまぐれだ。

柚芽三歳。

柚芽は願っていた。

「パパあ、柚芽。トランペット、吹けるようになるから、戻ってきて」

柚芽四歳。

柚芽は願っていた。

「パパあ、柚芽。フルーツ、吹けるようになるから、戻ってきて」

「じいや、柚芽のパパあは彼方ちゃんに似ているんだよね？」

「はい、そっくりでございます。それどころか、柚芽お嬢様の母様にもそっくりでございますよ」

「ふ〜ん、じゃあ、柚芽。大きくなったらこの子と結婚する」

「さようでございますか？ では柚芽お嬢様の父様の許しを得られたら葉瀬家の彼方様にお会いにいきましょう」

柚芽五歳。

柚芽は願っていた。

「パパあ、彼方。柚芽、指揮完璧に覚えたよ」

「柚芽お嬢様、大変……言いにくい事ですが、」

言葉を窄めるように柚芽の耳に年老いた白髪の執事が事実を話し

た。

あら？ 貴女も真実が知りたいの？ え、違うのか、なんだ。私は神様のきまぐれ。貴女は……そう、柚芽の母なんだあ。

柚芽の母、林檎は我が子を愛おしむ眼差しを向けて、なんとも悲しそうに微笑んだ。

「ごめんね、柚芽。ママあね」嗚咽し、涙を流す。「死んじゃった」それと呼応するように真実を知った少女は絶望しました。

「う、じいやの嘘つき！」

地震の日。

柚芽は願って、願って、願って……。

神様のきまぐれである私がただ、ただ、一度願います。それくらい、許して下さい、可愛らしいお姿の神様。

その日、柚芽はベッドの中ですやすやと眠っていました。それを自分の一部のように愛おしく、慈しむ柚芽の母は柚芽の手をぎゅっと握り締めました。

「ごめんね、今……幸福は壊れるんだ。

突如、世界の終わりが訪れました。少女だけが存在する暗闇の空間に大きな揺れが襲いました。神様のきまぐれが見ている柚芽の記録書の記載に、桜菜柚芽はそんな揺れを体験した事がないそうです。でも、これで死ぬ予定なので関係ないのかもしれないですよ、はい。「何、これ、身体が浮いてる、うわあ。助けて」

声は届かず、母の部屋で寝ていた柚芽はベッドから投げ出された。「助けて！ じいや！ パパあ」柚芽頭上に天井が迫ってくる。「かなた！」

柚芽は這うように窓から飛び出し、芝生の上に身体を横たえた。硝子の破片が突き刺さり、身体中から赤い液体が溢れ出す。

神様のきまぐれは知らない、赤い液体のことを。なんだっけ？でも、これは死に至る現象だ……多分。

「痛い、よ。助けて……誰か」

痛がる柚芽の頭上を目掛けて、花瓶が落ちてくる。まだ、柚芽は

その事に気が付かない。

「ごめんね、柚芽」柚芽のこの世の者とは思えない悲鳴に林檎は両手で目を覆った。「柚芽にはパパあはないのよ」

血の海に沈む柚芽の寝顔に母、林檎の悲痛な言葉だけが降り注いだ。

神様のきまぐれである私は願います。夜のように覆うのが絶望だとするならば、少女に星くず程度の僅かなものでも良い。

ただ、希望を！　ただ、夢を！　ただ、その彼方にある世界を見せてあげて下さい。

彼方の左目にも神様のきまぐれが宿っている。どうか、彼ないしは彼女が私とは違い、無力ではない事を切に願う。

記録者　神様のきまぐれ。

三話 柚芽と、ふわり

三話 柚芽と、ふわり

>—<

蚊がぷーんというへなちよこな音を奏でていた。どうやら、彼の飛行音のようだ。先ほどから、彼方の顔の周囲を飛んでいた。顔を振って追い払う。

「お前、好かれんてなあ」

溜息にも似た口調で感想を述べて、彩夏はアイスバーを一口、食べた。

「それは、これの事でしょうか？」

彼方の目線の先には忌々しい蚊がまだ、優雅にお空を飛んでいた。それともこれの事でしょうか？ と両膝にしがみつくとふわりとぷりんを指さした。

指されたぷりんは不機嫌そうに彩夏を見つめて、

「何、アイスのお姉ちゃん。そのアイスバー探す音、五月蠅くてぷりん睡眠不可！」

「お前なあ、蜜柑さんがいなくたって変な場所で寝るなよ？」

「変違う」

彼方達は蜜柑が彼方に渡したい物があるという言葉によって、希灯児童養護施設に戻った。それから、蜜柑は鍵を取ってくるというので、彼方達も休憩しようと三階の食堂へと行く。そこにはテーブルにポテトチップの山に横顔を載せて眠るぷりんの姿があった。時折、ポテト増量と嬉しそうに微笑んでいたのだからさぞ、良い夢だったのだらう。ふわりがぷりんの周りにあるポテトを必死に食っていたのだから、正確にはポテト減量だ。

「僕は二階へ行こうって言ったんだよ」

「あ、汚いぞ、彼方」

「意地汚いのはあなたですわ、綾夏さん」

トウルーという真新しい木の看板を弄くりながらそう言った。

アイスバーを二本両手に持ちながら、二本交互に食べるという器用さを発揮している彩夏と、今はポテトチップをお口の周囲に付着させているだけのぷりん。どちらが汚いという単語に当てはまるのかは一目瞭然だ。

「それにしても、遅いですね。あれから十分も経っています。鍵を開けてから中で一体何をしているのでしょうか？」

遮光カーテンで遮られた窓を凝視するが当然、何も写さず、黒い画用紙が張り付いているようだった。

鍵をとって食堂に来た蜜柑が次に発した言葉がさあ、行きましようトウルーへだった。そんな経緯があり、彼方達は星がはつきりに見える満月の夜下を熊のように右往左往している。夏と希灯児童養護施設から渡り廊下にて繋がっている山奥だという環境は変わらなという事から、耳五月蠅い蚊が大量発生している。

「ままあ、採ったにゃん？ ふわり偉い？」

「うげえ」「お前え」「なんて事を」「命大事」

悲鳴めいた声を上げる彼方、目を丸くする彩夏、両手で嫌な物体を見ないように顔を隠す妃那、ふわりに微笑みかけるぷりん。

ぷりんがふわりの手の中に在るもの 血を流して潰れている蚊を触ろうと手を伸ばす。だが、それよりも先に彼方の腕がぷりんの手を掴んだ。

「お兄ちゃんが何とかするから大丈夫だよ？」

「ぷりん、ふわちゃんの面倒見る」不服そうに顔を膨らませてぷりんはそう言い、ふわりの腕を掴んだ。「ふわちゃん水道行く」

ふわりが返事もしないうちにぷりんが水道へと先導した。水道は大きな夏みかんの木の下にあった。夏みかんは自身の重みに耐えかねて時々、流し場に落下している。今日も二房のみかんが流し場に居座っていた。

ぷりんは足でそれらを押しつけて、水道を勢いよく捻った。動作が大袈裟だった。それを見て、彼方は柔和に微笑んだ。

水道から清らかなる水が滴り落ちる。その水に蚊の死体が乗った掌を添えた。くたびれた様相の蚊は水と共に地の底へと落ちていった。

それをふわりは手を振って、

「バイバイわん！」

「子どもって残酷ね」

「今も十分、妃那さんは残酷ですよ、僕に」彼方は萎んだ声で言い続ける。「キムチとか、キムチなんて」

「何か、仰いましたか？」

「いいえ、なんでも」

勢いよく首を横に振った。それと同じ刻、勢いよくトゥルールの扉が開け放たれた。途中、彼方の方を向いて冷めた笑みを浮かべていた妃那の顔をなぎ倒していった。

扉の向こうの明かりから映えた蜜柑が嬉々とした声を上げた。

「お待たせ、みんな」痛がる妃那を一瞥して、御免と手を上げて謝り、苦笑いした。「さあ、どうぞ、どうぞ、中に入って！」

蜜柑の声に應えて始めに入った彼方が部屋中に展示された子ども服の間と間を蟹歩きで進むと、木面のフローリングの橙色が突如として緑色に侵されていた。その緑色はい草で作られた蔭だった。そのい草の上には蛍光灯の光を反射して、後壁に吊されたシルクの生地に赤い光を移すトランプペットがベルを下にして蔭の上に座っていた。

その朱色のトランプペットから放たれる見えない神々しさに彼方は呆然とするしかなかった。憧憬の念を抱いていた。幼い頃から絶対的存在であった楽器がそこにはあった。彼方は触れようとしたが……すぐに手を引っ込めた。

俯いた。自分の不安な顔がベルに臍気に投影されていた。その頼りない顔は彼方自身のヘタレという本質を表している気がした。

「マカリオイ」記憶が正しければ、プロとして母、蜜柑が愛器として使用していた音楽界で赤い宝石と賞賛されていたマカリオイだ。
「何で？」

背後からゆっくりと近づいてきた蜜柑が彼方の両肩を軽く叩いた。
「何でつて？ 彼方ちゃん、それ使つてね」
振り返つて、怪みの含んだ視線を蜜柑に晒した。

「ふわりちゃんがセラフイムを持つなら教えてあげるでしょ、彼方ちゃん？」蜜柑の横にいたふわりの脇に腕を通して、彼方の隣に立たせた。「ん？」

直ぐさま、回答を求めるように蜜柑は顎を上下させた。

「僕は……」

マカリオイを手にして大勢の音楽マニアから舞台の上で脚光を浴びる蜜柑の栄光が脳裏に過ぎつた。指先が諤々と震えた。

この指先の震えは……その脚光と混じつて卑しい顔をした動物が潜んでいたと心の奥底にあるエピソード記憶が彼方を襲う。トランペットを奪った記憶が今も尚、足踏みさせていた。まだ、マカリオイのある前方を向けなかった。

「彼方ちゃん。もう、自分の中でどうしたいのか、心に留めてあるんでしよう。だったら、決めたことに後は忠実に従うだけで良いのよ。迷う事も大切だけど、それはまだ、何も得ていない状態だからこそ、効果が発揮されるのよ。やってみて駄目だったら、母の胸で泣いても良いの」

決まっている、決まっていると浅く頷いた。

「僕は……良いのでしょうか？ 逃げたのに」

女兒用の黄色いワンピースを身につけた男児のマネキンの隣にいた妃那がふつと鼻で笑つてから言う。

「逃げたからつて戻つて来てはならないなど、誰も決めていませんわ。一体、誰が何時何分、そう仰つたのかしら、存じ上げません」

彼方が言葉を言う暇もなく、アイスバーの棒をお手玉しつつ、彩夏は口を開いた。

「あんのなあ、お前一人にお前の弱さを任せないな、俺たちは」
左手に暖かい何かが触れた。はに噛むような笑みを浮かべたぷりんだった。

「ぷりん、お兄ちゃんのトランペット吹くところ見たいな」

ぷりんという少女の真つ正直さは一緒に暮らしている彼方自身が一番知っていた。多分、心から願っているのだろう。そして、左目で見なくとも……妃那、彩夏も心から願っている事を信じたい。

信じるならば……。

ふわりと目が合う。ふわりは動物鳴き声を彼方に向かって吠えた。

「はははっ」吠えるふわりを片手で抱きしめて、馬鹿笑いをした。

「だらしのないなあ、僕はヘタレだ。決めていたんだったよね」

マカリオイを掴んだ。マカリオイから温もりが伝わってきた。それが彼方に勇気を与えてくれた。

「マカリオイ。僕と一緒に音を奏でてくれ」

普段ならば、そのような気取った台詞を吐かないのだが、そう言わずにはいられない。自分の決意に酔っていた。

彼方の視界に真新しい白銀のマウスピースが映った。蜜柑が両手でそれを彼方へと見せていた。

「彼方ちゃん、はいこれ」

自分の部屋に放置してある真新しいマウスピースを思い浮かべてから、

「でも、僕……持っていますよ?」

申し訳なさそうにそう言った。

「セラフィムもそうだけど、従来の量産型の楽器とは仕様が異なっているの。公式のコンクールでセラフィム並びに、マカリオイを使用する事は禁じられているのよ」

彩夏がふわりに持たされている白いケースに入っているセラフィムに、妃那は目を向けてこれもですのお、と驚愕していた。

それに対して彩夏は嘆息して言う。

「使えないなあ」

「こら！ そんな訳がないですわ。桜菜林檎のデザインした楽器はどれも最高の音質を誇っていますわ。セラフイムは娘に与えるくらいですから」彩夏の不満そうな顔を指して、ジリジリと迫る。「使えますわよ。ちよつと、彩夏さん？」

突然、彩夏が声を潜めて泣き出したのに驚いて、妃那はたじろいだ。

無理をしていたのだろう。勘が鋭い彩夏の事だから、僕の嘘はばれていたのかもしれないと彼方は思った。

「林檎さんはいつつも何処か、抜けてんだよ。コーヒーに塩を間違えて入れて、それを部屋の片付けを手伝ってくれたお礼よ、とか……言つて」

何かを耐えるように両拳をぎゅっと握り締めて、口を真一文字に詰むんだ。彼方は声を掛けてやりたい衝動に駆られたが、それは自分が必要ではないと判断した。

そう、それをすべきなのは。それが許されるのは。

彩夏の前に蜜柑が駆け寄って感情のない顔で彩夏の前に立ち、

「え、母」

蜜柑が勢いよく、彩夏の頬を叩く。彩夏はよろめき、打たれた右頬を手で押さえて立ち尽くす。

「林檎ならこうするでしょう。あの子、大好きな子には厳しく当たっちゃう子だから。過激なツンデレなのよ」

蜜柑はハンガーに掛けられたエプロンから写真を取り出し、目を細めて見つめていた。彼方は背後からこつそりと覗き見る。そこには蜜柑と同じ金髪のストレートヘアの少女が映っていた。吊り眉で如何にも意志の強そうな蒼い瞳が今でも時を越えて何か、喋り掛けてくるようだ。

漠然と桜菜柚芽がもし、幸福に暮らせていたら、と妄想せずにはいられなかった。

ああ、どんなに満ち足りた日々だったのだろう。

「良いのよ、もう。林檎はふわりちゃんから逃げちゃうくらい弱く

て愛情の深い子だったから、そんな子が貴女のようなお友達に出会えたのだから感謝しているのよ、彩夏」

蜜柑はその写真を破り捨て迷わず、ゴミ箱に捨てた。

僕は母ではないから、推測するしかない。日中、小さな子ども達と一緒にトウルーに引き籠もる母がいつもしているエプロンにあった写真は心の拠り所だったのではないだろうか。誰だって……拠り所を持っている。僕はふわり、彩夏さんは林檎さんとの思い出だったのかもしれない。妃那は完璧にやりこなそうとするプライドだったりするのもかもしれない。これは推測でしかない。僕は左目を使わない限り、出来損ないの神様なんかになれはしない。出来損ないは見守る事しか出来ない。

それに彼女は強いからだから。

「はい」

ほら、頷いた。

「ジメジメしたお話はおしまい。さてと」彼方の肩に手を置いて蜜柑は宣言する。甘い大人の香りが背後から漂ってきて失神しそうになる。刺激が強いと彼方は蜜柑から逃れようとする。「熊部と結託して蜜柑吹奏楽団は希灯音楽祭に出ちゃいます！」

蜜柑はがっちりと彼方を捕まえて悪乗りして、彼方が抱いているふわりの頬に口づけする。ふわりはそれが気にいったのか、しきりにわん、わんと鳴き始めた。

「え、聞いていませんけど！」

尚も逃れようとする。

「言ったら、ヘタレな彼方ちゃんは尻込みするでしょ。練習には目標があった方が断然、良いでしょう」

そうですねという同意する言葉を飲み込んでとりあえず、彼方はふわりを両手で抱きしめてふわりの背中に頭をくっつけて泣いているフリを試してみた。

「ヘタレね」「ヘタレだな」「ヘタレ嫌、でも、ぷりん……お兄さんのお嫁さんになる」

妃那の声、彩夏の声の後、ぷりんのおどおどした声が聞こえた。真剣なぷりんの言葉に蜜柑が彼方の耳元囁いた。

トウルーの後継者、二人目ゲット！ やったね、蜜柑ちゃん、と随分と狡猾な母だった。二人目という事なので今後はふわりとぷりんを結婚相手として勧めてくるのか？ それは定かではないが…常識を、と言つべきなのだろうか？

>二<

窓を開けて放心している少年は何を思っているのだろうか？

多分、あの青空に力一杯、自由という名の羽根を飛ばたかせて、どこまでも、どこまでも飛んでいきたいなあ。そりゃ、無理だわとでも夢想しているに違いない。だって本人が言うのだから。

窓から見えるのは別世界だ。プールという名のユートピアが目に映る。ユートピアには人魚が遊泳していた。ここからだど五匹ほど見える。こういう時、左目は不便だと彼方は嘆息した。今日は見える姿がまちまちになっている。突然、変わったりもするのだから左目のきまぐれには付き合いたくない。残念なことに宇宙で大義名分を掲げて戦うようなロボットではないので、左目のパーツだけ交換という事は不可能だ。

「ふわり、前はあんなに吹けていたじゃない？」

「そんな訳ないよ、妃那さん」

妃那の方を振り向かず人魚を見下ろし続ける。蝉が五月蠅く、合唱する程、暑苦しさが増しになるのだが煌めく上半身を魅せてくれる人魚の御陰で心が涼しい。まるで心の飲料水だ。

一コースの人魚は胸が小振りだ。だが、スタイルが抜群に良い。特に括れからお尻へと向かうラインにメリハリがある。評価、生きる芸術品だ。

「ふわり、逃げ出さないで下さる」

「駄目だぞ、ふわり。練習はサボってはいけませんよ」

彼方自身が昨晚、厳選していた自分の机の引き出しに眠っていた今回の曲候補を、口笛で吹いておく。

二コースの人魚は胸はエベレスト級に美しく、実っているが……足が大根のように太い。胸に将来性を大いに感じるから激励賞といったところか。

三コース……。

「痛いあ！」

足に何か、重い物による衝撃が響き渡り、鋭敏な痛覚が全身に不協和音のように溶け込んでゆく。不快な気分が広がった。

彼方は窓から購買室（今は勝手に熊部部屋）に視線を移動させる。足に乗っかっていた兎の耳が付いた上履きにさらに力が入る様相が手に取るほど解るくらいに、彼方の足に圧力が掛かってゆく。

彼方は慌てて、目と鼻の先にいる癖っ毛のない金髪のを風にふわっと靡かせる少女に抗議する。

「痛いよ、ふわり。そんな事しちや駄目でしょ？」

彼方がそう言った時、ふわりはデコピンと共に感情を剥き出しにした赤面顔で彼方の顔を覗く。

「まあ。他の女の子をじろじろ見ちゃ駄目だよ。まあが見て良いのはふわりだけだつてあれほど、言っているでしょう？ 例え、一秒でも見ちゃ駄目なの。いつも、不満でしょうがないよ。まあ、可愛いから生意気な女の子にお持ち帰りされちゃうかもしれないもん！ 駄目だよ！ こそ以上、見るんだつたらふわり、泣いちゃうんだから。本当だから、本当だよ。ふわりが嘔吐いた事無いでしょ？ でも、まあはふわりにいつぱい、嘔吐いた事、ある。ああ、思い出したらお腹がぼかぼかしてきた。先週の金曜日、街に行くつて言っていたのに、ぷりんちゃんの宿題があるからってぷりんちゃん外でおデートして！ そんなにふわりに魅力がないの？」

とんでもない早口で英語という名称の言語が紡がれてゆく。彼方に弁解を述べる暇は与えられなかった。ただ、ひたすら、たじろぐいつものようにカウンターに胡座を掻いて、ウザイほどに毒どっ

さりです、奥様という名称のアイスクリームを食べていた彩夏がその動きを止めて木のスプーンを持ったまま、固まっていた。

「おい、妃那？ あれ、何語？ フランス語？ アイヌ語？ それとも、古代動物鳴き声語か？ ふわり、恐ろしい子」

信じられないような者を見るような目つきで彩夏を見た妃那は、あまりの衝撃にサックスを両手から離してしまう。慌てて、サックスを持ち直す。バンドを首から掛けていなければ、サックスは今頃、床に叩きつけられて破損していただろう。

彼方はその様子を一部始終、眺めてひんやりとしたがどうやら、大丈夫のようだとはっと、出来なかった。こちらではふわりが英語で如何に自分が魅力的かを語っていた。どうやら、本気で怒らせてしまったようだ。

「彩夏さん、あれは貴女が約六年間、慣れ親しんできた英語という言葉です。世界の大半で使用されている言葉ですわ」

「やっぱそうじゃねえかあ、古代動物鳴き声語」

古代動物鳴き声語ってふわりの日本語の語尾を拝借しただけでしょうと彼方は現実逃避を試みようとしたが、依然として彼方の耳はふわりの本場の舌を巻くような英語から逃れられない。

「世界に暗殺されますわよ。彩夏、可哀想な子」

「うるせー、哀れむな。俺はどこぞの時代の犬様じゃないぞ」

「歴史は詳しいんですのね」

彩夏はサックスと譜面台との距離を変えつつ、そう言った。

「ふわりの言葉、ままあ？ 聞いている？」

「う、うん。聞いているから、お願いだから抑えて。いつものように動物の鳴き声でお話すれば、感情抑えられるでしょう？」

「にゃん」

不服ながらもふわりは鳴いた。ご褒美に、目に悲しみの水滴を溜めた泣きそうなふわりの髪を優しく撫でた。

「ごめん、これからはふわりだけを見るよ」

「それも問題あんぞ」

アイスクリームカップをゴミ箱に投げ入れて、彩夏が投げやりになんて言った。

母、蜜柑の無謀な提案から二週間経ち、高校生の一番大好きなお祭り、夏休みがやってきた。だが、熊部には夏休みは当然、やって来ない。その鬱憤を晴らす為なのかは不明だが、熊の衝立も海パンとゴーグルの絵を貼り付けられ、夏仕様になっていた。妙に浮かれた感じに出来上がってしまった為か、熊部一同に大変、不評を買っており、彼は今、文字通り窓際に左遷されている。

勿論、夏休みを守るべく、彼方としては戦いたかった。だが、ふわりともう、一緒に同居させてあげないよという卑怯な攻撃の前に二週間前、一分で白旗を揚げた。やるからには全力を尽くしたい。誰もが初心はそう心構えを持っている。だが、現実と希望には大いに隔たりがあるようだ……彼方はマウスピースの中央の空洞から自分が手に持っているトランプペット マカリオイを眺めた。

「まさに宝の持ち腐れかな」呟いた後、自らを鼓舞するように、「よし、やるぞ！」

今日、百六十回目のマウスピースに口をつけるという練習を開始する。

唇を恐る恐る近づけてゆく。マウスピースとの間は徐々に縮まる。手が震えだし、マウスピースと唇がすれ違う。

深く息を吐き、浅く息を吸い込んだ。何度も繰り返し、心を落ち着かせた。

「どうして、どうして僕はもう、決めたのに」

彼方は悔しそうに呟きながら、顔を顰めて窓から麗しのプールを覗き込んだ。四コースで小さな女の子が懸命に泳いでいた。派手に水しぶきを上げる足。決して上手いとは言えない。彼方には女の子が眩しく見えた。

私って天才！ と愛らしい叫ぶ声がここまで聞こえてきた。やはり、女の子は水泳が大好きだったのだ。母親が女の子の髪を乱暴に撫でる。きつと、良く頑張ったとも言っているのだろう。

かつて、彼方もあの女の子と同じだった。下手くそな音を掻き鳴らして、掻き鳴らして……上達などしなかった。それでも、無性に奏でたくなつた。今もそうだ。これまで、音を再び、奏でる自分を想像しながら、マウスピースに口を付ける練習を重ねてきた。

本当にそうか、彼方？ お前は本当に心からそう思っていたのか？ 何処かで妥協していなかったか？

ふいに自分の精神分析という名の分析屋が心の小部屋からしゃしやり出てきた。

彼方、嘘を吐くのは止めようぜ。人間ってのはとんでもなく、弱い生き物だ。自分では強いって思っているけどね。彼方、お前は知っているだろう？ それが人間だ。だからな。

そう心から飛び出してきた分析屋は上品な笑いを彼方の腹に響かせながら自分の小部屋に帰った。

「人間だもんね。もう、一回」

彼方はそう呟いてマウスピースを自分の目線へと持ってくる。天才だと自分の事を自負していた女の子は再び、プールの中へと飛び込んでゆく。彼方は女の子にエールを心の中で送る。

自分の弱さに負けないで君も自分と戦い続けてね、と。

「そうよ、唇をマウスピースの中で震わせるの」ふわりは両手でマウスピースを持って目を瞑りながら唇を振動させて、音というよりは動物の悲鳴のような細かい声を室内中に放っていた。その様相を見て深く頷いてから、彼方に視線を移す。「よって……あなたが教えるのが筋でしょう、トランペットで数々の名のある賞を総なめにした天才さん」

彼方はマウスピースを振りながら、

「そっちもそうじゃないか、それに現役」

「笑って誤魔化さないで下さいます？ それにこの子、本当はわたし以上の実力者。猫かぶりですわ」

むさい男だつてこれなら食べちゃうんじゃないあねえと記載されたビニールを乱雑に破って中から淡い緑色のアイスバーを取り出し、こ

満悦の彩夏が言う。

「おい、お前ら、私語厳禁」二週間前に熊部初の舞台に向けてに当たって書いた目標、私語厳禁をアイスバーで指した。「あ、アイス……勿体ない！」

棒の刺さり具合が悪かったようだ。アイスは下に傾けた瞬間、夏休みに入ってから一度も清掃されていない床へと音を立てる事もなく、静かに落下した。驚いたことに星形は保たれていた。

「違った意味で食べられないよ」彼方はマウスピースを口に当てようとしたが、彩夏の握り締めた棒を目が捉えた。当たりだった事に、「あ」

と低い声で唸った。

彩夏がしばらく固まっているのを一瞥してから、マウスピースへと勢いよく口を近づける。

あの女の子と同じ歳だった頃、ふわりと同じくらいの歳。僕はトランプペットという友人に出会った。友人が我が儘を言うのを拒絶して、絶交とすぐに離れていってしまう事が出来るだろうか？ 否、それはない。証明しよう。証明しよう。まだ、僕がトランプペットという友人と交流を持ちたいと思っていることを。

後、僅か。

後、ほんの僅か！

さあ、今こそ、僕の友人、トランプペット！ 共に音楽という世界に身を投じよう。

「あ」

今度は生暖かい感触に驚き声を上げたのだが、

「案外？ 気の持ちようって事でしようか……。ヘタレだな、本当にマウスピース内で口をもごもごと動かし、そう言った。

大丈夫だったと、安堵した。目を閉じた。

顔が見えた。それは人の形をしていなかった。

不機嫌な鶏は顔で語っていた。あいつなんて死ねば良いのに。陽気に微笑みながら福与かな人參は顔で語っていた。最近、太り気味

だな、ダイエットしなくちゃ。荒い息を吐いている猪が顔で語っていた。上手い話が何処かに転がっていないかな、全く。

舞台の上でお前の音楽を真剣に耳を傾けるものなんかいないと様々な顔が語っていた。背中に針を刺されたような痛みを感じた。その痛みが汗を呼んだ。

「お前達に負けるもんか、僕は」

目を開いた。そこにはやはり、異質な顔なんか無くて、彼方の目の前にあるのは何も楽譜を立てていない譜面台だった。楽譜の桜菜柚芽を連れて来れば、少しは気が紛れたのかもしれないと譜面台を見てふと、思った。

よしゃあああ！ と言う彩夏の奇声に驚いて振り向いた。

彩夏が当たりの棒を天に掲げて、無垢な子どものように喜んでいった。

「プラスマイナスゼロではありません？」という妃那の言葉にカウンターから飛び降りて彩夏は言う。「すぐ拾えば大丈夫だって！」そう言っただけで埃まみれの緑色の物体を拾おうと手を伸ばす。だが、その手は妃那に掴まれる。妃那は静かに首を振った。

「ちっ」舌を鳴らして、「奴はもう、死んだって事かよ。全く、彼方並みの女々しい母のお胸吸っているよ的なヘタレ野郎だな。おい、彼方！ お前の部下だろう？ しっかり面倒見るよ」

「跳躍してませんか？ それに僕はヘタレじゃないよ」

と言っただけで練習を再開して、彼方はその言葉をすぐに撤回した。やはり、とんでもない救いようのない母のお胸に顔を埋めてる的なヘタレでした、と。

何度、マウスピースに口を付けようとしても身体が拒絶する。まるで心と体が離れ離れになってしまっているかのようだ。

もう一度、挑戦してみようとマウスピースを動かした。
がたっ！

そんな大きな音がして、音のする方向であるふわりと妃那の方を凝視した。椅子が倒れ、窓際に追いやられていた熊の衝立に隣接し

ていた。

妃那はふわりの蒼い瞳を大袈裟に見入り、ふわりの手に持っていたマウスピースを奪い取ってから、床に置いてある唾拭き用のハンカチに置いた。

「練習、もう終わりわん？」

手持ちぶさたになつたふわりは終わりと判断して、山のように御菓子の入った竹籠からスナック菓子をとり出して妃那に差し出す。

それを妃那は受け取らずに叩き落とした。何するんだ！ という怒りの形相が背の高いふわりの顔から浮かんでいる。だが、彼方の右目は小さなふわりが満面の笑みを浮かべてきよんとしていた。

「ふわりさん、おふざけにならないで下さい。トランペットの他にもとんでもないレベルで奏でていたじゃありませんか」

「おい、妃那」

ふわりの頬を叩こうとする妃那を横から彩夏が突き飛ばす。妃那は蹠踉めいたが倒れなかった。身体を持ち直しながら、

「ふわりさん、やる気あるんですか？」

「ふわり、ちゃんと吹いているじゃん」

今にも英語で捲し立てたいと背の高いふわりの目はこちらを盗み見ていた。彼方は駄目だよと首を横に振る。しゅんと背の高いふわりは肩を落とした。

「じゃん！ じゃんですって……貴女は」ふわりに迫ろうとした妃那の前に彩夏が間に入る。彩夏が存在を無視してふわりに言う。「気分を害しましたわ。しばらく、休憩に致しましょう」

「おい、勝手に致すなよ」彩夏の言葉を聞かずに妃那は扉を乱暴に閉めて出て行く。「おい」

彼方はすぐにふわりの方へと駆け寄ったが、背の高いふわりは彼方に妃那を追ってあげて、と首を扉の方へと向けた。ふわりの髪を一撫でしてからふわりをおんぶした。扉を開けて妃那を追いかけた。廊下はしんと静まっていた。それを否定するようにふわりの動物の鳴き声が響き渡る。ふわりを落とさないようにゆっくりと廊下を

歩いてゆく。

「ついて来ないで下さる」

しばらく、歩くと妃那が見つかった。妃那はぶすくれて彼方にぼつりと言った。

>三<

寂寥感を孕むように風は暖かい空気を送り続ける。万物に必要な空気は芝生の上に何枚も座っていた緑葉を天空へと巻き上げた。それを目で追おうとする華奢なふわりの身体を彼方はぎゅっと抱き留めた。そして、鬱々しい顔を見せている妃那の座っているベンチに近づいた。遠くからは野球部の野太い掛け声が微かに風に乗って聞こえた。

彼方は話を急かさず、じっと、妃那の膝に重ねられた手を俯き見ている。

「駄目ですわね、わたくしは自分が劣っているからといってふわりさんに八つ当たりをするなんて」

妃那は唐突にそうぼそりと話した。

「その事ですけどね、妃那さん」

いつの間にか、チェックのスカート内に隠していたチヨコレートをふわりは彼方に見せびらかすようにひらひらと動かすが、五月蠅く感じて放って置いた。

「あなた、わたくしが嘘を言っているとお思いのですの？」

「ふわりはもう二度とあのまま、なんだ。ふわりはいつも笑顔をやさな良い子とか思われているけど……」ふわりの握っているチヨコレートの封を切ると食べるように彼方は笑顔で促した。ふわりはすぐに意図を理解して強く頷いた。「ううん。意図的に思わせようと僕、母、父で相談して決めただ。今、思えば残酷な事をしたんだ。それがふわりを守る方法だと僕らは信じていたから」

「どつ、いふ事ですか？」

「ふわりは永遠にあのままなんだよ」

チヨコレートを口いっぱい頬張ろうとにゃん、と唸っているふわりの口からチヨコレートを一端、遠ざけてから食べやすいようにチヨコレートを折る。随分と爽やかな音がした。その爽やかな音とは正反対に彼方の心は深く沈んでいた。

沈黙が二人を暫く、包み込んだ。ふわりだけは無邪気に彼方からチヨコレートの欠片を餌付けされて芝生の上を兎の真似のように跳び回っていた。にゃん、わんという交互に猫と犬の鳴き声が聞こえた。

「え、なんですか、それ？ あの素晴らしい音楽はなんだって言うんですの？」

「僕は奇跡なんて言葉は嫌いだし、もしあるのならばふわりを治してあげたいって切望するけど」自然に声が震えた風になる。まだ、喋らなくてはと懸命に話を続ける。「それも、僕が世界で一番憎んでいる奇跡っていう現象なのかもしれない。あるいは神様のきまぐれという奴かもね」

皮肉屋な笑みを浮かべようとした。けれども失敗して、代わりに引き攣った笑顔にデコレーションを施す涙が溢れてきた。この涙はコントロールが出来そうになかった。

妃那は立ち上がり、彼方にそっと、色気のない白いハンカチを手渡した。彼方が白いハンカチを広げて見ると、そこには大きな丸い字でおたんじょうび、おめでとうひなおねえちゃんとピンク色の糸で刺繍されていた。希灯児童養護施設の小さな子が妃那にプレゼントした品だろうと推測した。

これは拭けないや、と苦笑する。

「ふわりは永遠にあのままですの……」彼方から芝生の上に寝転がっているふわりに視線を移す。「詳しく、話して下さる？」

「勿論」と彼方は承諾してから話し始めた。「ふわりは僕と出会った時から変わらず、身長は伸びていないんだ。日本語よりも喋りやすい英語を喋ると興奮するようになったのは半年前からだよ。お医

者さんに言わせるとふわりは壊れてきているらしい。だから覚悟して下さい。いつ、安定が崩れるか解りませんって。よくゲームで大胆な奇跡とか、起きちゃうけど……あれは狡いよ、狡すぎる。僕は……ふわりの事を多分、母としてではなくて男として見ている。好きなんだ、けど……壊れちゃうんだ。明日かもしれない。今日かもしれない！ 起これよ、奇跡」

自分の涙に喉を詰まらせながら淡々と機械的に喋り続けた。嫌な事は全部、捨ててしまい、都合の良い事実だけ残ればいいと早口で言葉を並び立てた。

それを制止するように妃那は呼んだ。

「彼方」

雲が晴れたように我に返って、自分の身体に引っ付いている眠そうなふわりの顔を確認した。

「まあ、ふわり元気だからまだ、平気じゃん」

そう言ってふわりは目を「ごしごし」と擦った。

「肝心な事、話してないよね。ふわりは僕と出会う前……正確には父がふわりの退院と共に僕の目の前に現れて。あれ？ 可笑しいなそれは妃那も知っているんだっけ。言葉が纏まらない」

「ふわりが自分で話すじゃん」

「駄目だよ」

「お友達に自分の事を話すのは普通じゃん」

自分の掌に付着したチヨコレートの液を発見し、ふわりは嬉しそうに舐め取った。全く緊張感のないふわりに妃那は頭を下げた。

「ごめんね、ふわり」

その御免ね、の意味は妃那にしか解らないだろうと彼方はきつと複雑であろう妃那の心境が心の中にどしりつとのし掛かってきた。

ふわりは自分の睡で湿った掌を気にしながらも陽気に言う。

「ふわりは自分の事を全部、覚えていなかったじゃん。でも、まあにお迎えに来て貰ってまあを思い出して、まあから全部、貰ったわん」チエックのスカートを持ち上げて掌を拭きながら、「今

度はふわりがままあをお迎えするめえ」

とまるでその日を楽しみにしているように言った。

矢を放つが如く、

「お迎えしちゃ、駄目です。順番からすれば私たちがするべきですわ」

焦燥感の含んだ悲壮な声で言った。

セミが騒々しい声を上げるといふ仕事を始めた。それを掻き消す程の叫び声をふわりは突然、上げる。

「違うにゃん」言葉を切つて笑顔のまま、涙をぼろりと流す。「本当はままあと離れたくないにゃん」両手で蒼い瞳を隠した。「仕方ないわん。神様が意地悪しちゃっためえ」

雲一つ無い平和色に染まった空を手と手の隙間から見ているのだろうか、ふわりは上を向いていた。左目が正常さを取り戻したので、能力が熊形の眼帯に閉鎖された状態ではふわりの本当は見えなかった。

だが、僕には理解できるからこう言葉を掛けよう。

「ふわり、駄目だよ。悲しい事、言わないで。さあ、帰ってハンモクの上でお寝んねしよう。きっと、優しい夢が見られるからね。ふわり、良い子だもんね」

「まだ、大丈夫にゃん」

「ふわり！ まだ、なんて言わないでお願いだからね」

ふわりはそれに答えずにただ、にこにここと笑っていた。ふわりという少女が今は彼方には霞んで見えた。

霞んで見えている小柄な身体の隅々まで大切だった。すらりと伸びた腕。猫のシールを貼り付けてある指先。今日もすべすべなおでこ。みかんの形をした簪から元気よく跳ね上がった捻くれ一本毛。照りつける太陽にも負けない輝きを放つ金髪からぶくりとしたお尻に目を移す。気のせいかな、大きくなったように思えた。だが、艶やかな向日葵柄の着物の上からでもはつきり見えるほど胸は……なかつた。その箇所だけ僅かにシーツの乱れほどに持ち上がった。

百二十五センチの小さな身体はこれからも夢というご飯を沢山、食べて成長しなければならぬのに失われてしまうのかと、彼方の慟哭がなにも知らずに希望の蒼を見出している空を裂いた。

赤い鼻緒によって保護された白い足を慈しむように、彼方は中腰になり撫でた。ちびっちゃん影の手が伸びて動物の鳴き声で歌いながら、彼方の頭をゆっくりと撫でた。

彼方とふわりから遠ざかる足音がする。妃那の足音だ。

「矮小な自分の心がふわりを……だから、わたくしは……になれないんですわ」

足音が遠ざかって行き、ふわりと彼方だけが取り残された。

いつのまにかに、セミの鳴き声は消え去り、鳴いていたと推測されるセミが柔らかい地面の上で仰向けのまま、転がっていた。セミの周囲には無数の蟻が群がってセミが完全に息絶えるのを待っていた。

彼方はふわりが興味深げに凝視しているのに気付き、ふわりの目を塞いで誤魔化すように言う。

「だあれだ？」

「ふわりのままあにゃん」

彼方の目の前で一つの命が消え去り、無数の命を支える為に蟻達に仰々しく、担がれてゆく。その緩やかな蟻達の行列は胸を締め付けられる思い痛みを彼方に杭のように打ち込んだ。

ふと母、蜜柑の真意を理解してしまった。多分、そうなのだろう。それは優しく、残酷な生と……少女の残せる最後の美しさなのだろう。なんて愛おしくて恐ろしい思惑だ。目眩と共に残酷な希望が芽生えそうさだ。

七色に輝くセミの羽根が一枚、地面に転がっていた。

> 四 <

夜は深い。人が寝静まる暗闇の時間は長い静寂に包まれているはずなのだが今夜は違ふようさだ。彼方は諦めて楽譜選びを再開させた

のだが、彼方とふわりの二人だけが本来、利用している部屋である為、大勢押しかけると異様に狭くなる。こんなに狭かったのか、と何度か呟いてしまうほどだ。

今夜の特別ゲストは妃那、蜜柑、ぷりん、あけな、澄だ。あけな以外は欲を見せることなく善意の素晴らしい楽譜搜索参加者だ。

あけなは彼方の顔がお金に見えるとしても言うかのようにお小遣い下さいねと高飛車な笑みを浮かべていた。今夜も希灯児童養護施設を何処かの貴族のお屋敷と勘違いしている訳ではなく、素で言うのだから可愛いものだ。同姓ならば殴るであろうとも同時に思う自分なんて正直なんだろうと彼方は溜息を吐き、ハンモクから飛び降りたふわりを両手でキャッチする。

自分がとんでもなく、危ない行為をしたという事実をまるで把握していないふわりはバンザイしながら言った。

「にゃん、わん、にゃん。ままあの手伝いめえ」

「ふわちゃん例年以上にご機嫌？」

ぷりんは楽譜を探すのをわずか、十分に飽きてしまい、今や、絵本のページを捲るのに夢中だ。絵本の表紙には大きなタイヤの絵が描かれていた。ふわりがページ捲ってつまらないにゃんとコメントを残したタイヤの種類を紹介するだけの絵本だ。

「柚芽様も随分、落ちぶれたものね。まさか、あの後、記憶を無くしてあんな人間になっちゃうなんて」相変わらず、彼方には楽譜に見えない柚芽はハンモックの上で地上を観察するように見下ろしていた。「私、あいつ嫌い」

自己否定だという事に気が付いたのか、拗ねるように寝返りを打った。小さな背中が余計に小さく見えた。

現時逃避の目視旅は終わりにして、目の前の楽譜の山に手を付ける。山は当然のように崩れ始めた。どうやら、地盤が緩んでいたらしい。

彼方が暢気に考えていたら、ふわりがうきゅーという謎の動物声を上げながら彼方の腕からじたばた動いて、楽譜の川に飛び込んで

いった。

ふわりが一枚、総譜を彼方に渡す。総譜とは全ての楽器の楽譜を全体像が掴みやすいように記した主に指揮者が扱う楽譜の事だ。先ほどから数々の総譜を眺めて、様々な楽器の動きを把握しながら頭を抱えている。ただ、格好いいという理由で選択してしまえば、何度は高くなってしまう。難度にはプロさえも誰も奏でられないSSランク、一部の優秀なプロの領域であるSランク、アマチュアバンドには最適であるとされるAランク、学校世界国際コンクールには最適だとされるBランク、高校生のバンドが奏するには最適だろうというCランク、中学生のバンドや練習にはこれだ！ というDランク。

手渡された楽譜を眺めてみる。フルートのクレッシェンドに対して、トランペットが威勢良く吹いてしまいがちな五連符。

「練習すればするほど、このくらいの連符は吹くのが快感になるからな」

彼方自身、数年もの間、一度もトランペットには触れていない。不安はあるが……音域自体は基本の音域だ。この程度ならばDランクに位置するだろう。問題は同じ連符の九連符が何フレーズも続くフルートか。リズムを感性に頼る彩夏では客観的に観ると困難だろう。だが、神懸かりなので蓋を開けなければ解らないという面もある。

「うーん、これなんて」彼方が唸り声を上げながら思索していた総譜を彩夏に差し出す。彩夏はすぐに手を伸ばして、「うげえ」

不味い食べ物を吐くような声を吐いた。ふわりがそんな声を出したとしたら、一時間説教コースの女性らしからぬ低い声だった。

「おい、連符が多いぞ。レベル高いじゃないか」

「あら、連符だけならば、バレないようにブレスを吐けば突破可能ですわよ」

何年か、前の学校世界国際コンクールの音楽学校部門で堂々と一万の観客と十人の審査委の目を欺いた妃那が得意げに言った。前日、

ブレスをばれずに呼吸をする時の表情まで練習する妃那の姿は馬鹿馬鹿しくも見えた。鏡の前で無表情を装っていたのだから。

彩夏の手から無理矢理、総譜を奪い取って深い溜息を吐いた。意地悪な構造に気が付いたらしい。

「トランペットも問題ね。連符の後の休符を置かないですぐに始まる静寂という表現を音で表さなければならぬ点。ふわりさんに可能かしら」

プロならば、ブレスを配分する事を頭の片隅に置き、それを実行する事が可能だ。弛まぬ努力がその域にまで駆け上がらせるのである。

そんな技巧を彼方ならば可能という様ににやりと微笑んでいた。反論したならば楽しみにしてますわよ、と強制的に決定させられるに決まっている。音楽において妃那は昔も今もライバル視している。助けを乞うべく、これ十五の時にトランペットとフルートでやったわと一人盛り上がっている蜜柑の肩を叩く。蜜柑はSSランクの宴 楽園にてというトランペットの楽譜をディスプレイの上に置いて彼方の方に座り直る。

彼方は視線で宴 楽園にての楽譜と蜜柑を交互に有り得ないと訝しげに見つめながら、口は先ほどの総譜について語る。

「トランペットですけど、客観的に言いますと九連符で崩れる可能性があります。母が吹いてくれれば格好だけならば何とかかなる。ですが……」

「掻き消せてつて事、彼方ちゃん？」

蜜柑のほんわかした声とは思えないぞつとするような高く鋭敏な声が室内に響いた。彼方の背中に毛虫が何匹も走った。

蜜柑はしばらく、彼方を見つめた後、咳払いをした。そして、いつものほんわかとした穏やかな声が彼方を包んだ。

「ふわりちゃんと彼方ちゃんの婚約正式決定記念のトランペットペアに私が入るわけにもいかないわ」いきなり、不真面目になる母、蜜柑元トランペット奏者に彼方は激しく心を惑わされる。「いや、

母が勝手に決めていただけであつて」母、蜜柑は何も聞きませんといや、何も聞いてませんと両手を蛍光灯に翳して、独特な倒錯した呪いの詩を披露する。「ああ、愛という灼熱の砂漠でこんがり良い感じに焼けて、灼熱砂漠の地中に生息する閻魔様に食べられてしまふ」お話になりませんわと前置きしてから妃那が彩夏から総譜を奪つて楽譜の川に沈めた。「そんな不完全な演奏をお客様にお聴かせできませんわ」その間も母、蜜柑の呪いの詩は続く。「愛というのはとかく、恐ろしい情景を生み出すパンドラの箱なのよ」彼女は楽譜の川を指して、「じゃあ、これは却下ですね」母、蜜柑の呪いの詩は哲学の領域にまで迫ろうとする。迫るなあ、母と心で泣きながらも彼女は現実の世界に身を置く。「勿論、パンドラの箱の中にはふわりちゃんと彼方ちゃんの子どもが入っているのよ」母、蜜柑の呪いの詩がエセ神話に到達したのも気にせず、妃那が彼方に同意する。「そうなりますわね」母、蜜柑の根拠のない詩にふわりが縋るように膝を付いて蜜柑を崇め奉る。「ふわりは子ども百人欲しいわん」ふわりの着物の帯を掴んで自分の膝の上に載せて、彼方はふわりの蒼い瞳を眺める。「母の相手をしてはいけません。ふわりもほら、考えて」ぷりんが音もなく寄つてきて彼方の耳元で、「ぷりん子ども二百人」蜜柑は彼方の赤面した顔を指して、「そして、それこそが希望です。そんな理由で二人でやるべきよ」彼方は反射的に、「ネタですか？」蜜柑は首を傾げて、「つまんない？」彼方は深く頷いた。「はい」

蜜柑は彼方に擦り寄る。耳元にはぷりん、真横には蜜柑、膝の上には欠伸をしているふわりと一気に人口密度が高くなり、人が放つ熱で汗が溢れてきた。

「だって、だって母、嬉しいだもの」

心臓が破裂する前に彼方は蜜柑を手で押しつけた。

「認めてないですよ、僕」

認めないも何もない。母、蜜柑が勝手に裏庭での会話を盗み聞きしてノストラダムスの大予言並みに拡大解釈しているだけではない

か。彼方はほんの少し、不機嫌になった。可愛らしく、頬を膨らませてみる。

「彼方ちゃん、真面目な話だけど」

「真面目な話でしたら、後にして下さい」

「真面目な話、お金くれれば代わりに聞くよ、お兄ちゃん」

両手を差し出した。彼方はそれに対してお札を握り締めないであけなの手で自分の手を沿えた。

「はい、二億円」

黒い透き通ったあけなの両眼と蒼い彼方の右眼が沈黙を交わした後、あけなは急に倒れてお腹を押さえて丸くなった。

「すげー、宝くじだああああ」そう言って飛び起きる。「って言うかあ！」

あけなの叫び声に呼ばれたかのように澄があけなのTシャツの襟をぐいと掴んでそのまま、引き摺った。じたばたと足を懸命に動かすあけなに澄は容赦が無かった。

「はいはい、楽譜探しましょうね」

「待てくれ、まだ、マイ マナーがあ」

彼方は生暖かい目で彼方の周囲にある楽譜の川から、他県の楽譜の川へと連行されるあけなのスカートから覗けるレディーな黒いパンツを眺めた。疲労感と共に何をしているのだろうと空しさが込み上げてきた。

「待ちません！」

澄の声が室内中に響いた。騒がしいのは希灯養護施設の名物と言っても過言はないので深い感慨はない。

「彼方ちゃん、真面目な話するよ」

母、蜜柑は未だに諦めていなかった。

「後にして下さい」

母、蜜柑の真面目な話ほど、宛にならない。それは誰もが承知していた。正確に言うとな彼方の両親の真面目な話ほど、宛にならないと希灯養護施設の子ども達の間では数々の苦い経験によって強制的

に思い知らされていた。

例えば、ぷりんとふわりに対してクリスマススイブにサンタさんが来るわよと神妙な顔をして言ったある冬の事。勿論、大人であるサンタ幻想主義派の彼方や妃那、現実派の澄は来ないよと口を揃えて言った。だが、幼子の部類に入るふわり、ぷりんは一日中、蜜柑の言葉を信じていた。帰宅した彼女たちを待っていたのはサンタの赤々しい趣味の悪い服を着ようとしていた蜜柑の姿だった。蜜柑はメリークリスマスとぷりん、ふわりに言った。それから二人とも、今もサンタは蜜柑の事なんだと理解している。その日を子ども達の間では偽サンタ生誕の日と呼ばれている。

思い出し笑いを彼方が浮かべている。

柚芽はずっと沈黙のまま胡座を掻き、御菓子のかげツ付近にある総譜の山を睨んでいた。その瞳には一種の不安と悲しみのようなものが同居しているように彼方には思えた。

柚芽と目が合う。女兒らしい優しい目をしていた。それでも負の感情に溢れているのだからふわりといい、ぷりんといい、不思議なものだ。彼方には無邪気な者達の瞳の中にある本質が理解できなかった。

彼方と目の合っていた柚芽が顔を赤くさせてそっぽを向く。

「この人達、楽譜探す気あんのかしら」と顎に指を沿えて、「待てよ。さすが、柚芽様」柚芽は静かに笑う。「むふりい」
「笑い方、邪悪」

疲労のあまり、ぷりん喋りになった。ぷりんが言うにはこの方が喋るのが楽らしい。助詞を考える必要性がないからだろう。

ぷりんは自分の言葉を真似られたのが嬉しいのか、調子に乗って両肩によじ登り、ふわりの一本捻くれ毛を弄ぶ。

「ぷりん真似るの、お兄たんなら許可」

「パパあ、柚芽が今から口にする事を五線譜に書いて下さいね」

柚芽が机を指した。机にはパソコンという文明の利器はない。彼方の顔が歪んだ。多分、手書きの五線譜の前に向かって、開ける明

日という時間をディープに堪能できるだろうと予測できた。それとまだ、気掛かりな事がある。それを臆する事無く、口にする。

「え、まさか。君自身が？」

「良いアイディアでしょう」

周囲を見回す。みんなが説明しろ、という怪訝そうな顔をしていた。彼方は説明をするべく、机の上においてあるノートを取り出した。そのノートには柚芽というタイトルが付けられていた。彼方が昨日、彩夏から渡されたノートだった。彩夏の勧めにより、そのノートで柚芽の重要な会話を採集している。まるで二十四時間勤務の翻訳家にもなった気分だ。その真つ白なページの片隅に柚芽が曲を作るらしいと小さな字で丁寧に書き、みんなが見えるように両手で掲げた。

「そうだね。どんな曲になるのか、若干不安だけど」

楽器がかつて吹けたからといって、優秀な作曲が出来るとは限らない。作曲をするという事が短時間で出来るはずはない。彼方は若干ではなく、大いに不快に溢れた顔をわざと柚芽に向けた。

だが、柚芽は呆けた表情でじろつと彼方を見つめた後、深く頷いた。疲れたサラリーマン風の吐息がここまで聞こえてきたのは気のせいだと彼方は思うことにした。

小さい子に馬鹿にされるのは何だか解らない件だとしてもかなり、惨めじゃないか。

「柚芽様は数多の楽器を自分の手足のように動かせるんですよ、お茶の子さいさいです」

彼方は早速、先ほどの書いた文字の下にノートの枠を全て利用した規格外の文字を書き込んだ。柚芽が自分に任せらだつてさ、という文字を食い入るようにつめた蜜柑は拍手で賛成した。蜜柑が賛成すると他のみんなも賛成せざるを得なくなり、頷いた。

「おい、様子見に来てやつたぞ！」

陽気な声を喧しく辺りに飛ばし、襖を開いて彩夏が姿を見せた。

彩夏の両手は大量のアイスクリームが入った袋を提げていた。その袋を無理矢理、彼方の胸に押しつけた。彼方は苦笑いを浮かべて、「ありがとうございます」

「これで今日、手伝えなかつたのはチャラなあ」

と彼方の両肩を揉んだ。力強く、揉んだ。軋むような音が両肩からするのは紛れもない事実のようだ。痛さに顔を歪めて、膝の上にいるふわりにアイスを手渡す。アイス頂戴とやってきたぷりんと一緒にふわりはアイスの品定めしを始める。

ぷりんは悩んだ結果、実は卵も入っている雛な林檎バーを選び取った。新発売だと喜んでビニールを破る。あけなが横でいいなあと言いながら、ふわり専用の御菓子に入ったバケツを両手で抱えていた。

そんな幸せな光景を定年退職後のじいさんのように暖かな眼差しで見つめ、

「それとこれとは別ですよ」

と彩夏に言った。当然の報いだとはかりに両肩に圧力が加わる。大人げなくも相手は本気のようだ。いや、そうでもないかもしれない。過去の器物破損事件から勝手に推察するならば、彼方の両肩は粉粉に砕けて現代医学でも再生不能な結果に終わるだろう。消火器を廻し蹴り一撃で凹ませるような彩夏の実力を侮るなんて愚かだ。あの時はふわりをいじめた男子生徒を懲らしめる一撃だったのだから彼方としては是非とも当てて欲しかった。ふわりを愛護する会の生徒会長の情報により後にわかった事だが、ふわりをいじめて怒らせて罵りの言葉を貰いたいという特殊な性癖の持ち主だったようだ。

そんな思い出の走馬燈な映像が彼方の瞼に引っ付いた。ふわりは弱酸性チョコレートパフェを選んだ。弱酸性という言葉に彼方は首を捻ったがギャグだろう。いつも、彩夏が御用達にしているアイス会社ドナドーの商品名はこのような無駄に無駄を重ねた壮絶な詰まらない一部の隙のない詰まらないの押し売りだ。

蜜柑は寒サムさんのペンギンバーというペンギンの形をした緑色

のアイス、あけなは唇がアイスに付着する程、上手いメロンカップというメロン味のアイス、澄はわりと普通のショートアイスという莓味のアイスをそれぞれ選んだ。

「そろそろ、僕たちもアイス食べませんか？」

「そうだな、何やってんだろうな、俺達」

二人で覗き込んだ。残っているのはソーダアイスボールとモンブランカップだった。割と普通のタイトルだが、彼方と彩夏は顔を見合わせた。

「何ではずれを持ってくるんですか。普通のタイトルははずれだつて前に彩夏さんが」彼方の言葉の前を割り込むように彩夏が怒鳴る。「仕方ないだろう、適当に入れてきたから俺はソーダアイスボールを選ぶぞ！」

とソーダアイスボールを選び、一気に口に含んだ。羨ましいくらいに天に召されてしまうような笑窪を彩夏は浮かべた。それを眺め見て、自分の数秒後の将来は明るいと確信してモンブランカップに挑む為にビニール内に入っていた木のスプーンを取り出す。

「さあ、食べよ、少年の皮を被った少女よ」

「僕は少年ですけど」

自分の薄黒いネグリジェ姿を目で捉えながら、少年という部分を強調して彩夏に言った。彩夏が眉を潜めてネグリジェを無言で観察していた。一年前、ふわりの母になる為に初めた女装だから彼方としては誇りを持っている。堂々と彩夏と対峙した。

「え、そうだったの。彼方ちゃんいつの間に、私……少女か、と」彼方の実母から思い掛けない言葉が飛び出す。大きく口を開けながら固まっていた。緑色に染まった舌がヒクヒクと動いていた。

「母、僕は」

「彼方ちゃんはおにゃのこよね？」

蜜柑のはにかんだ笑顔から覗く歯が彼方は愛おしく思えて、その同意しろという誘惑に囚われた。

「はい、そうです」彼方が弾んだ声で答えた。それと同時にあけな

が意味深深く、「マザコンか」澄がそんなの前からだろうと、「マザコンね」ふわりが彼方の頬に頬摺りして「マザコンにゃん？」

ふわりの頬の感触を覚え照れながら、モンブランカップの真っ黄色な大地を木のスプーンという名の掘削機で削り取り、大地の恵みを味わう。

大地の恵みは、吐きそうなくらい苦い。人間という下等動物には味わう資格はないとモンブランカップは言っていた。

「何、これ……アボガドじゃないか」

口を押さえて襖を開けて、お風呂場の隣に隣接しているトイレに駆け込んだ。トイレの蓋を開けて、一気にアボガドの固まりを便器の水に向かって落下させた。

「まあ、死んじゃヤダ。ふわりはもう独り嫌だ。静かなお部屋に行くの嫌だ。お医者さん嫌い！」

ふわりの英語と共に、背中に小さな暖かみを感じた。

白い泡を立てて濁っている黄色いトイレの水に悲しい彼方の顔が浮かび上がった。

死んじゃうかもしれないのはふわり、君だよ。

「まあ、愛してる。ふわりはまあと一緒にいたい」

英語で話し続けるふわりの身体が微かに軋んだような気がした。

それは彼方の感傷が生み出した幻なのだろう。それでも、こう言わずにはいられない。

「勿論、僕も。一緒にね」ふわりの顔を見ようと振り向いたが、ふわりは彼方の背中に張り付いたままだ。「驚かせてごめんね」

「まあ、ちゃんと流すにゃん」

という非難の声と共に水の音がした。アボガドの固まりだけではなく、見えない人の悲しい予感まで水に流してくれるのなら、どんなに人は楽に生きる事が出来るのだろうか。いや、生きることが苦痛を伴わなければ成立しないのかもしれないと彼方は感傷に溶け込んだ。

「ふわり、そのままでは居て。背中がとても寒いんだ」

背中に猿のように引つ付いたまま、眠るふわりの事を気遣い、子ども部屋から小さな机を借りてきて彼方はその前に胡座を掻いていた。

電気スタンドによつてもたらされたオレンジ色の光をもう、三時間以上も長々と見続けていた。ふわりの寝息と壁際に飾つてある小鳥が上に乗つかった時計の奏でる音が、交互に彼方の耳に優しく入り込んでくる。

もし、それらの音が言葉を発する事が出来るのだとしたら、彼方さんこんばんはと鈴の音のような女の子の声だろう。

そう現実逃避を試みた彼方の脳を揺さぶるように柚芽の声が響く。「ぱぱあ、そこ、」

柚芽の服装はいつものではなく、何故か、軍服を着ていた。軍服とは勇ましい勇士達が着込む戦闘服だ。当然、格好いいというイメージが彼方の心にはあるのだが、柚芽のそれは子どもがごっこ遊びしている可愛さだった。

「どうやら、左目がまた、悪さをしているらしい。きまぐれだ。」

「なんだか、めっちゃ、辛いよ」

複数の縦線が引かれた総譜の中に柚芽の指示通り、 を入れた。

右目の疲労は限界が来ている。左目を塞いでいる眼帯を取り、机の上に乗いた。

「そこに じゃなくて、トランペットの楽譜の方に。後、ホルンの楽譜にデクレシェンド入れて」柚芽の指示を聞き逃さないように、全神経を目と手に振り分けながら作業を進める。柚芽の手が彼方の視界に現れてピースサインを作った。「うん、柚芽様色になつてくね」

「そつそつ、曲名はゆめにするよ、パパあ」

「夢？」

「そう、ゆめ。でもひらがなでゆめ、ね」
カチカチ。

すうーすうー。

カチカチ。すうーすうー。カチカチ。すうーすうー。カチカチ。すうーすうー。

ふわりと時計の子守歌は想像以上に彼方のやる気を削いでゆく。欠伸をしながら両眼を擦った。水分が目に入って激痛が走った。

両眼を押さえてその場に転がろうとしたが、背中に感じる元気の源のことを思い出して留まった。

また、しばらくすると身体に異変が訪れた。ノックするという礼儀作法を守らずに肩へと上がってきた。

「肩凝るなあ」背伸びをして無礼者を追い払おうとしよう。「うーん！」

「ぱぱあ」疲れたのだろう、柚芽も欠伸をしていた。顔色も少し悪い。こちらまで聞こえるほどの一息の後、言った。「休憩しましよっう？」

「良いの？」

「まだ、フルート、クラリネット、チューバ、ユーフォの楽譜が残っていますからね」

柚芽はにたりと笑い、残酷な言葉を吐いた。

時刻は深夜二時二十六分を指していた。

「その微笑み、今は悪魔のように見えるよ」

その言葉を残して、ふわりを背中から落とさないようにゆっくりと立ち上がった。そのまま、暗い部屋を移動して襖を開けた。

「ふうー」息を吐くでもなく、息を吐いたというような言葉を口で表して電気のスイッチを指で軽く押した。

光と共に目が冷蔵庫を捉えた。思わず、目が見開かれる。目的のものはここにある。

「肩凝って大変なあ。さてと、ジュースでも」冷蔵庫に手を伸ばそうとした時、ひんやりとした肉球に腕を掴まれた。「うおお」

彼方は思わず、男らしくない高い声で叫んだ。

肉球から辿って、子猫の顔へと彼方の目は辿り着いた。真ん丸顔の子猫は長い髭に毛が金色に輝いていた。

「驚いたあ。驚いたあ」くりくりとした蒼い瞳が彼方を捉えて母、蜜柑のわんぱくな声が響いた。「さあ、飲んで」

蜜柑が栄養ドリンクを彼方に差し出した。彼方はお辞儀してから、栄養ドリンクを受け取ってラベルをまじまじと見た。

砂糖ドリンクと書かれている。思いつきり、身体に悪そうだ。

目を瞑り、勢いよく上向きで飲んだ。ドロツとした物体が舌に載り、甘味が怪獣のように喉内で暴れ出した。

何だ、これと思ったが人の好意を無下にしてはいかないとね彼方は大袈裟に高笑いをした。

「はあ」空しさに溜息が出た。「美味しいですね。砂糖が多すぎやしませんか？」

「甘いものは疲労回復に優れているんですよ」
むしろ、思いつきり身体に悪かった栄養ドリンクの瓶を流しに置いた。

「ありがとうございます、母」
左目を右手で塞いでからそう言った。

母、蜜柑はいつもの整然とした大人独特の美顔でちよつと子どもっぽく微笑んでいた。だが、その笑みは翳りを見せ始めた。

「彼方ちゃん、お話良いかな？」

笑いもせず蜜柑は彼方に向き直る。背中にいるふわりの熱がその話を聞く勇気を彼方に与えた。俯いたまま、神妙に彼方は応える。

「逃げられないんですね」

「ふわりちゃんは自分の死を受け止められるようになったのね」
彼方は蜜柑の言葉に頭を上げて、何度も蜜柑の言葉を反芻した。

ふわりはあの時以前、自分の死を誤魔化す傾向があった。死んだ蚊に対してバイバイと言うような無垢な殻に閉じこもっていた。あの時、ふわりが見ていたセミの最後に特別な感情を抱いていたのは

違いなかった。逃避から認知に変貌した。それはなんて、悲しいんだらう。悲しみが悲しく見えないのは、痛みを痛みとして分かち合えないのと同様だ。

そんな激しい奔流までも蜜柑にぶつけるように怒鳴った。

「見ていたんですか、母！」

「怒らないで」

宥めるように両手をワイパーみたいに蜜柑は動かした。だが、表情は子どもの些細な悪戯を暖かく包み込む母性に満ちていた。

ふわりの体温の暖かさと同様の優しい熱を彼方に与えるが、今の彼方には受け入れがたかった。羞恥と怒りが込み上げてきた。

そんな彼方に話を合わせる事もないというようにそそくさと話を進める。

「たまたま、父さんの所に用事があったのよ、第三回希灯音楽祭の開催に関する書類を届けにね」

「戦争以来、人が集まらないのにですか」

当然だ。政府の意志を無視して母、蜜柑は事実上、攻防戦争を終結させてしまった人だ。今の日本人からすれば、最大の敵が葉瀬蜜柑という事実がある限り、彼らはこの島へは足を運ばないだらう。ここに住んでいるのは葉瀬蜜柑の賛同者達が大半だ。

そして、島に捨てられた子ども達。まるでゴミ箱にゴミを放り込むように捨ててゆくんだ。

狂っている。狂っている。世界は元からどうしようもなく、狂っている。

彼方はそれらを籠めてぶすくれた顔でそう言った。だが、人の心は伝わるはずがないと彼方は同時に唇を噛み締めた。

「ええ」

その短い一言を言うのに蜜柑は数秒を要した。重い重い一言なのだらう。

「本題。彼方ちゃん、ふわりちゃんと婚約しなさい」苦しい顔でこの人は苦痛などこの世にはありませんと嘯く幸福を与えようとする。

彼方はそう思った。その瞬間にも蜜柑の独り善がりな偽善論は続く。

「あの子の生きた証を作ってあげなさい」

「断ります」

ふわりの瞳が覗ける位置にふわりを抱き直す。そして流しに背を滑らせて、冷たい床にお尻を付けて座った。下を向いてふわりが油性マジックであ、い、う、え、おと山道にある歪なカーブとも見える字を眺めた。

これはふわりが一年前、ひらがなを覚えて得意げに書き回っていた頃の痕跡だ。落書きではなく、そこには未来がある。

「ふわりはまだ、生きます。あの子は大丈夫だって言っていました」

ひらがなのあ、い、う、え、おの上にはそれがあった。

妃な、あや夏、ぷりん、澄、あけな、ままあ、みかん、雄大……

と施設の子どもの達の名前が後に続く、最後に大好きと一ヶ月前のふわりは油性マジックで書き込んだ。

彼方は急に可笑しくなり、大いに笑った。

笑う門には福来たる、縋りたくなる。そんな御伽噺に、と頭の中に誰かの囁きが聞こえたような気がした。

神様のきまぐれ 三

神様のきまぐれ 三

>—<

私の願いを今、聞き届けた。それは私の願いでもあり、私の願いでもない。全ては空虚で出来ている存在。葉瀬という一族が魔女から受け継いだ人の本質を視る力……神様のきまぐれにしか過ぎない力の一つ、それが私。今は彼方という少年の左目に宿っている。彼は何かと私を邪険にする。

美人ならば、彼方は喜んで私を受け入れたらだろうか？ それとも、ふわりのようなお子様体型の方が受け入れやすいのだろうか？ どちらにしても否、だ。

私には身体という概念が存在しない。私の足は何処までが足なのか？ 私の手は何処までが手なのか？ そもそも、顔はあるのか？ ないのか？ という思考の迷宮にしばしば迷い込んでも答えは永久に見つからないだろう。

だから、意志のみが移動する。

彼方の左目からそっと、抜け出そうと試みた。いつもならば、見えない壁に当たる所だが壁はなかった。

襖を擦り抜けて暗い部屋に出た。暗い部屋の太陽色の明かりを目指して飛んでゆく。

その光の真横には小さな軍服を着た少女がいた。少女は額に浮かぶ汗を何度も拭いながら、机に仰向けになっていた。

軍服は水分を吸いすぎて着心地が悪いと判断したのか、一瞬のうちに紺色のジャージに衣替えした。

「笑う門には福来たるだよ、柚芽ちゃん」

彼方の言葉を拝借して私は気楽な意志を飛ばした。けれども、意

志は柚芽の周囲まで来ると周囲を一周して私に返ってきた。やはり、心 言葉でないと他者と通じ合う事、認識し合う事は出来ないようだ。

柚芽はのろのろと立ち上がる。足がくの字に曲がっているのが痛々しい。

「まだ、まだ、だ。やっぱり、そうなの。偽物なんだ、柚芽様」がくんと頂垂れた。後ろ髪の金色が人の太陽に照らされて、びくりと動く様が強調された。「あっはははは！」

両端を口が裂けたように広げて、壊れた玩具のけたたましい音が柚芽の口から漏れた。

慌てて柚芽の所へと駆け寄り、柚芽の身体を抱きしめようとした。心配ないでと、抱きしめようとした。柚芽の震える背中に手を掛けようとしたが何も掴めず、空さえも掴めなかった。

仕方なく、励ましの意志を飛ばす事にした。

「違う、違う。悲壮感漂う笑いでは福なんて来ないよ」そう意志を飛ばしたが跳ね返された。「あれ？ 福ってなんだろう。確か、生き物にとって嬉しいっていう事だよ、きっと」

私は独り意志を飛ばして、虚しい独り質疑応答をした。人間には奇妙に思えるが神様のきまぐれは独りが常である為、こちらが通常だ。

柚芽は何度か、痙攣したような笑い声を出した後、涙を流してわざとらしい溜息を吐いた。胡座を掻いて正面を見据えた。

悲しみの水に濡れたキラキラした蒼い瞳が私を捉えた。

「でもね、私だってここに居るんだから」

神様のきまぐれである私を通して、全てを創造したと勝手に人間に解釈されている神様に訴えているようだった。

そんな真摯な瞳を見つめていると伝わらなくても意志を飛ばしてみたくなった。

「他の子は楽譜を書いた人の残り香。だから消えるのが早い。柚芽ちゃんは人の本質の一部。本当の方のね」柚芽は胡座を掻いたまま、

無表情だった。それもそうだと私は首を横に振って、「残念。伝わらない、私も無力だよ。私であつて私ではない神様のきまぐれさん」彼方が左目を気にし出したようだ。私は見えない力によって彼方の方へと引き摺られてゆく。たださえ小さな柚芽の姿がどんどん小さくなる。遠ざかつているのだ。どんなに話したいと思つても叶わず、どんなにまだ、居たいと思つても叶わない。

私は私ではないきまぐれなのだから。私は私でもあるが叶わない。ありつたけの意志を絶望の色の下に、独り佇んで居るであろう柚芽に向かって飛ばした。

「うんうん、違う。きつと……最後はハッピーエンドで終わらせてあげるから。奇跡は起こせないけど、始まりを貴女に連れてゆくよ」私は初めて声というモノを発した。それは柚芽に届いただろうか？襖へと私は吸い込まれてゆく。後方から声が聞こえた。

「ままあ、狡いにゃん。ふわりにもジューズわん」

「はいはい、何ジューズが良いの？」

我が儘を言うふわりに対して彼方は緩やかな風を含んだ声で質問した。

ふわりは動物の鳴き声を発しながら悩む。

「びーる、とかいうのが飲みたいめえ」

「駄目」

直ぐさま、鋭い声が彼方の口から飛び出した。どうやら、ふわりのビールへの好奇心を完全に殺したいようだ。ふわりは抗議するように猫の愛声を放つ。

この中に柚芽はまだ、存在できる。だから……。

もう、一度だけ、声を！ と声を出そうとしてみた。

「ふわりと彼方にまた、会えるよ。私は神様のきまぐれ、けれど人の本質の交わりをどうにか出来る程ではないの」

声ではなく、意志がそこら中に飛び交った。意志では誰にも伝わらない。

私は何も果たせないまま、彼方の左目の中へと収まった。

次に外へと放たれるのはいつ頃だろうか？
それは神様のきまぐれと同じ何者かのきまぐれのみぞ知る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1861z/>

ふわり、舞う彼方の柚芽

2011年12月11日10時50分発行